

Hitohanaproject Report 2014

西成区単身高齢生活保護受給者の
社会的つながりづくり事業

ひと花プロジェクト 事業報告書2014

2014.4-2015.3

<http://www.hitohanap.org/>





2014年度
西成区単身高齢生活保護受給者の
社会的つながりづくり事業
ひと花プロジェクト 事業報告書
2014.4 — 2015.3

もくじ

2	はじめに
4	ひと花プロジェクト活動マップ
6	ひと花 プログラムについて
12	ひと花メンバーの1日
15	ひと花センターの1日
16	プレーパーク 座談会
18	地域の声
20	表現プログラムワークショップ紹介
22	「美術の時間」の1年
24	ある日の「詩の時間」
26	ある日の「書のワークショップ」
28	ひと花笑劇団 座談会
32	ひと花 写真集
34	ひと花プロジェクト シンポジウムトークセッション
38	2014年度ひと花プロジェクト調査報告 稲田七海
38	登録者実態調査
69	分析
78	地域の方への調査
94	調査結果から今後の事業の継続性を展望する 水内俊雄
96	事業概要
97	ひと花新聞 第10号～21号
122	ひと花センターの1年
123	ひと花プロジェクト データベース
124	ひと花音頭



西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業
ひと花プロジェクト

高齢化、生活保護、孤立

65歳以上の割合が、37%を超える大阪市西成区。特に、寄場として高度経済成長期を下支えする労働力が全国各地から集まったあいりん地域では、当時働き手であった単身労働者が高齢化。多くが仕事を失い、現在は地域の3人に1人が生活保護を受給しています。働く場を失うことで、人との関わりや生きがいも失い、もてあます時間や孤独を埋めるためアルコールやギャンブル、薬物などへ依存する方の存在も見られます。また、地域の中では孤立した高齢者の孤独死が頻繁に起こるようになりました。一方、商店街ではシャッターが目立ち、今まで行われてきた地域の清掃や祭りなどの行事を存続できないといった状況があります。

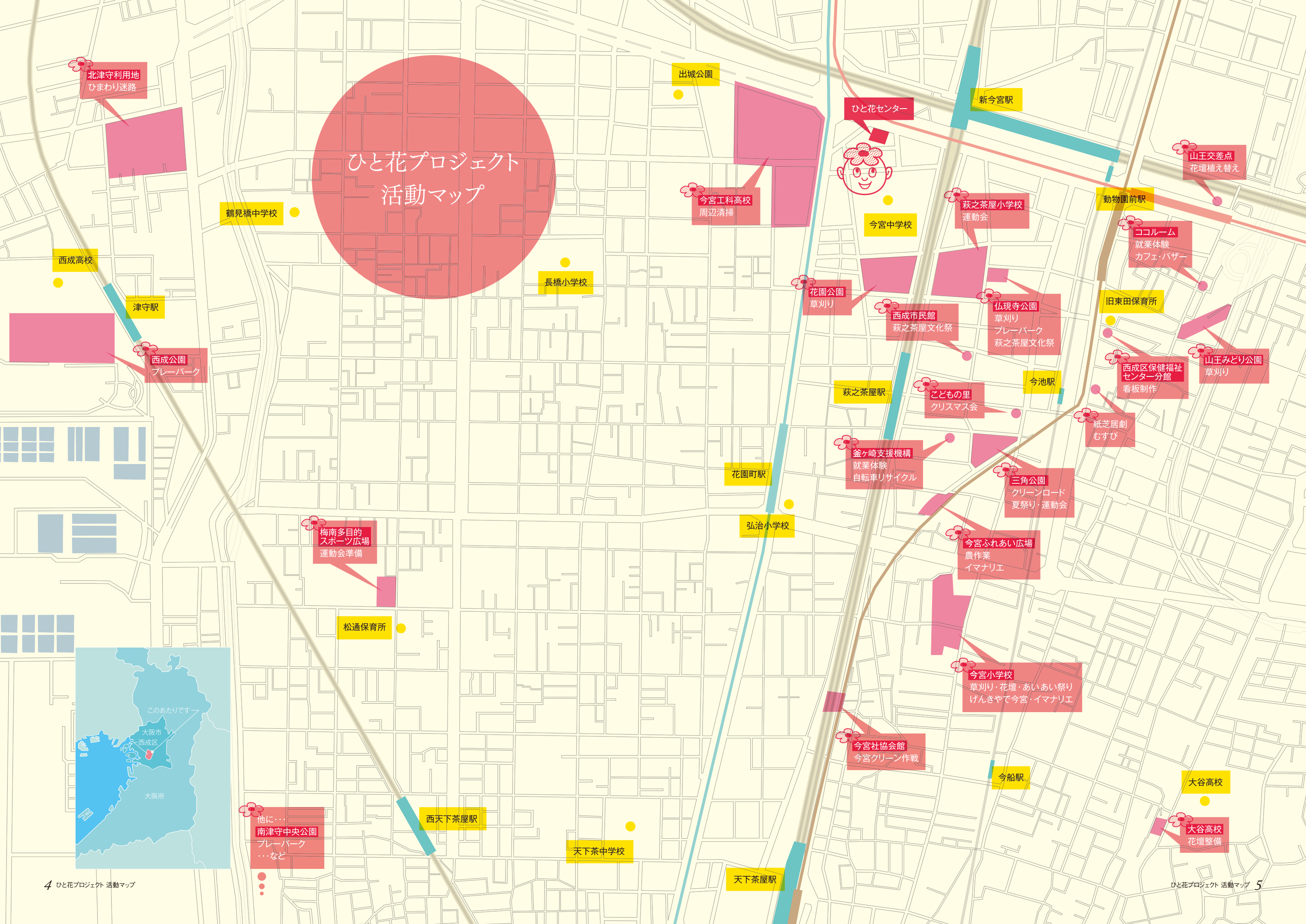
* * * * *

まだまだ元気だけれど、つながりがなく孤立している単身高齢生活保護受給者と、魅力あるまちづくりを行いたい人。双方をつなぐ接点になることができないだろうか…。

このような背景を受け、「ひと花プロジェクト」はあいりん地域にて単身高齢で生活保護を受給している方の社会参加、および生活支援のプログラムを行う事業として2013年にスタートしました。事業を通じて孤立を防ぎ、地域・社会とのつながりをつくり、ひとりひとりがいきいきと暮らせるよう、またそれによって地域もいきいきとなるような活動をめざします。

このプロジェクトの拠点となるのが「ひと花センター」。もと愛隣地区歯科診療所跡地を活用し、登録メンバーの日々の居場所や地域とのつながりをつくるプラットフォームとして、また生活や心身を整える場として、毎日さまざまなプログラムを行っています。

※あいりん地域（釜ヶ崎一帯）データ＜2014年8月13日更新＞より。



ひと花プロジェクト 活動マップ

北津守利用地
ひまわり迷路

鶴見橋中学校

西成高校

津守駅

西成公園
プレーパーク

長橋小学校

出城公園

今宮工科高校
周辺清掃

ひと花センター

新今宮駅

山王交差点
花壇植え替え

動物園前駅

ココルーム
就業体験
カフェ・バザー

旧東田保育所

山王みどり公園
草刈り

西成区保健福祉
センター分館
看板制作

紙芝居劇
むすび

今池駅

西成市民館
萩之茶屋文化祭

仏現寺公園
草刈り
プレーパーク
萩之茶屋文化祭

花園公園
草刈り

萩之茶屋駅

こどもの里
クリスマス会

釜ヶ崎支援機構
就業体験
自転車リサイクル

三角公園
クリーンロード
夏祭り・運動会

今宮ふれあい広場
農作業
イマナリエ

今宮小学校
草刈り・花壇・あいあい祭り
げんきやで今宮・イマナリエ

今宮杜協会館
今宮クリーン作戦

今船駅

大谷高校

大谷高校
花壇整備

天下茶中学校

天下茶屋駅

西天下茶屋駅

梅南多目的
スポーツ広場
運動会準備

松通保育所

他に・・・
南津守中央公園
プレーパーク
・・・など



社会参加 プログラム

地域活動

公園や公共施設の草むしり、草刈り、周辺地区の道路清掃、花壇の花植えなど地域をきれいにする活動を行っています。また、小学校・保育園など学童施設の運動会や行事の手伝い、地域イベントの準備、こどもの遊び場づくり、未利用地の整備なども行っています。家から外に出る一步、地域とつながる機会として多くのメンバーが参加。最近では、地域の皆さんと顔の見える関係が少しずつ結ばれてきています。

265回／2,474人(のべ)
西成区内各地にて不定期



表現プログラム

ダンス、演劇、詩、美術、書道、哲学、まち歩き、音楽など、月に約11回の表現プログラムを実施。各分野の専門家と共にまずはからだところをほぐすところからスタート。表現を通し他者と関わり、自分を見つめ、相手に伝えるちからや社会と関わるちから、生きるちからを発見していきます。

コーディネート：
NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）

135回／918人(のべ) 不定期／各回2時間



◎ひと花センターを地域に開放する日「ひと花ゆめひろば」

普段は登録した方のみが来所できるひと花センターですが、月に1日だけ、どなたでも来所することができる日を設けています。目的は普段のひと花センターを知っていただくことと、登録メンバーと地域のみなさんが出会うこと。会の内容は、紙芝居の上演、自作のおみくじ、のど自慢大会、活動写真の展示、てづくりお菓子とコーヒーのおもてなしなど、メンバー自身が考え企画します。

11回／145人(のべ)
外部来所者数／205人(のべ)
月1回(2月を除く) 土曜日 4時間



レクリエーション

目標などはあえて設けず、楽しむこと、なかまづくりなどを目的とした活動。歌や映画、料理や俳句など共通の話題でおしゃべりをしたり、一緒に手を動かし作業をしたり。参加者で献立決め、買い出し、調理を行い、できたものをみんなで食べるひと花カフェでは、年間51のレシピにチャレンジしました。また、数少ない女性の居場所づくりとして、月に1回女性のお茶会を開いています。

154回／1,070人(のべ)
不定期／各回1時間～2時間程度



体験学習

◎農作業

ひと花センターから徒歩10分ほどの場所にある「今宮ふれあい広場」。この場所で、週に2回、1時間程度の農作業を行っています。畑の面積は約120km²。土づくり、畝づくり、種蒔き、肥料づくりや雑草引きなどさまざまな作業を行い、化学肥料や農薬を使わずに作物を育てています。今年度は、ひと花センターから車で約1時間、柏原市にある雁多尾畑未来農園での作業も実施。収穫した作物は地域のお祭や行事でふるまったり、児童施設の食事に利用していただいたり。またメンバーで調理をし、皆で一緒にご飯を食べることで孤食を防ぎ、食や健康について考える取組みを行っています。

講師：NPO法人生活サポート釜ヶ崎、網島洋之

150回／925人(のべ)
今宮ふれあい広場／毎週火、金曜日 1時間
雁多尾畑未来農園／毎週金曜日 3時間



◎その他の体験プログラム

人との付き合い方に悩みのある方は「人づきあいの困りごとをみんなで考える会」で、悩み事について話し合い解決策を参加者とともに考えます。また「ミシンを使ったエコバックづくり」では、廃棄になった傘の布を使ったバックづくりを学びます。「BONさんと花の時間」では、クリスマスリースづくりや寄せ植えづくりに挑戦。空手・護身術では、型の練習から攻撃のかわし方などさまざまな技術を学びました。

講師：瀧尻明子（人づきあいの困りごとをみんなで考える会）、高橋誠（ミシンを使ったエコバックづくり）、細谷憲一朗（空手・護身術）、花屋BON（BONさんと花の時間）、西成消防署（防火訓練）ほか

63回／302人(のべ)
不定期／各回2時間程



◎健康教室

月1回、看護師、栄養士、薬剤師などを招き、からだのことについて考えます。お話のあとには看護師による個別健康相談や、血圧測定、足浴などを行います。健康相談や日々の関わりの中でサポートが必要であれば、病院への紹介などを行い、引き続き看護師と共に見守りや訪問などを行います。

コーディネート：
NPO法人HEALTH SUPPORT HINATA（訪問看護ステーションひなた）

13回／122人(のべ)
月1回／第4水曜日 2時間



就労体験 プログラム



就労体験の場を設定し、仕事の経験をサポートします。プログラム開始から約1年、なくてはならない助っ人として現場で活躍しているメンバーの方も。体験先のみなさんと友達になったり、居場所が増えたりと仕事を覚えるだけではなく、さまざまな出会いやつながりの場にもなっています。

◎体験先

- ・NPO法人釜ヶ崎支援機構：自転車のリサイクル
- ・NPO法人こえとことばとこころの部屋：
バザー手伝い、喫茶手伝いなど
- ・大阪市立大学西成情報アーカイブ：
資料スキャン作業

221回／249人(のべ)
不定期／2時間～4時間

自主活動 プログラム



ひと花笑劇団

ひと花センター登録メンバー自らで立ちあげた劇団。名作人情喜劇を自らアレンジし、美術、大道具、小道具、衣装も自分たちで制作。7、8名の劇団員で構成されており、演目ごとにメンバーは自由に入れ替わります。平均年齢約70歳。セリフを忘れたときには、みんなでフォロー。昨年は横浜まで遠征し、国際芸術祭「横浜トリエンナーレ」でも上演しました。

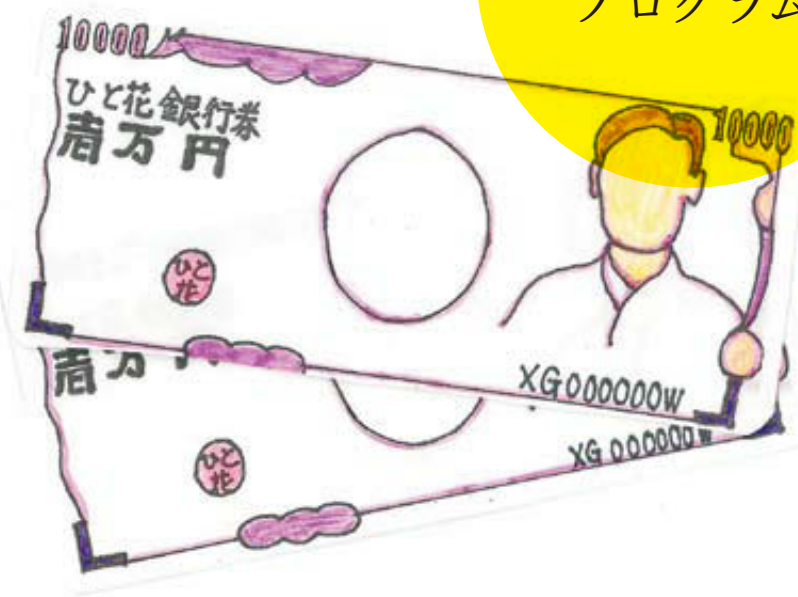
公演回数／6回
プログラム回数／27回 参加者／221人(のべ)
演目／「情けは人の為ならず」「人生双六」「愛情航路」



金銭管理 プログラム

ご自身で金銭の管理をすることが難しい方のサポートを行います。あいりん地域にくらす方の多くは、身近に自分を支えてくれる家族がいません。自身での金銭管理に不安をもつ方も多く、要望のあった方から毎月生活保護費をお預かりし、一緒に出金や貯蓄の計画を立てたり通帳や印鑑の管理を行います。今年度は、ひと花センターで仲間になったメンバーと遠出するために貯金をしたいという声上がり、毎月500円や1,000円ずつ預けられる方が増えました。1年後にたのしみがある、たのしみを共有できる仲間がいるということが、計画的な金銭管理につながっています。

135回／172人(のべ)
登録者と相談のうえ、金額や出金日を決定



利用について

登録の流れ

登録前の見学（必須ではありません）
↓
担当ケースワーカーに連絡
↓
担当ケースワーカーと面談
↓
支援方針の決定
↓
ひと花センターでの面談及び利用の説明
↓
登録

登録条件（1～4すべてに当てはまる方）

1. 西成区で生活保護を受給している
2. 満65歳以上
3. あいりん地域内に居住している
4. 単身で居住している

ただし、上記3は交流関係その他の要素から、あいりん地区内に居宅を有する者と同様の状況にあり、この事業による支援が必要であると認められた者を事業対象とすることがある。



ひと花メンバーの1日



べっぴんさん

熊本県生まれ。いのししのいる山のそばで育つ。会社勤めをしたのち、建築関係の仕事をする。ひと花センターでは、主に清掃と農作業のプログラムに参加。

05:00 目が覚める

ふとんの中で過ごしたり、起きてみたりします。

07:00 起床

07:30 朝食

いつもパンと牛乳が朝ごはん

テレビを見て過ごす

09:00 自転車で公園を回る

10:00 ひと花センターへ

今宮工科高校周辺清掃に参加



毎週木曜日の清掃に参加しています。道路の隅々まできれいにします。

11:00 帰宅

通院

13:00 昼食

ごはんと総菜のおかずを買ってきます。

洗濯や買い物をする

テレビを見て過ごす

15:30 入浴

19:00 夕食

お弁当や総菜を買って来て食べます。

テレビを見て過ごす

22:00 就寝



かしまさん

北海道生まれ北海道育ち。鉄工やとび職として働く。カレー大好き。ひと花センターでは、就業体験自転車リサイクルで活躍。

04:30 起床

05:00 朝食を買いにコンビニへ

牛乳1本とおにぎり2個買います。

朝食

06:00 眠くなるので一旦寝る

09:00 起きて歯磨き、洗顔

アパートを出て外を歩く

10:00 ひと花センターに顔を出す

NPO 法人釜ヶ崎支援機構に行き

おしゃべりをして過ごす

12:00 就業体験自転車リサイクルへ

昼食を食べる

自転車リサイクルのみなさんと一緒に弁当を食べます。

13:30 自転車リサイクルの就業体験



今日は自転車フレームやスポークなどの部品磨きをしました。

16:30 ひと花センターへ戻る

本日の就業体験記録を提出

メンバーとおしゃべり

17:00 帰宅 お米を炊く

おかずは、総菜屋さんに行きます。

17:30 入浴

19:00 夕食

20:00 テレビを見る

23:00 就寝

寝る前に今日一日あったことを振り返ります。



まえはたさん

富山県生まれ。飲食業界で働いたのち、あいりんセンターで求職し土木建築の日雇労働者として働く。ひと花センターでは、主に調理のプログラムに参加。

05:30 起床

テレビを見て過ごす

朝の情報番組を見るのが日課。

08:00 朝食

ご飯を炊いて、納豆をかけた卵をかけた卵を食べてます。

09:00 ひと花センターへ

新聞を読んで過ごす

10:00 調理のプログラム

「ひと花カフェ」に参加。

11:30 「ひと花カフェ」にて、

みんなで昼食



今日は、たまねぎのみじん切りを担当。



本日のメニューはハンバーグ、サラダ、味噌汁

13:00 ひと花センターで映画鑑賞

15:00 帰宅

テレビを見たり、本を読んだりして過ごす

19:00 夕食

いつも自炊しています。

19:30 入浴

20:00 テレビを見たり、本を読んだりして過ごす

21:00 いつの間にか就寝





おださん

静岡県生まれ。富士山に見える御前崎で育つ。鰹漁の仕事をしたり、神戸で港湾労働者として働く。西成では、主に日雇いで解体工の仕事をす。ひと花センターでは、農作業や清掃活動に参加。

05:00 起床

05:15 朝食

いつも近所の牛井屋で食べます。

06:00 家でテレビを見る

06:20 散歩

07:30 帰宅

部屋の掃除

今日は畳の入れ替えがあるので部屋を掃除。昨年夏は南京虫が出て大変だった…。

09:30 ひと花センターへ

畑で農作業



ひと花に行かない日は、特に何もすることがなくて、困っています。

11:30 帰宅 昼食

12:30 まちをブラブラする

14:00 畳の張替が終わったので帰宅

テレビを見る

テレビを見るのは、実はあまり好きではないです。

14:30 入浴

18:30 夕食

いつも近所のスーパーのお弁当を食べます。

20:00 就寝

02:00 一度目が覚める

なかなか寝付けないので、しばらく布団の中でゴロゴロして朝を待ちます。



たださん

山形県生まれ山形県育ち。旅館での番頭、警備員などをして働く。ひと花センターではどんなプログラムにも積極的に参加。ひと花新聞を地域のみなさんへ配達する係を担当。

07:15 起床

お金がある時は喫茶店にモーニングを食べにいきます。

50 円の缶コーヒーを飲みながら

新聞を読む

08:50 紙芝居劇「むすび※」の事務所へ

仏壇の水替え

花壇の水やり

ごみ出しなどをする



「むすび」の存在を知ったのはひと花センターのプログラムで。2013年から会員で活動しています。

10:30 むすびマネージャーやメンバーと

紙芝居の打ち合わせ



11:30 むすびでご飯を作って、みんなで昼食

本日の昼食はにゅう麺。

12:30 ひと花センターへ

13:00 ひと花笑劇団 劇練習

今回は「愛情航路」で、叔父さん役を演じます。

14:00 100 歳体操に参加

高知で開発された、おもりを使った体操を初体験。

15:00 農作業に参加

肥料まき、きゅうりなどの収穫。

16:00 帰宅 入浴

17:00 夕食

18:00 テレビを見ながら、晩酌

ひと花に来るようになって午前中からお酒を飲む習慣がなくなりました。

23:00 就寝

※紙芝居劇むすび：大阪・西成にある釜ヶ崎に暮らすおじさんたちが繰り出す紙芝居「劇」。ほのぼのとした語りと斬新な小道具や歌などが飛び出す。紙芝居活動はもちろんのこと、メンバー同士の助け合いの場となっている。初期メンバーを少しずつ見送り現在はひと花登録メンバーが多く参加。第2期がスタートしている。



ひと花センターの1日



08:30 スタッフ開所準備

09:00 オープン

登録メンバーのみなさん来所



鳥の世話や掃除をしてくれる人、テレビや新聞を見て過ごす人など、みなさん思い思いに過ごす。

10:00 午前のプログラム開始



毎週月曜日は「ひと花カフェ」。みんなでごはんをつくって食べています。

12:00 午前のプログラム終了

メンバーの皆さんは昼ごはん

帰宅される方も、ひと花センターにお弁当などを買って来て食べる方もいます。

13:00 午後のプログラム開始

毎月第4水曜日は健康教室。

15:00 午後のプログラム終了

火曜、金曜は農作業



大雨の時には中止。小雨の時はやります。

16:00 農作業 終了

17:00 メンバーのみなさんはほぼ帰宅

スタッフは本日の記録つけ、報告作成、片付けなどを行います。

19:00 クローズ

おつかれさまでした! また明日!

プレーパーク 座談会



プレーパークとは

「子どもの冒険遊び場」とも呼ばれ、デンマークの廃材遊び場が発祥とされる。従来の公園、既成のブランコ、シーソー、鉄棒などがあるような遊び場と違い、子供たちが想像力で工夫し遊び自体を作り出すことの出来る遊び場。西成区では、「大阪市西成区に子どもの冒険遊び場・プレーパークをつくろうプロジェクト」として2013年から活動。ひと花プロジェクトでは、2014年よりこどもたちとの遊具づくりや遊び場づくり、準備、撤収などのお手伝いを継続して行っている。

——プレーパークに参加し始めたのはいつですか？

いけだ：プレーパークは一番初めの南津守中央公園（2014年6月）の時から欠かさず参加しています。大きなウォータースライダー作ってね。西成公園ではさらに大きなものを作ったよ。

いわい：ほとんど毎回参加しています。ウォータースライダーの他は仏現寺公園で巨大なダンボール工作なんかやりましたね。

おしかわ：初めてこどもたちと関わったのは、仏現寺公園の運動会（2013年7月）から。当時は参加者としてこどもたちと一緒に駆けっこやドッジボールをした。それ以来、こどもに関わる行事にはほとんど参加。プレーパークも当初から参加しています。

あだち：2015年2月からプレーパークに参加しています。「萩の森」でこどもたちと一緒に木工することが多いかな。

——参加したきっかけ（理由）は何ですか？

いわい：とにかくこどもらに楽しんでもらいたいと言う事が一番。

おしかわ：こどもたちはかわいい。こどもたちを見ていると次も参加したいと思うなあ。

いけだ：生活保護を受けているので地域に何か貢献で

きないかなあって以前から考えていて。それがこどものことだったらこちら楽しい。自分の知っていることを教えてあげたい一心で参加しました。

あだち：元気なこどもの姿を見たかったから。これが楽しみであり、やりがいにつながります。

——皆さんはプレーパークで何をしていますか？

おしかわ：夏はウォータースライダーやブランコ作り。それでこどもたちが遊ぶんだけど、その間はケガの無いよう見守ったり補助したり。寒い時期は「萩の森」で木端をつかって木工をこどもらとやって楽しめましたね。

いけだ：こどもたちはいろんな注文をしてくる。それに応えておもちゃの剣やソリなんか作ったよ。

あだち：僕の役割はもっぱら「木工係」。でもほとんどこどもたちにやってもらうようにしているなあ。僕はちょっと手を添えるくらいかな。

いわい：大きな遊具は木材を切って組み立てる。僕もこどもらに道具の使い方を学んでほしいので基本的なことだけ教えてあとは任せます。夏はウォータースラ



イダーが主で、冬はダンボールで家や迷路づくりもやりました。

おしかわ：こどもにとって道具は初めてなので慣れないものやから。だから使い方を教えましたよ。のこぎりの引き方やハンマーで釘の打ち方なんかね。

あだち：こどもはすぐに道具の使い方を覚えるからなあ。のこぎりの刃の角度なんかすぐに理解できる子がいたよ。いろんなものを作りたがりますね。自分が乗る船なんか作ってたね。

いけだ：こどもの視線に合わせて、いま何を求めているか考えさせられる。まだ何を考えているのかわからないことが多いけどね。

——参加を続けてみて、こどもたちとの関係に何か変化がありましたか？

いわい：とにかくいろんなことを聞いてくるようになりましたね。ああしたい、こうしたいって。

おしかわ：最近は名前を覚えてくれる子もいる。街で「おっちゃん」って声かけてくれるようになった。

あだち：知った顔の子が増えてきたかなあ。

いけだ：なついてくれる子ができたとし、いっぱい元気をもらえる。



——子どもたちの様子はどうですか？

いわい：ダンボールはこどもにとっても扱いやすい材料だと思いますね。公園で自分の家をダンボールで作ると、面白いことに女の子の方が積極的にこんな窓をつけたい、扉の開閉したい、雨漏りしない屋根を付けたいなど活発な質問をしてくるもので。男の子は無心になって作ってることが多いんやけどね。

あだち：木工でも女の子が上手いんですよ。とにかく作りたいものは思うがままに自由に作っている。机なんか作るんだけど結局、脚がグラついたりする。そんなときだけ僕はしっかり安定するようにちょっと手伝う。

いけだ：知り合った女の子なんかお店を作るのよ。花屋、果物屋、八百屋なんか自分で開店するわけよ。そ



の発想が素晴らしいのよ。将来インテリアデザイナーになるんじゃないかなって思う。

おしかわ：こどもたちにあれ作ろう、これ作ろうと言われるとうれしくなってしまうなあ。こどもたちって覚えることが早いしすぐに大きくなるからなあ。

いわい：プレーパークはこどもらの創造する力を成長させる良いきっかけになってるんじゃないかなあ。

——これからプレーパークでこどもたちとどのように関わりたいですか？

あだち：プレーパークはこどもが自分の事を自分の責任でやっていると思います。こどもが自由な発想をすることが大事。僕は昔、大工もやっていたんだけど人に教える機会はなかった。でもプレーパークで教えてみて未来の大工が生まれるかもっていう気持ちになりました。

いわい：あくまでもプレーパークはこどもたちのものです。私たちはそこでちょっとお手伝いさせてもらえればと思っています。

おしかわ：こどもの成長が見れること。それは頼もしくもあり、自分らの喜びでもあるなあ。

いけだ：こどもは次々と発想が浮かぶ「遊びの達人」。自分でできることは本人に任せる。でも喜ぶ顔が見たいからでっかいブランコなんかも作ってやりたいのよ。



地域の声

周辺がきれいになった

日頃の行事に協力、参加、
とても助かっています

地域の一員としての意識が
お互いに深まった気がする

いつも顔を見れば、あいさつ等もし
ていただき、こどもたちも仲良くし
ていただき、とても助かります

いつもとても親切で私たちの
依頼にも親身になって一緒に
とりくんでくださる

なるべくたくさんの方が継続
して参加できるような取組を
お願いします

地域活動の清掃活動に参加して
もらっていますが、回を重ねることに
会話がはずんでいます

人間らしく輝いている姿を見
ることができた

だいじにだいじに育てましょ
う。ただしあまり肩に力を入
れすぎないように

頼りになる存在である。みな
さんがいきいきとしている

こどもたちが一緒に交流し、楽しむ
ことができる行事にまた呼んで
いただけたら嬉しいです



表現プログラム
ワークショップ

「美術の時間」 の1年



講師：前川 紘士（美術家）

1980年生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。「何か」を作りながら、世界と関係を築いたり、ものごとのあり方を知ったり、その中でどのような実感を得ることが出来るのかを考えながら制作活動を行う。

2013年度ひと花プロジェクト「美術の時間」では、制作した作品を人に見せるという経験をしました。2014年度は、絵を人に見せることを視野に入れつつ、毎日自分たちが使っている「ひと花センターの室内壁画(壁紙)」制作に挑戦しました。

1. 壁画制作開始！まずは、個別に壁を見ながらセンター内の壁画のアイデアを出して行きます。



2. 個々のアイデアを円形に並べて、ざっと鑑賞。



3. 隣り合う2つの絵の前に座り、それらを自分なりに合成して行きます。



絵の合成の過程で、描かれたモチーフだけでなく、他の人の「描き方」に触発されて新たな方法を試す人も。

4. 壁の採寸を行います。



5. 5月、これまでに出了アイデアを場に並べ、いよいよ本番サイズの制作開始。



6. 6月。画面の方々にそれぞれが思い思いに描き進め行きます。



細やかな描き込みをするOさん。

夏には近所の「こどもの里」からも飛び入り参加が。



賑やかにいろいろな話をしながら進める時間もあれば、黙々と集中して制作を進める時間も。



「絵は苦手」と言いながら、椅子に座りおしゃべりで参加するHさん。最初のアイデア出しには絵で参加。



Sさん、集中しすぎて白いズボンまでカラフルに。



頭の上には甲子園球場のセンターポール。



7. 11月。追い込み。



8. 完成した絵を貼り込んでいながら、修正を加えます。



9. 壁画完成 その全貌は20～21ページの写真で！



よろこびの記念撮影。

ある日の 「詩の時間」



1. まずはじめに近況報告。最近起こった楽しい出来事、すごい出来事などみなさん自由に語ります。



2. からだほぐし。椅子から立ってかたくなった体をほぐします。



3. 詩の本の朗読。いつもは谷川俊太郎さんの詩を朗読することが多いですが、この日は「あいりん労働者の詩集」を回し読み。



みなさん深くうなずく。



講師：上田假奈代（詩人）

3歳から詩作、17歳から独学朗読。ことばを人生の味方にしようとして活動する。動物園前商店街でココロームカフェを運営。好きなものは、歯磨きと散歩。

詩の時間では、ペアになって相手の話を聞きとり詩をつくる「このころのたねとして」という手法や、他の人が書いた詩のフレーズに自分のつくった詩をつないでいく「連詩」などの手法を用い、さまざまなテーマで作品をつくりました。

4. お題「鬼」の絵を画用紙にマジックで描く。



「鬼」と一言と言っても、さまざまな「鬼」が現れる。

5. 二人一組でペアになり、描いた「鬼」の絵について7分間インタビューする。



「バーに行って楽しんで、マネージャーという鬼にお給料の三倍にあたるお金を渡す」など、それぞれのストーリーがつむがれる。

6. 今度は立場を入れ替え、聞き手が話し手になって同じように7分間のインタビュー。



7. 各自メモをもとに、詩をつくる。



にぎやかなおしゃべりの時間から一転、静寂の時間。

8. ひとりづつ詩を朗読発表。



太陽がいっぱい

どうして僕はここにいるの
あつ 剣の山が僕を見ている
僕は生ける死人形のように
なす術を知らない

一日の食糧はおにぎり一個だけ
涙が出て止まらない
何だって一日に三千往復、剣の山を廻るのか
どうすりゃいいんだ
ただど上を向いたら
太陽がいっぱい

太陽が五つも僕を照らしている
剣の山を往復する修行に耐えて
僕は太あじやりになるのかな
太陽がいっぱいの下で

詩…浅やん
絵と話…すげへ



悲しい悲しい鬼物語

交通事故にあい
片手の無い鬼の話
相手は無保険の車で補償無く
片手無く
家無く
金無く

死にたくも無く
泣くに泣け無く
悲しい悲しい鬼物語
これぞ本当の鬼の目にも涙の物語

詩…カズ池田

絵と話…ターシー



ある日の「書のワークショップ」



講師：田面遙華（書家）

6歳より筆を持ち、現在“五感のむこうを書で描く”書家として活動。毎日書道会会員・浪速書道会理事。古典の書を基礎に独自の感性を吹き込み、書道の枠を越えた表現として各地で作品展示・ワークショップ・ライブ書道を行う。2013年9月中之条ビエンナーレ出展。

2014年度も、季節のことばを大切に、さまざまな作品に挑戦しました。白抜き剤を使って、白黒逆転の書道作品をつくったり、団扇に書道をほどこしたり。時には大きな半紙をいくつもつないで、壁いっぱいになるような作品を参加者全員で制作しました。

1. お題発表。 本日のお題は今年の干支「羊」。



2. 先生から書き方の説明。楷書や行書、象形文字などもレクチャー。



3. 半紙で練習。今回は干支の「羊」を練習。お手本や本を見ながら真剣に。



「羊」の見本がたくさん載った用紙を手本に置き、好きな字を選んだらその文字を真似して書いてみます。

4. 中間発表。



先生がひとりひとりの書を見て、良いところ、こうしたらもっと良くなる場所などを解説。

5. 休憩

6. 再び半紙に書いて練習。

自分の好きなことばを練習するか、もう一度前半に書いた「羊」の文字を練習する。



7. カレンダーの空白部分に今年の干支「羊」や、好きなことばなどを書く。



失敗のできない緊張の一瞬。



いつも良いところをほめてもらえるので、メンバーも意欲が高まります。

8. カレンダーを発表。先生からの解説を伺う。

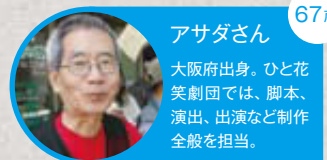
9. 落款を押して完成！



この日の作品紹介

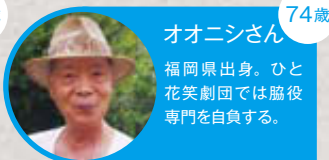


ひと花笑劇団 座談会



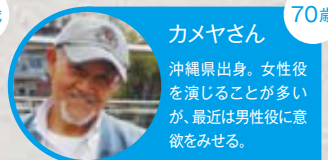
67歳

アサダさん
大阪府出身。ひと花笑劇団では、脚本、演出、出演など制作全般を担当。



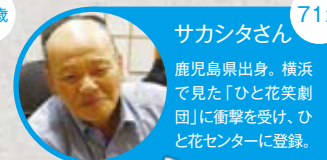
74歳

オオニシさん
福岡県出身。ひと花笑劇団では脇役専門を自負する。



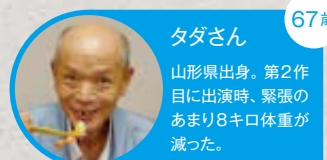
70歳

カメヤさん
沖縄県出身。女性役を演じることが多いが、最近は男性役に意欲をみせる。



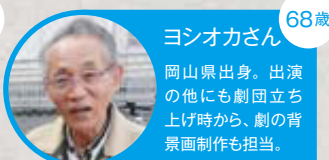
71歳

サカシタさん
鹿児島県出身。横浜で見た「ひと花笑劇団」に衝撃を受け、ひと花センターに登録。



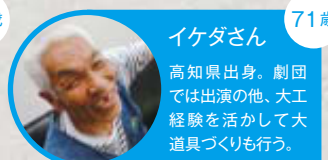
67歳

タダさん
山形県出身。第2作目に出演時、緊張のあまり8キロ体重が減った。



68歳

ヨシオカさん
岡山県出身。出演の他にも劇団立ち上げ時から、劇の背景制作も担当。



71歳

イケダさん
高知県出身。劇団では出演の他、大工経験を活かして大道具づくりも行う。



——ひと花笑劇団への、参加の時期と劇団に参加した理由を教えてください。

ヨシオカ：わたしは、立ち上げのとき（一作目）から参加しています。理由は…面白そうだなーと思って。興味があったから参加しました。

イケダ：自分は三作目の「愛情航路」から参加しました。はじめは、草刈とか農作業とか外でするプログラム中心に参加していたけど、やっぱり人間バランスよくおらなあかな、ということで。ちょっとやってみようかなと思ったことがきっかけ。地元の人を喜ばせるためにやりたいなと思ってやっています。

カメヤ：僕は一作目から参加したから、一昨年冬からかな。小さなころにね、何も楽しみがなかったから

近所の芝居小屋に妹と一緒に通ってね。知らない大人の裾をつかんで小屋に入っちゃうの。そこで芝居言葉も覚えた。沖縄の芝居言葉だけどね。それで小さいころから芝居が好きだったから、興味があってやってみたいなーと思って参加しました。



アサダ：僕はひと花センターに登録したときに、手先が不器用だから農作業や清掃はできませんけど、演芸やらトークならできます、と一応申告しとったんです。それで、どうしようかなーと思っていたんですが、ちょうど萩之茶屋文化祭（2013年12月）のときにスタッフの方から舞台の提案があって。ここでなら何かできるんじゃないかな、ということで劇をすることを提案して、参加しました。

タダ：わたしも、立ちあがりのときから参加しています。そのときは、出るか出ないか迷って迷って。一週間くらい迷って、セリフの少ない役ならいいよーとい



うことで参加したのがきっかけですな。みんながやるから、じゃあ俺もやってみようか！という。それでその頃は、芝居のお稽古が終った後よくみんなで近くの店に行って、ワイワイ言いながら飯食ったりしゃべったりして。それがたのしみで、行ってたというのもあるな（笑）

オオニシ：参加する理由ちゅうんは別にないよね。ただね、なんとなく参加しとる。我が家がここ（ひと花センター）に近いから。3分かからんから来てる。劇はね…わたし、してもせんでもどっちでもええんですわ。

——え！？



オオニシ：うん。どっちでもいいんですけどね。ただ、なんとなく誘われとるからね…これはもう断る理由も別にないし（笑）

——そうです。今やオオニシさんは劇団になくてはならない存在です。

オオニシ：自分は脇役専門。セリフ少ないし簡単だからね。

ヨシオカ：ターシー（オオニシさんのあだな）！ 脇



役がおらんと、主役もなにもできんから！

一同：おおー（歓声があがる）

オオニシ：そやな…

イケダ：ターシーは地声が大きいから芝居に向いてる。

オオニシ：何で声大きくなったかわかる？学生の頃バスケットボールしてたとき「ナイッシュ！！！！（大声）」って掛声かけてたからや！

——「ナイッシュ！！！」のときの表情もすごいですね…。そこまでお伝えできればいいのですが、ちょっと紙面では難しそうです。では、サカシタさんどうぞ。

サカシタ：僕は三作目から参加しています。去年(2014年9月)、狂言の発表のために横浜へ行って。そこでこの素晴らしい「ひと花笑劇団」の発表を見て、この「笑い」に非常にひきつけられまして。参加したいと思いました。今練習していますけれど…狂言より難しいです。喜劇というのは、今までの自分の体験からにじみ出るものがあるんですね…。ここでは自分が一番下手だと思います。もし、この劇が完璧にできたら、これも冥土の土産ということで、次の作品には出ないということになるでしょうが、まあ、まず、そういうことはないと思います。

——では「ひと花笑劇団」をしていて、一番たのしかったことはなんですか？

ヨシオカ：やっぱり、お客さんが、笑ってくれたり、拍手が上がったり反応が返ってきたとき。我々も芝居しながらお客さんの反応はなんとなくわかるからね。ああーこれは盛り上がってきたなーと、そういう瞬



問っていうのはうれしいですね。

タダ：わたしは、レッスンはあまりたのしくないけれど、本番になると魂が入って、役になりきる瞬間がたのしい。そして芝居をやって自分の性格が良くわかりました。

アサダ：やっぱり、狙い目通りに会場の反応があったときはうれしいですね。

カメヤ：僕はね。劇をやりに横浜に行けたことが一番。あれは最高だった。誰もトチらないで、最後までできたもんね。あれ以上の出来は今までにないと思う！それからね、15年振りに第二のふるさと横浜に帰ることができたのもうれしかった。



——では、逆に「ひと花笑劇団」での苦労話がありますか？

タダ：ありますあります。わたしひと花笑劇団に入ってから体重が8キロ減りました。セリフ覚えるのに、ほんとに必死やったんで…発表が終わる頃には、台本がいつもメモだらけで真っ黒や…

アサダ：苦労ということでもないんですが、本番に欠員がでないかはいつも心配です（笑）

——では、最後の質問です。ひと花笑劇団として、これからどんな活動を展開していきたいと思いますか？

アサダ：良い脚本はいくらでもあるので、いろいろな演目をやりたいですね。女性役に見せ場がある良い脚本がたくさんあるので、女性団員を募集しています！！（今は女性団員がいないので）

カメヤ：僕はね、もう女性役はやりたくない！男性役ならチョイ役でも何でも良い。僕が毎回女性役をやっちゃうと、他の人が女性役をやるチャンスがなくなっちゃうしね。

ヨシオカ：やっぱり海外遠征！まあ、海外まで行かなくても、どこでもいいから、遠くでやりたいな。

サカシタ：あの…これ劇やっているときの風景をビデオで撮ったりするのは大変なんですかね？

——発表の時はいつも撮影してますよ。

サカシタ：いや、映像を見て自分の演技を見直したいな—と思ひまして…。そういったことをしたいなと。

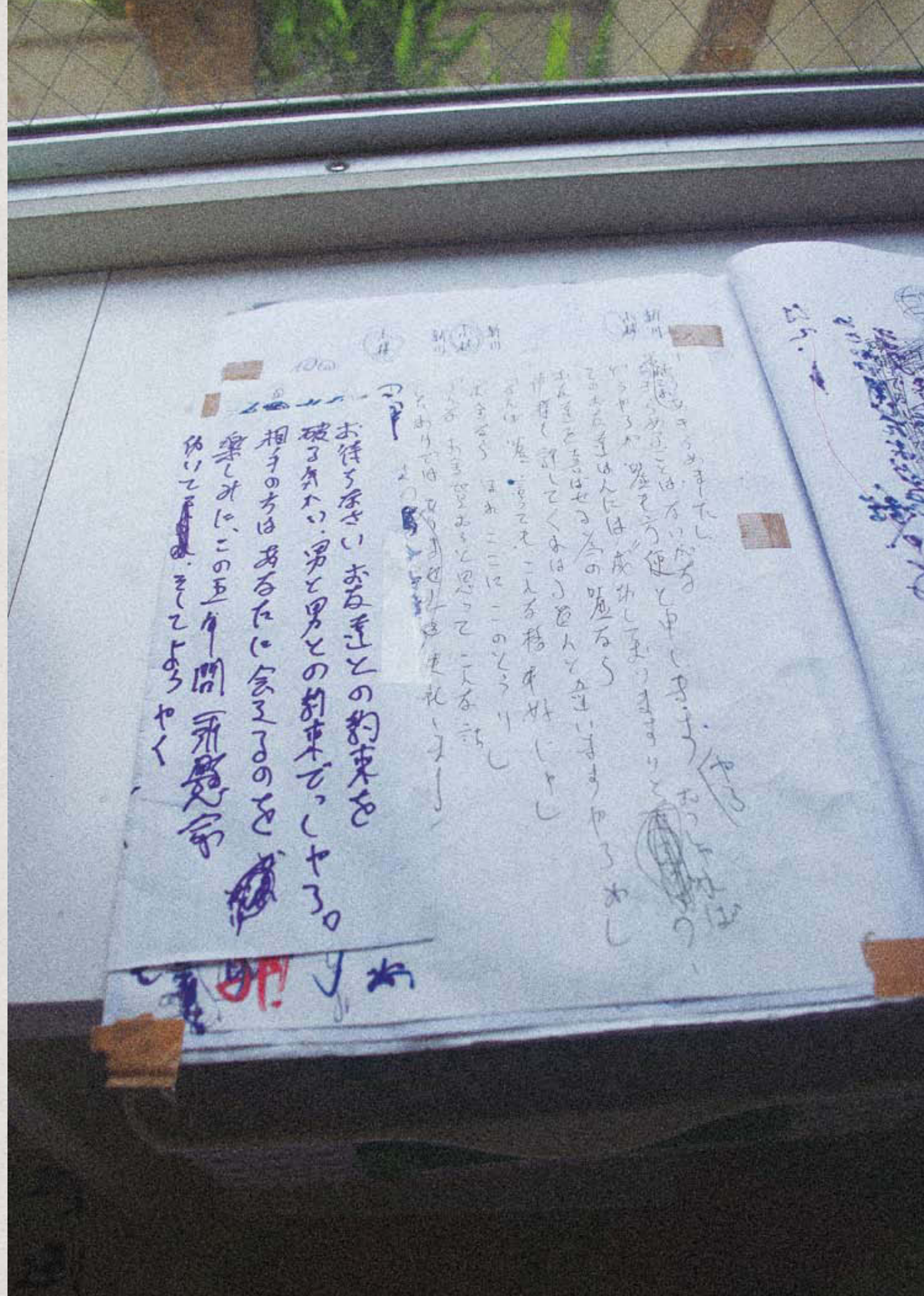
——じゃあ、次回の練習の前に録画した映像を見てから練習しましょうか？

メンバー：それはいいな。

——では、次回の練習の方向性も決まったので、本日はこの辺で。皆さんありがとうございました！

ひと花笑劇団

ひと花センター登録メンバー有志で立ち上げた劇団。2013年秋の萩之茶屋文化祭でのお披露目以来、地域のお祭などで公演を続ける。平均年齢70歳。名作人情劇を独自にアレンジ。2014年度は国際芸術祭「ヨコハマトリエンナーレ」でも上演。





Hitohana 2015.2.15 ひと花プロジェクトシンポジウム トークセッションより Symposium



原口：どうもこんにちは。原口と言います。今日は宜しくお願いします。東京からいらしていただき本当にありがとうございます。僕自身2000年からこの釜ヶ崎のまちでいろいろな方にお話を伺いながら、地理学という切り口で釜ヶ崎の政治の歴史や、2000年に長居公園や大阪城公園で取り締まりがたくさんあったところで活動をしたり、そうした中で貧困とは何だろうかということを考えてきました。今日はファシリテーターですが、気持ちとしてはこのひと花さんとかお三方の東京での活動ですとかを率直に学ばせていただくような形で参加させていただきました。今日一番最初に「ひと花さん」という場所あるいは実践を紹介してもらうときに「社会的つながりづくり事業」ということで「つながり」というキーワードが出たと思うんですね。大西さん、藤田さん、中村さんそれぞれの実践のご報告の中にもやはり「つながり」といった言葉が「もやい^{#1}」も含めて出てくるわけですね。それで、まずは「つながり」をつくる上での難しさや、うまいことつながっていく上での工夫みたいなところを伺わせていただいて、共有していくことができればと考えたのですが、いかがでしょうか



藤田：難しいテーマだと思うんですけど、私が普段「つながりづくり」で意識しているのは、人間理解をしていこうということです。10人いたら10人全員性格も違うし生きてきた背景も違いますので、その人たちが集まった場というのは必ず「あいつはなんだ」「こいつはなんだ」という場所になりがちです。なので「この人はこういう人です」とか「この人にはこういう背景があります」という風に、あらかじめ私たちが理解しておくようにしています。これは私たちが支援させていただく方に限らずに、一緒にネットワーク組んで協力し合う活動団体同士でも同じことが言えます。どんな活動をしているのか？ということ、を、まず

できるだけ聞き、知るようにしています。「お互いの理解」を意識して、つながりづくりを行っていますね。



大西：その流れで、「ゆるくつながる」ということが実は非常に重要だという風に僕は考えています。一カ所しか行く場所がない、一カ所しかつながっている場所がないとなると、そこがうまくいかなかった時につながりがすべて切れてしまうわけですね。僕らはいろいろな居場所活動をしているのですが、元々は「サロン」という誰でも来られる場所を作ったんです。しかし、誰でも来れるがゆえにそこに来づらい人、例えば男性がすごく多かったら女性だと男性が怖くて居づらいなどという状況が出てきます。そこから、女性限定の場を作ろうとか、ニーズに合わせて広げてきました。いろいろな場を作っていくと、一カ所で「ちょっとここは僕は苦手だな」と思う人には、「こっちへいってみたら？」という風に、つながりを広げることができます。実際、中村さんがされている「東京プロジェクト^{#2}」の居場所活動に僕らがお手伝いしている人が参加したりしています。そういう地域に、地域よりもっと広域でもいいんですけど、いくつかつながり先があると本人が選べるんですよね。だから、逆に言うと一カ所にすごく忠誠心を尽くしてつながっている人はいないんです。その時の気分とか「あいつがいるから今週は行きたくない。でもこっちはあいつがいないから行ってみよう。」みたいなですね。いろいろなつながり先をつくっていくことが、実は非常に重要だと思っています。お医者さんで脳性麻痺の熊谷晋一郎さんという方がいるんですけど、彼は「つながりを作ることは依存先を増やすことだ」という言い方をしているんですね。例えば“アルコール”とか“ギャンブル”とかそういう依存先があるけれども、人間関係もある種依存といえは依存で。ゆるくたくさんつながりがあると、ひ

大西連（おおにし・れん）



認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやい理事長。1987年東京生まれ。NPO法人自立生活サポートセンター・もやい理事長。新宿での炊き出し・夜回りなどのホームレス支援活動から始まり、主に生活困窮者の相談支援に携わる。

中村あずさ（なかむら・あずさ）



世界の医療団東京プロジェクトコーディネーター。社会福祉士。2000年より池袋でホームレス支援活動のボランティアを始める。森川すいめいらとTENOHASIを立ち上げ。2009年より、世界の医療団入職。

藤田孝典（ふじた・たかのり）



NPO法人ほっとプラス代表理事。1982年茨城県生まれ。社会福祉士。反貧困ネットワーク埼玉代表。2011年NPO法人ほっとプラスを設立。2012年から厚生労働省社会保障審議会「生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会」の委員。

原口剛（はらぐち・たけし）



地理学者。1976年生まれ。神戸大学准教授。主な著書は『釜ヶ崎のススめ』（共編著、洛北出版、2011年）『地名をめぐる場所の政治——1970年代と2000年代の「釜ヶ崎」を事例として』（『地理学評論』85-5号、2012年）など。

とつが切れてしまっても他を探していったりだとか、他とつながっていく中で、つながりを維持していくことが大事だと僕は考えています。

中村：私もほんとうに同じだなと思っています。私たちの「東京プロジェクト」は、10代の方から一番上が70代たまに80代の方も来られて、女性も男性もいて、というところなんです。月曜日から金曜日まで毎日何かしらやっていて、日替わりでいろんなテーマの催しをしています。「男性の人来て下さい」「女性がターゲットです」という看板をかがけているものはないのですが、手芸をする日はおとなしい人が集まったり、パン作りをやる時には仕事バリバリの人が集まりやすいとか、炊き出しや夜回りの活動は元気な人が集まる、などということはありません。また、場を仕切るスタッフや利用者の方を、できるだけシャッフルするようにしています。私が中心で仕切るだけでなく、いろんな人が場を持つ。そうすると場の雰囲気がガラッと変わります。誰が中心で会をするか、内容がどういったものなのかで、集まる人が全然変わって来ますよね。それこそ「場に忠誠を尽くして密着する」という形でのつながりは弱くはなるんですけど、ゆるやかさは増します。私たちは、逆に「居着きすぎてしまう」ということに気を付けています。

大西：もやいでは「つながりが強くなるとしがらみになる」と言う。絆が強いとしがらみになっちゃうけど、ゆるいとつながりになるよ、ということをずっと言っていたりします。



原口：なるほど。

藤田：いや、名言だと思いました。

原口：「すきま」というのはキーワードですね。あるいは「複数ある」という状態。僕自身は個人的に田舎出身なので、都会に住む人から、田舎の農村の「つながりの強い」状態に対する素朴な憧れを持たれると、ちょっと違うなあと思ってしまいます。合う人は合うと思うんですが、あまりにも一対一の共同体ってある種逃げられなさがある。「複数の共同体の中での在り方」というのは、おそらく通常イメージされる「共同体」とは違う共同体なのかなということ、を、「すきま」というキーワードから感じました。最初にお三方にお伺いすべき肝心なことをすっかり忘れてしまっていたのですが、今日いろいろなひと花さんの活動を見て、あるいは農園などを見て、率直にどう感じられましたか？

大西：一言で言うと「自由だな」ということなんです。それができるということが何より大切なことだと思っていて、その自由さがなくならないようにしないといけない。自由さについては「すきま」ということばも出てきましたが、僕らは「マチ」って言って実践しています。「すきま」がある、広がりを持てるような自由さがないと窮屈になっちゃうんですよね。窮屈になるとそれは居心地が悪くなってしまいますので、自由さをすごく大事にしている。僕らも自分たちの活動においてそれを忘れないようにしないといけない、と



ゲストトークの最中も自由に写真を撮るAさん

いう風に思っています。

藤田：私もすばらしい活動だなと思いました。ひと花プロジェクトに何か意味づけをしようというのは野暮だなと思っていました。みんなが集まってきて、笑ったり楽しめられるような場所や空間って、それだけで尊い。どんな経験を持っている人でも居られる場所というのは絶対必要なんですよね。お金がないと入れないとか、何か同じような、例えば独身の人たちの集まりだとか、同じ趣味の人たちが集まってくるとかいう、「同じような人」が集まれる場所はたくさんあっても、そうでないいろんな人が集まれる場所というのが、見渡してみてもどれぐらいあるかなと。そういう場がほとんどない中で、このひと花プロジェクトはいろんな人を受け入れる。それだけで尊いと思います。なのでこれを政策評価したりとか、どう事後の位置づけをしていくのかということ自体そんなに深く考えなくていいと私は思うのです。特に費用対効果と最近ずっと言われている中で、このお金をつける、この補助金をつける、この予算をつけるんだから意味のあることをしないといけない、という流れが最近すごく強いんですね。でも、今日のみなさんの笑顔や、みなさんが居場所の感覚を持っていることそれ自体が尊いし、成果が出ている。ですから引き続き続けていって、これがすばらしい活動だということをもっと外部の人に知ってってもらおうと思います。情報を発信していただけたらありがたいなと。特に私もここに来るまではこのプロジェクトを知りませんでした。こんなすばらしい場所を全国に広げていただけたらいいと思います。



ひと花農作業地ツアーのひとコマ

中村：私も今日の短い時間でしたが、その短い間だけでも、みなさんの表情や笑顔、場の雰囲気から本当にすごく伝わってくるものがありました。特に、表現が豊かだなと。それが、いわゆる支援者の人が表現したり発信しているというだけでなく、利用されているみなさんが、いろんな形で表現されている。先ほどの座談会でも、壇上に座ってマイクを持って話せるということ自体がとてもすごいことだと思うんです。みなさん自然にお話されていて、受け取り側も肩の力が入ってなくて、自然に溶け込んでいるこの空気が、すごく普段のひと花センターを物語っていますね。

1年半でこの雰囲気をつくれるというのは、本当にすごいなと感じました。



登録メンバーによる座談会のようす

原口：いろいろとお伺いしたいことが個人的にもあるんですけど、それよりも会場のみなさんのほうからこれを聞きたい、ということがきっとあるんじゃないかなと思うので、今までの話も含めて、あるいはそれ以外の事でもかまいませんし、東京からいらしたお三方にこういうことを聞いてみたいということがありましたらお願いします。

会場：今日はどうもありがとうございます。4月から生活困窮者自立支援法^{※3}というお話が出たんですけども、4月以降の展望といたしますか、そういったことへ一言ずついただけたらなと。宜しくお願いします。

大西：生活困窮者自立支援法についての評価は、非常にいろいろ難しいところだと思うんですけど、もやいは反対をしていたんです、実は。最初はそうではなかったんですが、民主党政権時代には「生活支援戦略」という名前だったんです。藤田さんは良くご存じだと思うんですけども。2020年までに「経済的貧困」と「社会的孤立」を解決するような制度を7年かけてつくろうということで、当時もやいも最初のほうはコミットしてたんですが、途中から「社会的孤立」の方が抜けて、さらに生活保護を削減するという話になった。内容についても、いろいろな地方自治体や就労支援をやりたい民間企業が入ってきて、こういう風に変えて欲しいなどということで、さまざまに変わってしまった部分があります。これはもう出来てしまって、しかも400億円から500億円のお金がつくことが決まってるんですね。今国会で審議中ですけども、肝心なのは、それをどう有効活用するのか？を第3者的な立ち位置から必要な提案をしていくことだと考えています。元々はNPOや民間団体に委託をして新しい事業をしようという趣旨だったんですが、まだ確定ではないですが、開けてみたら直営、委託ではなく行政が自ら行ったり、あるいは社協などある程度決まった委託先に委託するという形になるのではないかと。NPO等の受託は今の割合で5～6%なんです。その形は僕らが

元々つくりたかった形ではないので、何がしかの声は上げていきたいと思っています。現場で、それこそ制度を利用する人たちの視点からしたら、その形は使いやすいのか？使いづらいのか？どうなんだろう？と。そのためには実態を調べて何が問題かを整理したいと思っています。

藤田：社会保障審議会に入って、生活困窮者自立支援法をつくる委員をしていたんですけども、やはり賛否両論ありました。ただ、一定の評価はできると思うんです。厚生労働省がこういった全国各地のまだまだ法律の枠組みからもれて支援できない人達を支援していこうと、舵をそちらに向けて行きました。これまでは生活保護しかなかったところを、生活保護の手前で制度を作っていこうという。だから私は一定の評価はしているんです。ただ先程大西君が言った通り、中身をどうつくるのかというのはこれからです。残念ながら省庁も中身をもっていないんですね。私たちなど、NPOには実践の積み重ねがありますから、それをもう少し活かしながら、法をつくっていく視点をもって、長く見ていく必要があると思っています。

中村：私も、本当にスタンスは一緒です。生活保護が全国的に特に2008年以降から利用しやすくなって、その中で役所で相手にされなかった、いわゆる「支援困難者」と言われる方、また処遇困難ケース化してしまう人たちのところで活動しています。役所の人たちからも、はばかりず「この人たちを支援しても無駄だよ」と言われてきた人たちのことを、「いや、そうではなくて、この人たちにも力がある、この人たちが地域を支える大切なメンバーになるんだ」と言っていきたい。だた、やっぱりその人たちは生活困窮者自立支援法の対象にならない人たちだと思うんですね。法からこぼれ落ちる人たちと、どう生きていくのかというのが変わらずに私たちのテーマです。諦めずに、やっていきたいと思っています。



原口：ありがとうございました。お話をもっとお伺いしたいところなんですけれど、時間が押してしまいました。今日は議論することはできませんでしたが、生み出された貧困に対しどう向き合うかという課題に加えて、貧困を生み出す構造にどう立ち向かうかも、私たちの重要な課題だと思います。この点をこれからの課題として共有しつつ、こ

れで会は終りたいと思います。この後、みなでお話をしているろとフォローするおしゃべりの時間とからだほぐしの時間があるので、交流しながらお話をお伺いできるかなと思います。大西さん、藤田さん、中村さん、本日はお話しいただき、本当にありがとうございました。

* * *

このトークセッションは、2014年度ひと花プロジェクトシンポジウム「ひと花さんと呼んでください」内で行われたゲストトークの内容から一部を抜粋したものです。

※1もやい 船と船をつなぎ合わせる。また、杭(くい)などに船をつなぎとめること。そこから転じて「一緒に」「連れ立って」などの意味で使用している地域もある。「NPO法人もやい」の名前の由来にもなっている。

※2東京プロジェクト 「医療・福祉支援が必要な生活困窮者が地域で生きていける仕組みづくり・地域づくりに参加する」をプロジェクト理念として、池袋周辺と他の地域でホームレス状態にある人に向け、医療・保健・福祉へのアクセスの改善、そして精神状態と生活状況の底上げ、地域生活の安定を目的とするプロジェクト。

※3生活困窮者自立支援法 平成27年4月から施行された制度。働きたくても働けない、住む所がないなど生活全般にわたる困りごとの相談窓口が全国に設置される。自立相談支援事業、住居確保給付金の支援、就労準備支援事業、家計相談支援事業、就労訓練事業、生活困窮世帯の子ども学習支援、一時生活支援事業などが用意されている。
参考：厚生労働省「生活困窮者自立支援制度」



シンポジウム タイムテーブル
2015.2.15 @今宮ふれあい会館

10：00 あいさつ
10：05 ひと花プロジェクトの報告
10：45 ひと花笑劇団 公演「愛情航路」
11：15 ひと花メンバー座談会
12：00 ―― 昼食 ――
畑野菜の手づくりカレー
漫才、歌など、メンバーによるランチタイムショー
12：40 ひと花農作業地ツアー
13：10 ゲストトーク 大西連、中村あずさ、藤田孝典
14：25 会場全体でからだほぐしとおしゃべり
15：10 まとめ

2014年度　ひと花プロジェクト 調査報告

稲田七海（大阪市立大学 都市研究プラザ 特別研究員）

はじめに

2014年度はひと花センターが開設して2年目にあたる年です。開設した2013年度から登録者が増加し、プログラムへの参加者も2013年度（7月～3月）の利用延べ人数7,604人、プログラム実施回数807回から、2014年度の利用延べ人数12,098人、プログラム実施回数1,542回へと、大幅に増加しました。また、プログラムの中でも特に地域と関わりをもつ社会参加プログラムや地域活動が増えてきたこともあり、ひと花センターの近隣地域と関わる機会も2013年度と比較すると大きな変化がありました。

そこで、2014年度のひと花プロジェクト調査では、2013年度と同様のひと花センター登録者への実態調査に加えて、ひと花センターと関わりのある地域の方々を対象に、ひと花センターの取組み等に関する意識調査を実施しました。地域の人たちが、ひと花センターでの取組みや登録者に対してどのような印象を持ち、活動をどう評価しているのかについて、アンケート形式で回答してもらいました。以下、調査の概要について説明した後に、それぞれの調査の集計結果と分析結果について報告します。

I.　ひと花センター登録者実態調査について

■調査の概要「ひと花センター登録者実態調査」

1）調査の目的

本調査は、ひと花センター登録者の属性を把握し、利用状況や利用後の変化について明らかにすることを目的としています。

2）調査対象者

調査対象者は、ひと花センター登録者です。登録者は、①日常的に利用している人（常用）と②以前は利用していたが現在はほとんど利用していない人（常用外）、③登録のみで全く利用していない人（登録のみ）に分類できます。今回調査対象となるのは、①の常用と②の常用外に該当する66名です。この66名のうち、男性は65名、女性は1名、平均年齢は71.3才です。

3）調査方法

面接を行い質問紙にそったアンケート形式による調査を実施しました。面接調査はひと花センターにおいて、主にひと花センター職員が担当しました。また、一部訪問による調査も実施しています。

4）調査期間

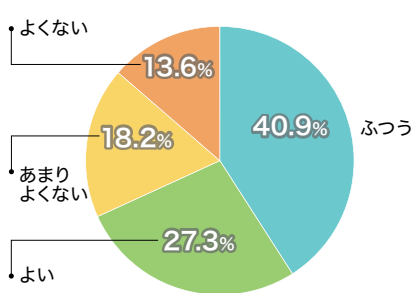
2015年3月

1. 健康に関すること

① 最近（ここ2～3ヶ月）の健康状態について

最近（ここ2～3ヶ月）の健康状態についてたずねました。40.9%の人がふつうと回答しており、よいと回答した人は27.3%です。一方で、あまりよくない、よくないと回答した人は合計で31.8%確認できます（図1-1）。

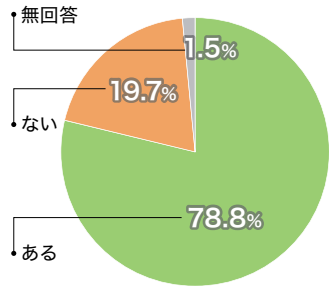
図1-1 最近の健康状態



② 持病の有無

持病に関しては、78.8%の人が持病ありと回答しています（図1-2）。持病がある人うち、84.2%が通院しています。持病のある人に病名をたずねたところ、3割の人に高血圧症や脳梗塞の後遺症、狭心症などの循環器系の慢性的な症状があることがわかりました。その他に、消化器系の持病が15%程度、糖尿病などの代謝障害は10%程度確認できました。

図1-2 持病の有無



持病があり、通院している人は84.2%、通院していない人が15.8%です（図1-3）。このうち、通院の回数は月に1回程度が半数以上の52.1%となっており、2～3回が20.8%、4～5回が14.6%と続きます。10回以上通院する人も6.3%確認できます（図1-4）。

図1-3 通院の有無

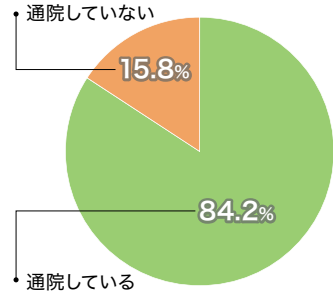
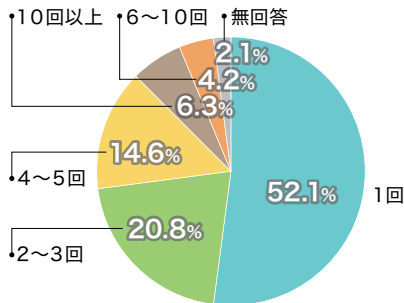


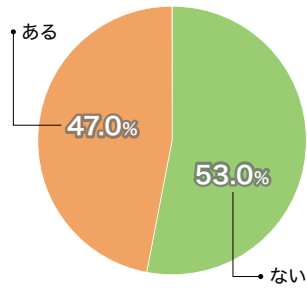
図1-4 1ヶ月の通院回数



③ 体の不自由について

持病として明確な診断は受けていないものの、日常的に身体に不自由を感じている人は47.0%確認できます（図1－5）。

図1－5 体に不自由を感じる

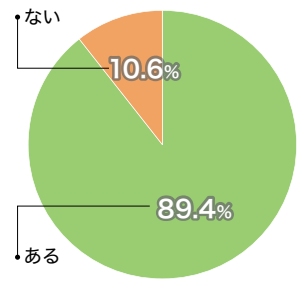


具体的にどのような不自由を感じているのか自由に答えたもらったところ、手足のしびれや筋力の衰え、体力低下、頻尿、視力低下などが確認されました。病院で受診してもらうほどではないものの、加齢に伴う心身の機能低下が少しずつ現れてきていることがうかがえます。

④ 心身の健康を保つための予防、心がけ

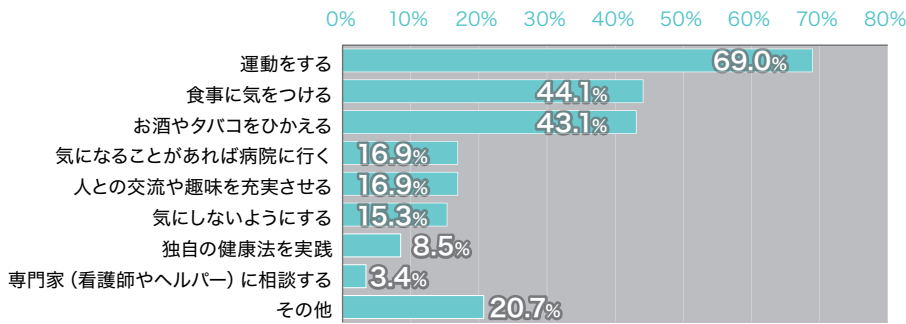
心身の健康を保つために何らかの予防的な取組みを行っている人は、9割に近い89.4%確認できます（図1－6）。

図1－6 心身の健康への予防的対策



具体的な予防法としては、上位3番目までが、運動をする（69.0%）、食事に気をつける（44.1%）、お酒やタバコを控える（43.1%）となっています（図1－7）。また、気になることがあれば早めに受診する（16.9%）といったように、症状が重篤化しないための予防的な行動も確認できます。また、人との交流や趣味を充実させる（16.9%）、気にしないようにする（15.3%）といったように、健康に対して過度に不安がらずに日々の生活を充実させる傾向にあることも読み取ることができます。

図1－7 健康を保つための心がけ

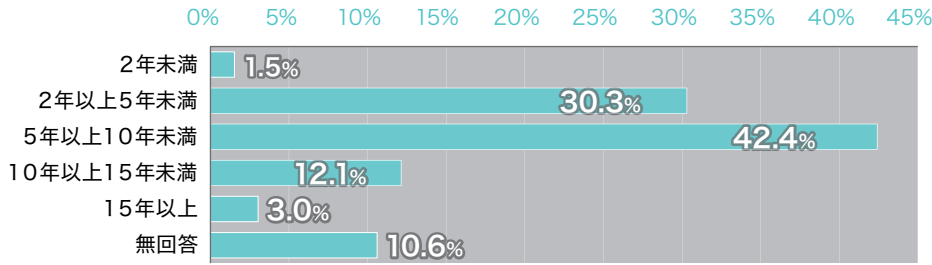


2. 生活保護やお金のことについて

① 生活保護受給期間

調査対象者の生活保護の受給期間は、5年以上10年未満がもっとも多く（42.2%）、続いて2年以上5年未満（30.3%）となっており、7割以上が10年未満となっています。一方、10年以上受給している人は、10年以上15年未満が12.1%、15年以上が3.0%となっています（図2－1）。

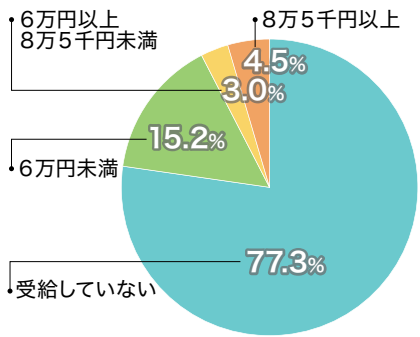
図2－1 生活保護受給期間



② 年金の受給

調査対象者のうち、22.7%が年金を受給しています。1ヶ月の年金の受給額は、6万円未満が15.2%、6万以上8万5千円未満が3.0%、8万5千円以上が4.5%となっています（図2－2）。年金を受給している人は生活保護と併用して生活費の不足分を補っています。

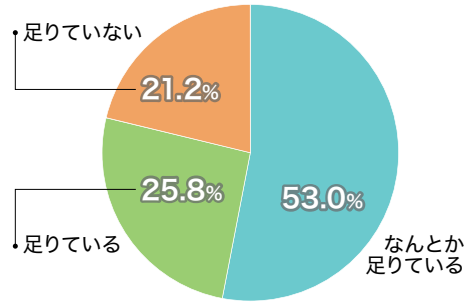
図2－2 年金受給の有無



③ お金は足りているか

月々のお金についてたずねたところ、なんとか足りているが53.0%となっており、半数以上の人が生活保護費や年金などをやりくりしながらなんとか生活することができていることがわかります。足りているが25.8%、21.2%が足りていないと回答しました（図2－3）。

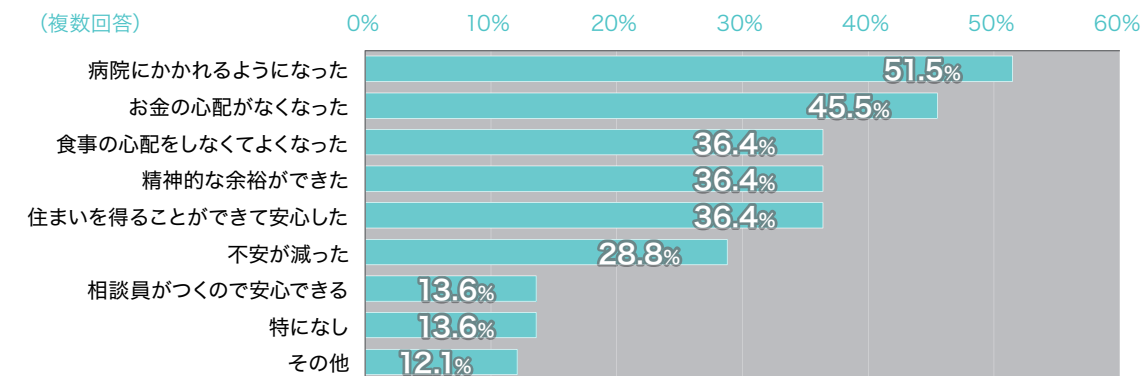
図2－3 お金は足りているか



④ 生活保護受給後の気持ちや意識の変化

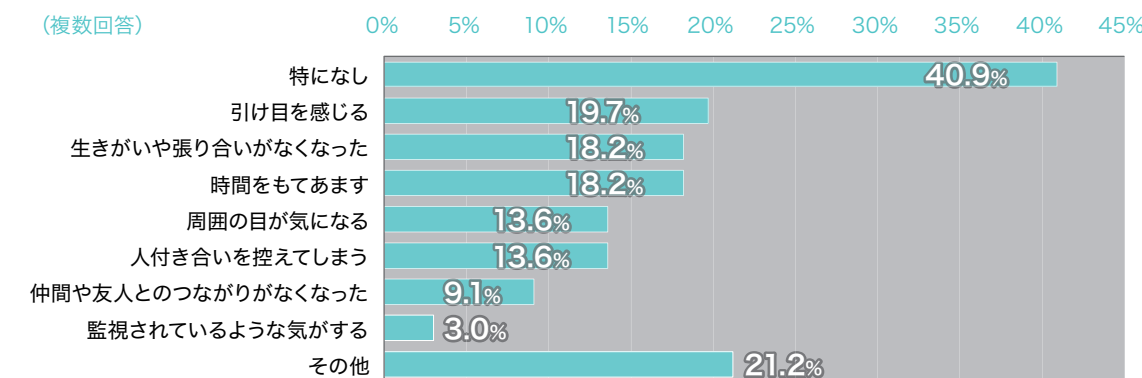
生活保護を受給してよかったこと、よくなかったことそれぞれたずねてみました。まず、生活保護を受給してよかったことは、半数以上の人が病院にかかれるようになった（51.1％）を挙げています。この次に、お金の心配が無くなった（45.5％）、食事の心配をしなくてよかった（36.4％）、精神的な余裕ができた（36.4％）、住まいを得ることができて安心した（36.4％）、が続きます。その人の生存の根源的な部分を、生活保護受給によって支えることが可能になったことがわかります。また、その他として、自暴自棄が減った、他の家族に気を使わなくてよかった、お金のありがたみがわかるようになった、などの回答が得られました（図2－4）。

図2－4 生活保護を受給してよかったこと



一方で、生活保護を受給してよくなかったことは、特になしと答えた人が4割を超えます。これに、生活保護を受給することで、引け目を感じる（19.7％）が続きます。同様に、周囲の目が気になる（13.6％）、人付き合いを控えてしまう（13.6％）、といったように、生活保護を受給することへの否定的な考えが、その人自身のふるまいや人との接し方を萎縮させていることがうかがえます。上位3番目以下は、生きがいや張り合いが無くなった（18.2％）、時間を持て余す（18.2％）、仲間や友人とのつながりがなくなった（9.1％）が確認できます（図2－5）。これまで、仕事中心の生活や、野宿生活などでの仲間と支え合う生活から、生活保護を受給する生活に移行する中で、仕事に代わる活動や時間の使い方や人とのつながりなどが十分に構築できていない様子がうかがえます。

図2－5 生活保護を受給してよくなかったこと



⑤ お金の無駄遣いを防ぐ心がけや工夫

83.3％の人がお金の無駄遣いをしないための工夫を行って生活費をやりくりしています（図2－6）。やりくりのなかで、多くの人が自炊する（67.9％）と答えています。これに4割以上の人が安売りのお店で買い物をする（41.1％）が続き、3割以上の人がお酒ギャンブルをひかえる（33.9％）と答えています（図2－7）。食費や生活必需品などの、生活に必要な消費材を節約しているほか、お酒、ギャンブルのほか、嗜好品、趣味娯楽などをひかえる傾向も強くみられます。また、お金の使い方として、一日に使える金額を決めていたり、必要以上の現金を持ち歩かない、家計簿をつける、などの工夫をしていたり、金銭管理を頼んでいる人も確認できます。

図2－6 お金を無駄遣いしないための工夫

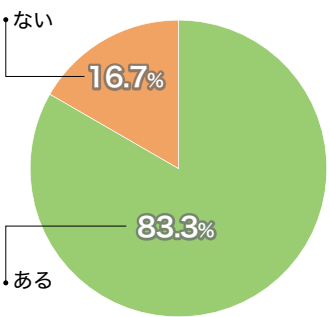
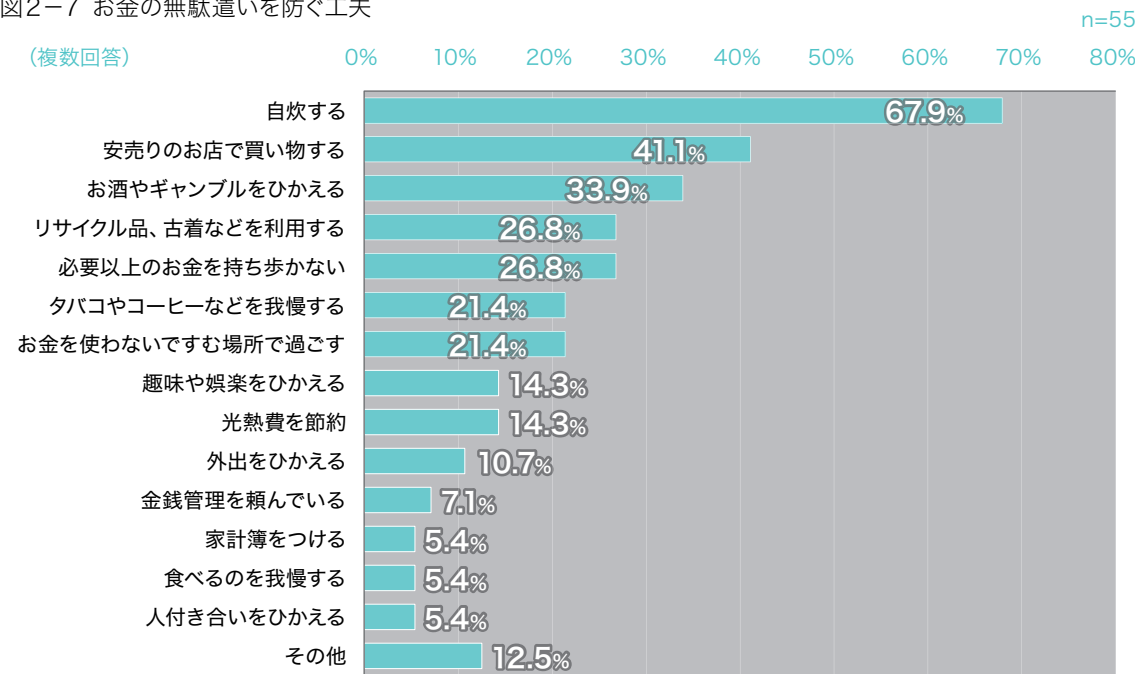


図2－7 お金の無駄遣いを防ぐ工夫

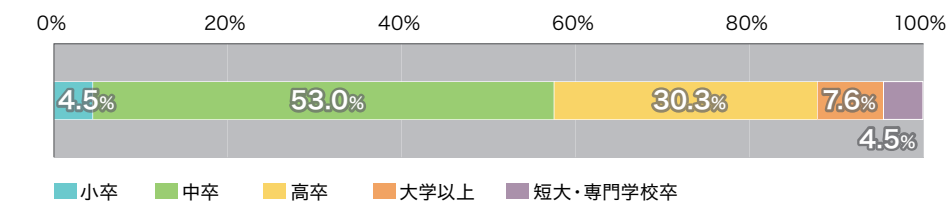


3. 学歴・仕事

① 最終学歴

最終学歴でもっとも多いのが中卒で、半数以上の53.0%を占めます。高卒が30.3%と続き、大学や短大・専門学校などの高等教育機関を卒業した人は、12%程度となっています（図3-1）。

図3-1 最終学歴



② 過去の最長職

登録者の最長職で最も多いのが、建設作業従事者(31.8%)です。これに続くのが建設技能従事者(15.2%)で、建設関連の仕事についていた人が半数近い47%を占めています（図3-2）。この他、工場労働従事者やサービス業従事者の割合が若干高くなっています。また、最長職時の雇用形態をたずねたところ、約4割が正社員と回答しています(図3-3)。これに続くのが日雇労働(25.8%)で、契約・嘱託社員(22.7%)、パートアルバイト(4.5%)です。これら非正規の不安定な雇用形態で仕事をしていた人は半数を超えています。

図3-2 最長職

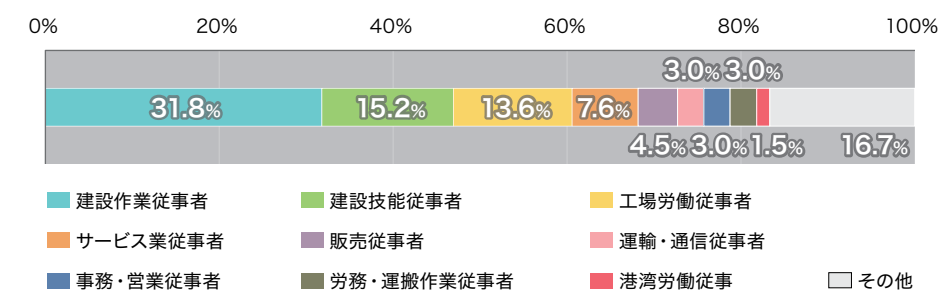
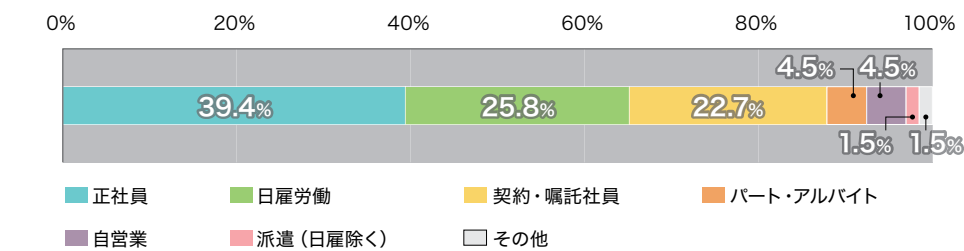


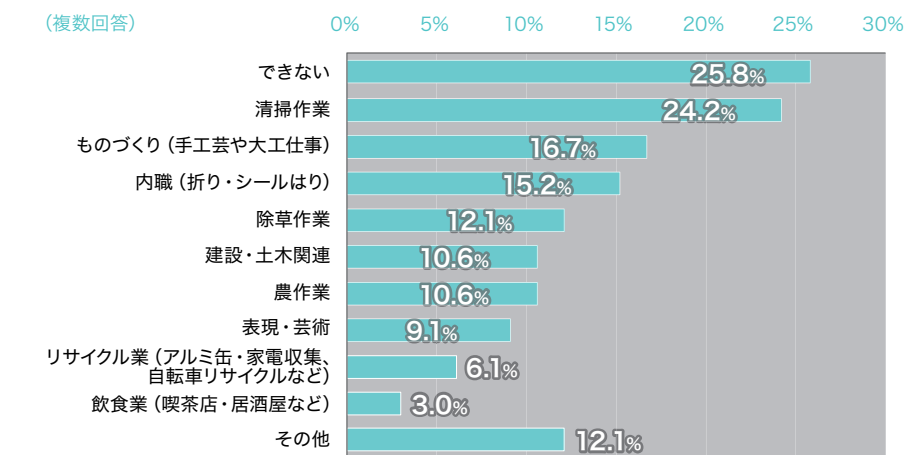
図3-3 最長職時の雇用形態



③ 仮に仕事ができるのなら、どのような仕事をしたいか、あるいはできるか

次に、仮に仕事ができるのなら、どのような仕事をしたいか、あるいはできるかについてたずねました（図3-4）。もっとも多かったのが、仕事はできない(25.8%)となっています。上位をみると、清掃作業(24.2%)や除草作業(12.1%)のように、地域への貢献度が高く、成果の見えやすい仕事への希望が強いことがうかがえます。また、特掃（あいりん地域高齢日雇労働者特別清掃事業）経験者が多いことも清掃を希望する一因となっているようです。次に、ものづくり(16.7%)のように創造性を伴う作業が上位にあるのも特徴的です。内職(15.2%)のように単純な軽作業への希望が高い一方で、建設・土木関連の仕事(10.6%)のように、これまでの職歴内容と同様の仕事を希望する傾向があることも確認できました。

図3-4 現在したい仕事、できる仕事



4. 人づきあいや「つながり」について

① 日頃の近隣でのつきあい

近所や隣室の人との付き合いがあると回答した人は63.6%、ないと回答した人は36.4%となっています（図4-1）。実際にどのようなつきあい方をしているかたずねたところ、挨拶をかわす程度(43.2%)、立ち話をする程度(27.3%)となっています。7割程度の人が、近所や隣室の人との関係は、挨拶や立ち話をかわす程度の浅い付き合いであることがわかります。一方、困りごとの相談や助け合ったりする(15.9%)、簡単な頼み事や物の貸し借りを(4.5%)といったように、密接な関係を持ちながら助け合っている人も2割確認できます（図4-2）。

図4-1 近所の人とのつきあい

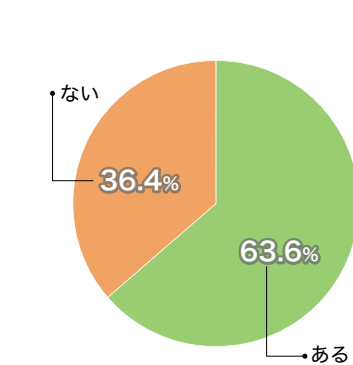
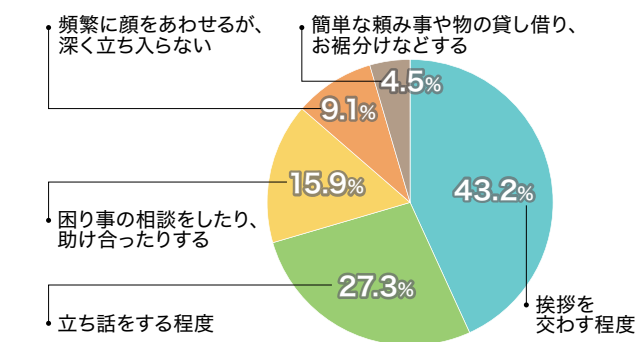


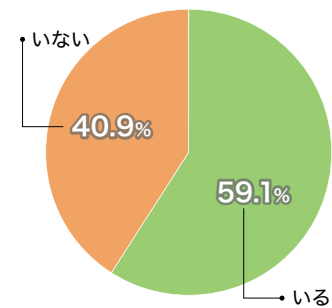
図4-2 つきあい方



② 共通の話題や趣味をもつ友人

共通の話題や趣味を持つ友人の存在についてたずねたところ、59.1%がいますと答えています（図4-3）。

図4-3 共通の話題や趣味をもつ友人



③ 困りごとや不安なことの内容

困りごとや不安なことや、相談できる人の存在についてたずねました（図4-4）。まず、現在困りごとや不安なことについては、62.1%がないと答えています。一方で、あると答えた人は36.4%確認できます。具体的な困りごとの内容には、健康に関することが54.2%と最も多く、次に死に関すること（37.5%）が続きます（図4-5）。

図4-4 困りごとや不安なこと

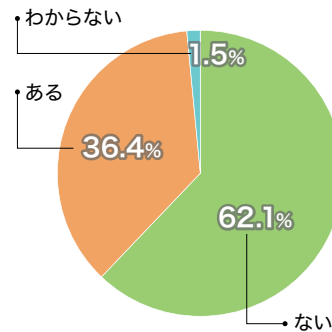
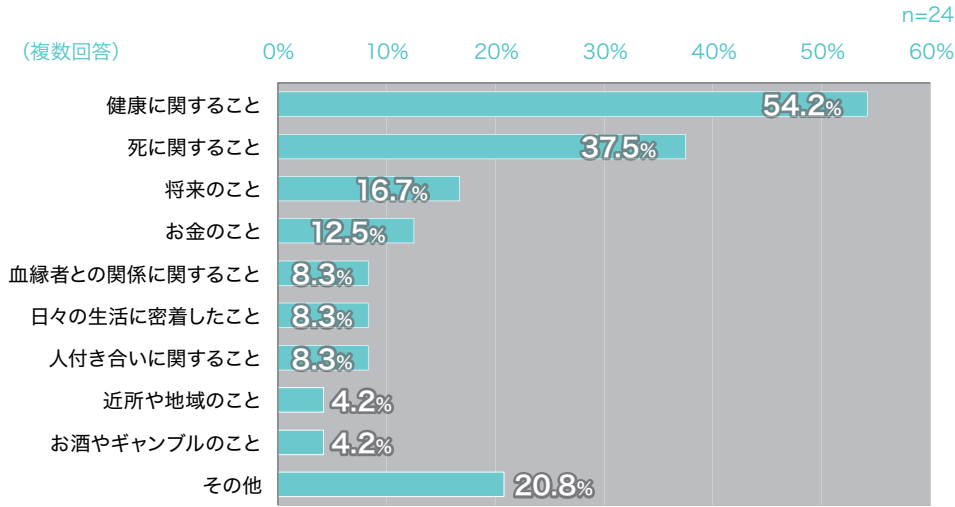


図4-5 困っている内容



④ 困りごとの相談相手

困りごとの相談相手は、いると答えた人が65.2%と比較的高い値を示しており（図4-6）、相談する相手は、友人・知人が31.0%、近所の人が21.4%となっています（図4-7）。これに続いて、福祉事務所のケースワーカー（21.4%）、ひと花センターの職員（19.0%）と公的な相談機能をつうじて相談しているのに対し、血縁関係にある兄弟姉妹（9.5%）、子（4.8%）を相談相手とする割合は低く、親族・血縁関係の希薄さがうかがえます。また、生活支援を実施する居住資源が充実している地域性を反映して、アパートの大家や管理人、不動産屋など住宅に関係する人に相談していると回答した人が11.9%確認できます。

図4-6 困りごとの相談相手

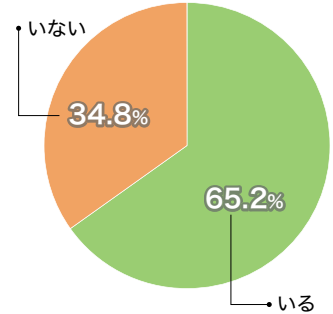
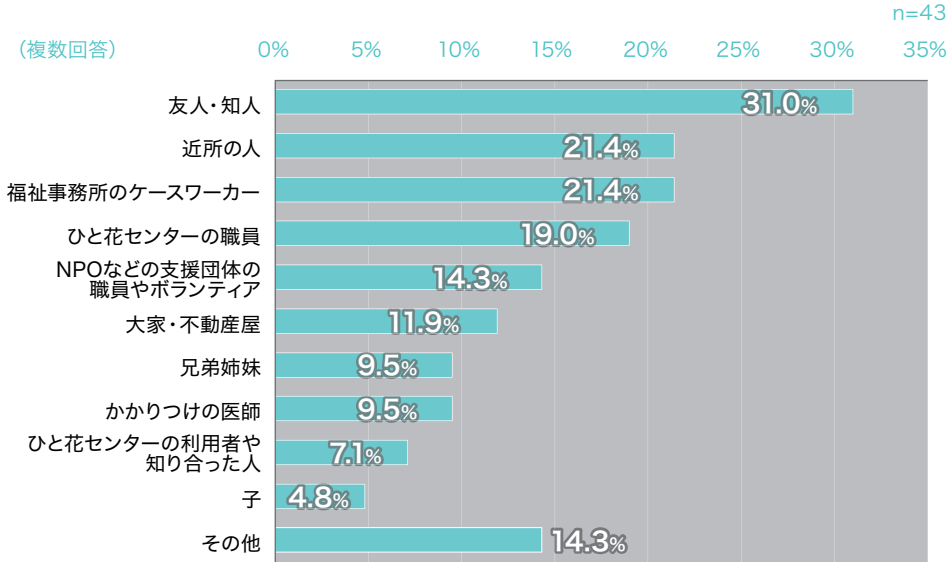


図4-7 困った時に相談する相手

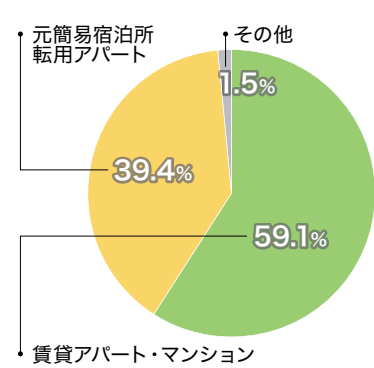


5. 住まいについて

① 現在の住まい

登録者の6割近くが、一般の賃貸アパート・マンションに居住しており（59.1%）、4割があいりん地域内や周辺に多い元簡易宿泊所転用アパートに居住しています（39.4%）（図5-1）。

図5-1 現在の住まい



② 部屋の専用設備

元簡易宿泊所転用アパートには、専用設備が無く、トイレ、風呂、台所全てが共用となっています。一方で、一般の賃貸アパート・マンションでも、専用トイレが無い住宅が10.3%、専用風呂が無い住宅が20.5%、専用台所が無い住宅が7.7%確認できます（表5-1）。

表5-1 住宅形態別の専用設備

		全体	賃貸アパート・マンション	元簡易宿泊所の転用アパート	その他
a. 専用トイレ	なし	45.5%	10.3%	100.0%	0.0%
	あり	54.5%	89.7%	0.0%	100.0%
b. 専用風呂	なし	51.5%	20.5%	100.0%	0.0%
	あり	48.5%	79.5%	0.0%	100.0%
c. 専用台所	なし	43.9%	7.7%	100.0%	0.0%
	あり	56.1%	92.3%	0.0%	100.0%

③ 部屋の広さ

現在の住まいの広さを畳の総数と面積で見ました。図5-2によると、3畳の部屋に住んでいる人がもっとも多く16.7%、4.5畳が15.2%となっており、4.5畳以下の部屋に住んでいる人が半数を占めます。図5-3は住まいの形態と広さの関係をグラフに表したものです。グラフには示していませんが、全体をみると6㎡以下の部屋に住んでいる人は25.3%、7㎡以上10㎡以下が37.9%となっており、1畳1.65㎡とした場合、10㎡（6畳）以下の住まいに住んでいる人が6割以上となっています。一般の賃貸アパート・マンションの場合、狭いものから比較的ゆとりのあるものまで広さはさまざまです。しかし、簡易宿泊所転用アパートは、6㎡（およそ畳3.5畳）以下が53.8%、7㎡以上10㎡以下が42.3%となっており、9割以上の人たちが非常に狭小な居住空間で生活していることがわかります。一般の賃貸アパート・マンションもあわせて考慮

しても、生活保護を受給しているという同条件下において、住宅の形態、広さ、さらに質においても非常にばらつきのある住宅に居住していることがわかります。なお、最低居住面積の水準（単身：25㎡、畳16畳相当）を満たす住宅に住んでいる人は確認できませんでした。

図5-2 住宅の広さ（畳の総数）

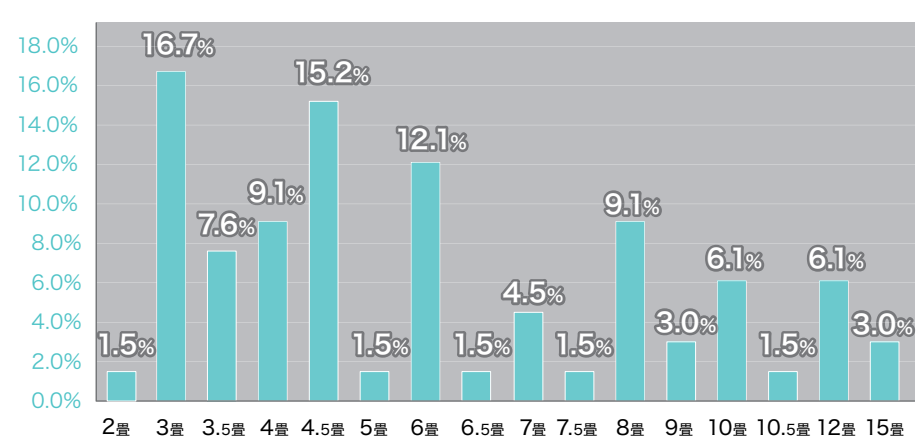
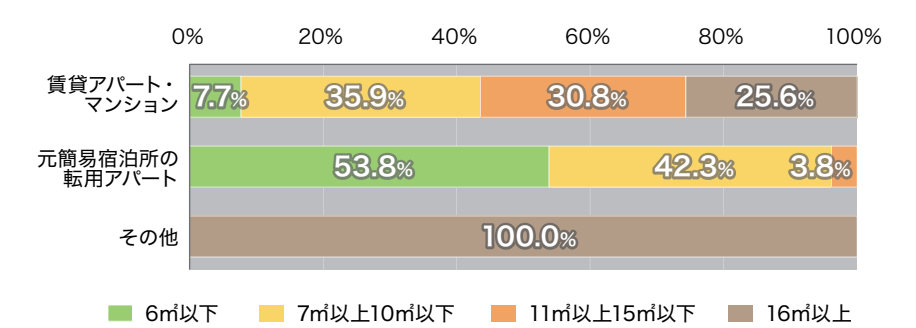


図5-3 住まいの形態と広さ（㎡）



④ 住んでいる部屋に関する大家、不動産屋、管理人などとの関わりと関係性

現在の住まいの大家や仲介している不動産業者との関係性についてたずねてみました（表5-2）。大家や不動産屋との関わりについては、ないが57.6%、あるが42.2%となっています。関わりの有無にかかわらず、大家・不動産屋との関係についてたずねたところ、よいが64.3%にたいして、悪いと答えた人は確認できませんでしたが、どちらでもないと答えた人が35.7%となっています。次に管理人とのかかわりは、半数の人があると答えているのに対し、いるが関わりがないという人は18.2%、管理人がいないという物件に住んでいる人は31.8%となっています。支援スタッフとの関係について見てみると、9割以上の人が支援スタッフはいない（92.4%）と答えています。一方、支援スタッフがいても関わりがないが7.6%となっており、調査対象者のほとんどが、生活支援等を実施していないアパートに居住していることがわかります。しかし、これらの調査対象者に個別に話を聞いてみると、生活支援が実施されていなくても、例えば、大家や不動産屋の助言によって生活保護受給につながったケースや、支援とまではいかないものの管理人や大家と日常的にコミュニケーションを取ったり、安否を気にかけられたりするケースなども散見され、緩やかな見守りの体制が存在しているようです。

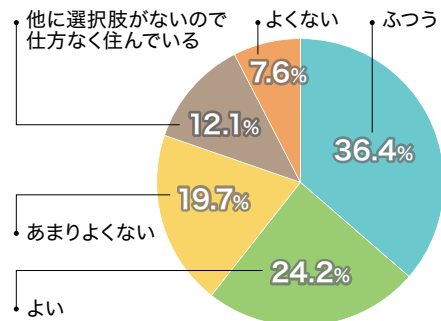
表5-2 住宅に関わる人との関係性

	全体		関係性		
			よい	悪い	どちらでもない
a. 大家・不動産屋	関わりあり	42.2%	64.3%	0.0%	35.7%
	関わりなし	57.6%	0.0%	0.0%	100.0%
b. 管理人	関わりあり	50.0%	69.7%	6.1%	24.2%
	いるが関わりなし	18.2%	9.1%	0.0%	90.9%
	いない	31.8%	0.0%	0.0%	0.0%
c. 支援スタッフ	いるが関わりなし	7.6%	0.0%	0.0%	100.0%
	いない	92.4%	0.0%	0.0%	0.0%

⑤ 住み心地

現在の住まいの住み心地をたずねたところ（図5-4）、36.4%の人がふつうと答えており、24.2%がよいと答えています。一方で、あまりよくない、よくない、と評価をしている人が、合計27%程度となっています。また、他に選択肢がないので仕方なく住んでいるというひと12.1%確認できます。

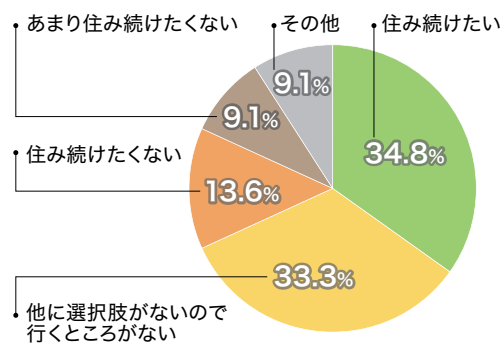
図5-4 住まいの住み心地



⑥ 住宅への住み続け

次に住み続けの意思についてたずねてみたところ（図5-5）、現在の住まいに住み続けたいと答えた人が34.8%となっています。一方で、他に選択肢が無いので行くところないが33.3%、住み続けたくないが13.6%、あまり住み続けたくないが9.1%となっており、住み続けに関しては全体的に消極的な理由が多いことが確認できます。

図5-5 住み続けの意思



6. 地域に関すること

ここでは、地域での生活と活動について見ていきます。

① 西成で暮らし始めた時期や目的 西成での生活期間

西成で暮らし始めた時期は20年以上30年未満がもっとも多く、22.7%となっています。次に多いのが、5年以上10年未満で21.2%確認できます（図6-1）

西成にきた目的は、半数以上の54.5%があいりん地域で仕事をするためと答えています（図6-2）。また、アパート等で生活保護を受給するため18.2%、施設に入所するため1.5%確認でき、大きく分類すると、仕事のため、福祉のための2つが代表的な理由となっています。その他には、放浪・漂泊の末に釜ヶ崎にたどりついた人（6.1%）や特に目的を持たずにやってきた人たち（3.0%）も確認できます。その他の理由としては、ドヤや良いアパートがあるからといったように、居住資源を求めてやってきた人たち、困ったことがあれば西成に行けばなんとかなると思ってやってきた人なども確認できました。

図6-1 西成での生活期間

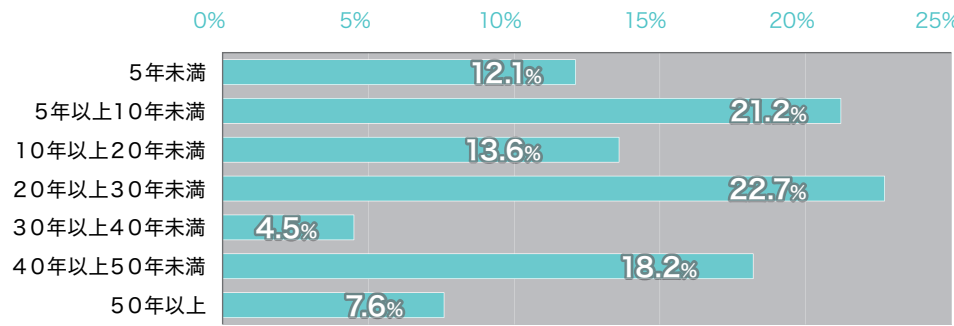
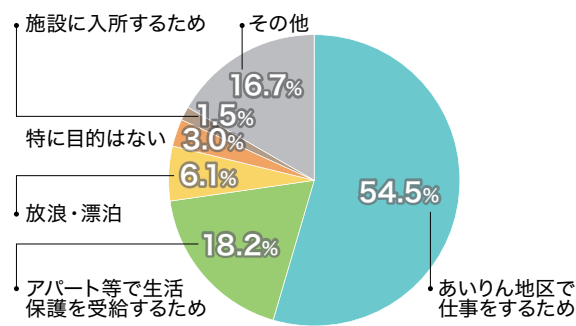
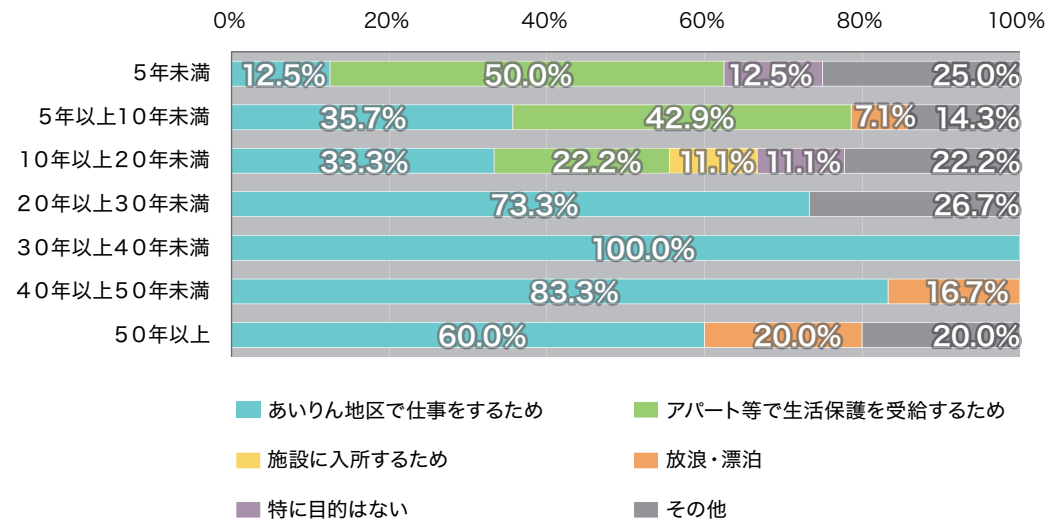


図6-2 西成にきた目的



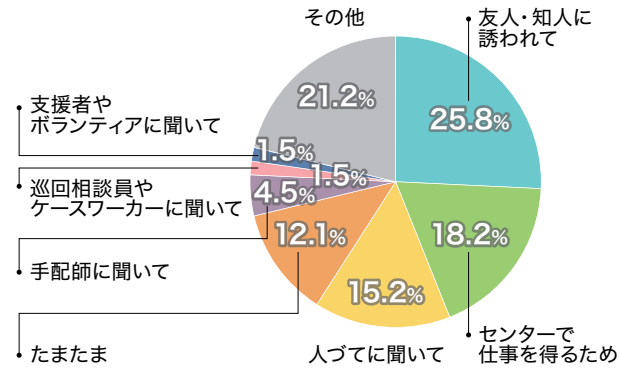
さらに、西成での生活期間別に西成にきた目的をみると、アパートで生活保護を受けるために西成にきた人の割合は、5年未満で50.0%と高い値を示しますが、20年以上生活している人たちには確認できません。また、あいりん地域で仕事をするために西成にきた人は、20年未満は33.3%、一方20年をこえると73.3%となっており、20年を境目として、西成にきた目的が大きく変化していることがわかります（図6-3）。

図6-3 西成での生活期間と西成にきた理由



西成で生活する際のつて（仲介）については（図6-4）、友人・知人に誘われた（25.8%）、センターで仕事を得るため（18.2%）、人づてに聞いて（15.2%）の3つの理由が6割を占めます。

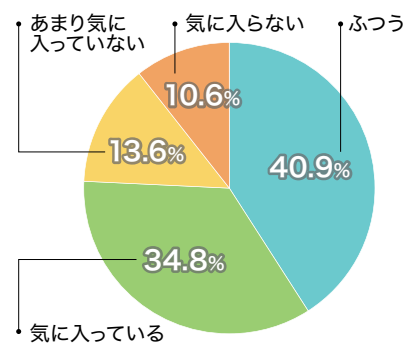
図6-4 どのようなつてがあったか



② 地域への愛着

次に住んでいる地域を気に入っているかどうかについてたずねてみました（図6-5）。40.9%がふつうと答えており、気に入っているは34.8%です。一方で、4分の1の25%程度があまり気に入っていない、気に入らないと答えています。

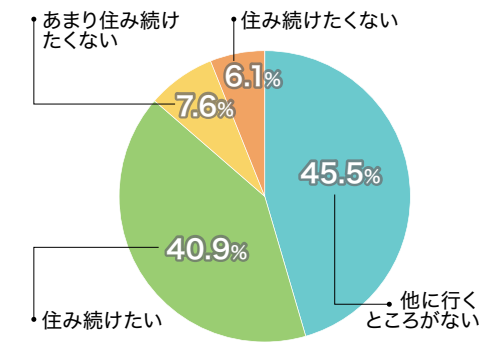
図6-5 地域を気に入っているか



③ 地域への住み続け

地域への住み続けの意思についてたずねました（図6-6）。半数近くの45.5%が、他に行くところがないので住み続けるしかない、と答えています。住み続けたいという意思を示した人も40.9%確認できますが、あまり住み続けたくない、住み続けたくないと答えた人たちも14%程度確認できます。

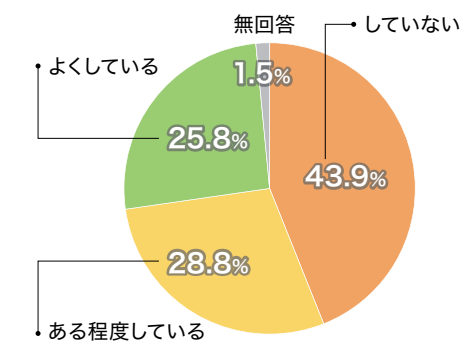
図6-6 地域への住み続けの意思



④ 地域の行事や活動への参加状況

次に地域との関わりについて見ていきます。まず、地域の行事や活動への参加は、43.9%がしていないと答えています。これに対して、ある程度しているが28.8%、よくしているが25.8%となっており、半数以上の人が地域での活動に何らかの形で関わっていることがわかります（図6-7）。

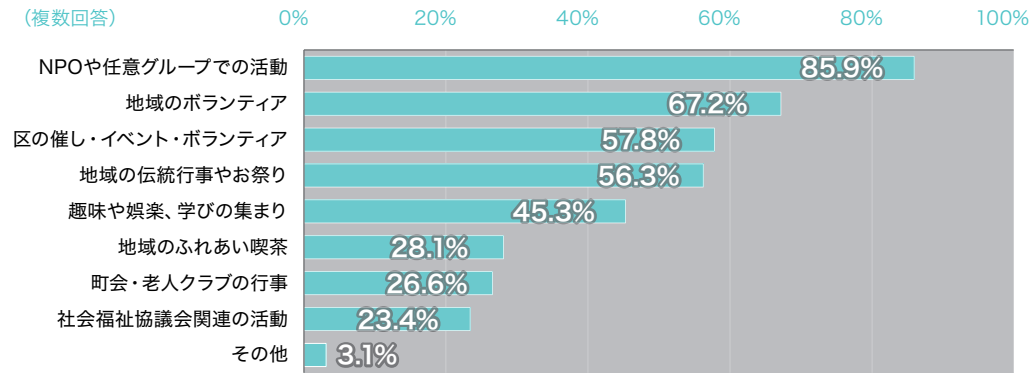
図6-7 地域の行事や活動への参加



a. 地域活動・行事への認知

次に、地域でのどのような活動に参加しているか、参加の頻度と参加のきっかけについてたずねました。まず、それぞれの地域活動の認知度をみると、NPOや任意グループでの活動がもっとも多く、85.9%となっています（図6-8）。地域のボランティア、区の催し・イベントボランティア、地域の伝統行事やお祭りに関しては、半数以上の人が活動の存在を知っていますが、地域のふれあい喫茶、町会・老人クラブの行事、社会福祉協議会関連の活動などの町会や社会福祉協議会などの公的部門が実施している活動については、認知度が低いことがわかります。

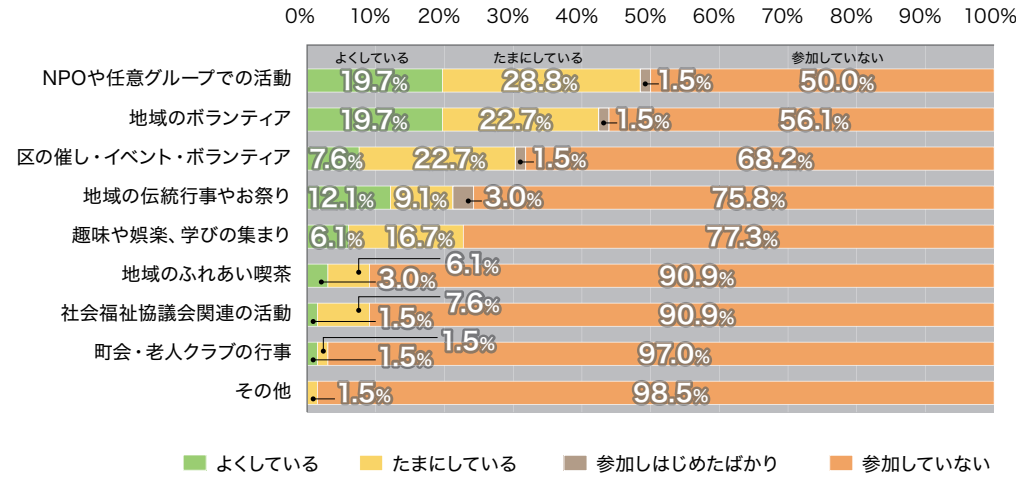
図6－8 地域の活動への認知



b. 参加の頻度

次に、地域活動の参加頻度についてみていきます（図6－9）。まず、NPOや任意グループでの活動に参加している人が50%確認できます。参加の多い上位5位は地域活動の認知の上位5位と同じ結果となっています。実際の参加についても同様に、町会や公的部門が主催する活動への参加が低くなっています。内閣府が2014年（H26年）に実施した「一人暮らし高齢者に関する意識調査」（2015年7月3日参照：http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/kenkyu/zentai/index.html）では、一人暮らし高齢者の地域のグループ活動の参加経験として、趣味やスポーツの集まりが28.6%もっとも高く、これに続いて28.2%の人が自治会や町内会での活動となっています。一方で、NPOやボランティアグループでなどの社会活動は5.6%と低い値となっており、本調査の傾向とはまったく異なった結果であることがわかります。ひと花センターの登録者のNPOでの活動やボランティア活動への参加頻度の高さは、登録者の居住する西成区内での地域活動が活発であること、あいりん地域（釜ヶ崎）における活動資源が豊富であること、さらに、そうした活動の機会にひと花センターのように登録者と地域を仲介する役割があることが、大きな要因となっていると考えられます。

図6－9 地域活動への参加頻度



c. 活動を知った、また参加するようになったきっかけ

活動を知った・参加したきっかけについては（図6－10）、ひと花センターでのプログラムとして地域の活動を知った人が33.5%となっています。その他は、ポスター・チラシをみて（21.8%）、ひと花センターで情報を得て（12.7%）、知人友人が参加していたから（8.7%）、NPOなどの支援団体をとおして（8.4%）となっています。これを参加活動別にみたところ（図6－11）、町会関連や社協関連の活動は、ポスター・

チラシなどで情報を得ている傾向が強く出ています。区のイベントやボランティア、地域のボランティア、NPOなどの活動は、ひと花センターのプログラムの一環として、あるいはひと花センターで情報を得て参加する傾向が際立って強く出ています。これは裏を返せば、ひと花センターと町会・老人会や社会福祉協議会とのつながりが希薄であるようにとらえることもできますが、もともとあいりん地域での町会加入率は7%と非常に低く、町会活動そのものがあまり活発ではないため、つながりが生まれにくい可能性があります。しかし、プロジェクトの連合体事業の中には町会に関するNPOもあるため、町会とも関係を持ちつつあるのが現状です。今後のひと花での活動や事業に関する協力連携体制の構築を町会に働きかけることで、つながりの強化や地域の活性化につながる取組みが期待できるかもしれません。

図6－10 活動を知った・参加したきっかけ

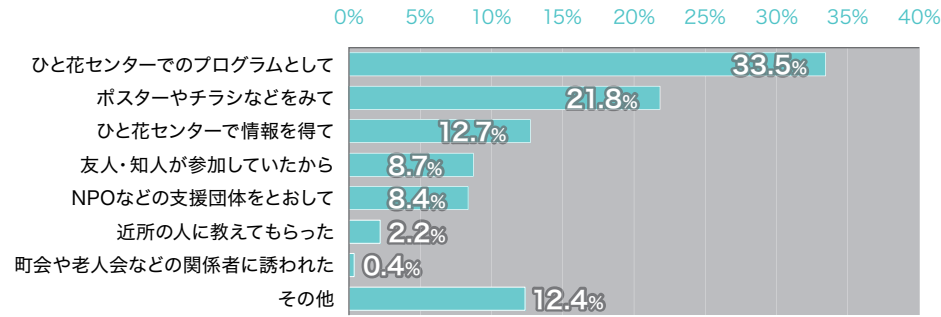
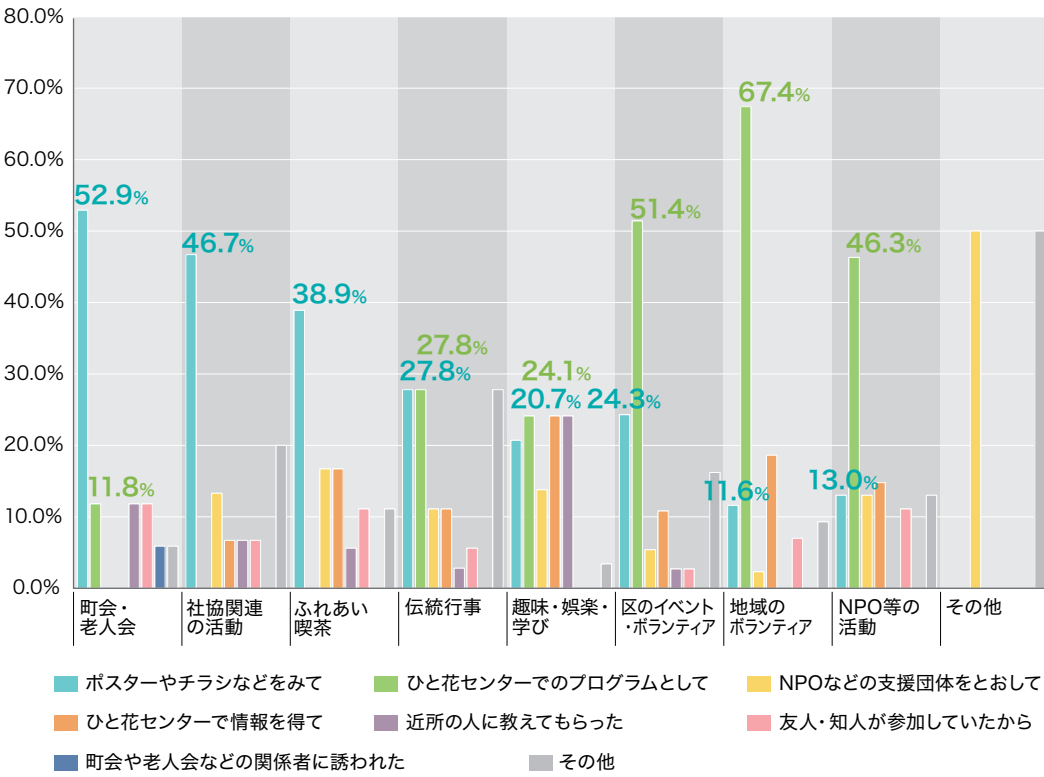


図6－11 参加活動別の活動の認知および参加のきっかけ



⑤ 地域のために何か役に立ちたいと思うか、自分は地域の役に立っているか

地域のために役に立ちたいと思っている人が69.7%と意欲の高さがうかがえますが（図6-1 2）、実際に地域の役に立っているかどうかについては、実際に役に立っていると答えた人は19.7%にとどまります（図6-1 3）。

図6-12 地域のために役に立ちたい

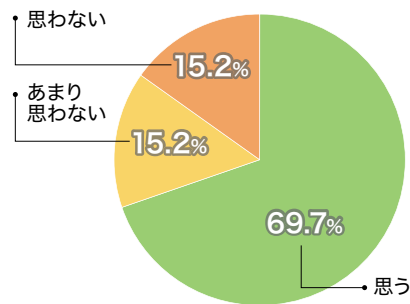
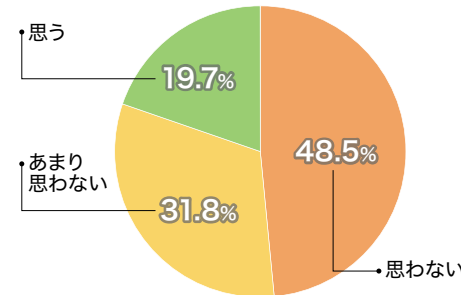


図6-13 地域の役に立っている

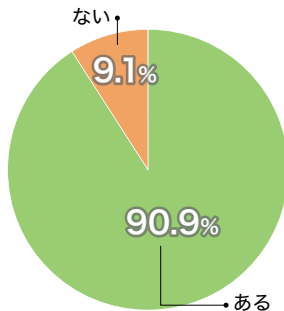


7. 普段の楽しみや活動

① 日頃楽しみにしている活動

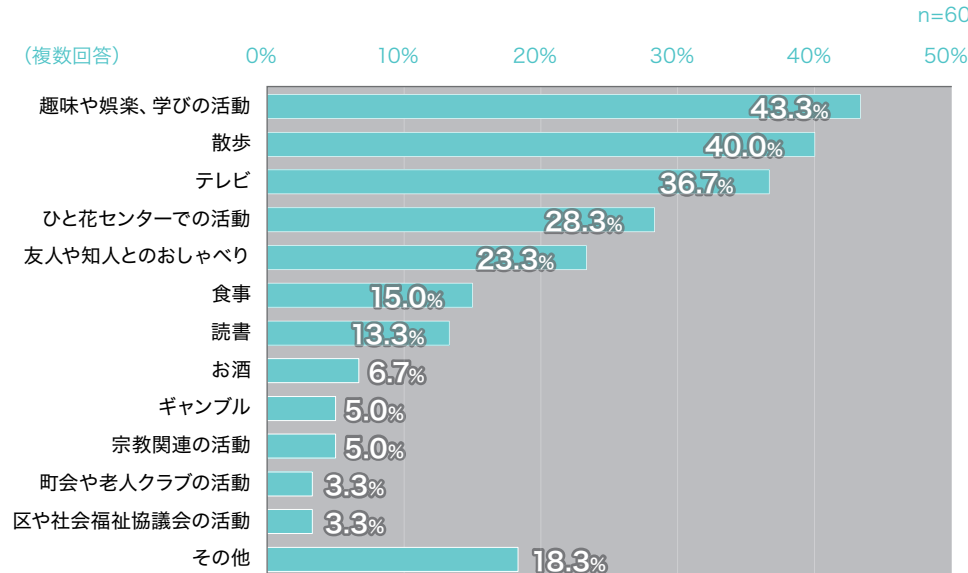
次は日頃の楽しみについてたずねます。普段楽しみにしている活動について、あると答えた人は90.9%、ないと答えた人は9.1%です（図7-1）。

図7-1 楽しみにしている活動



具体的にどのような楽しみがあるかたずねたところ、上位に趣味や娯楽、学びの活動（43.3%）、散歩（40.0%）、テレビ（36.7%）が確認できます。これに、ひと花センターの活動（28.3%）、友人や知人とのおしゃべり（23.3%）が続きます（図7-2）。一人での楽しみが多く単調とも取れる生活の中で、趣味や娯楽、学びの活動やひと花センターでの活動は、人と一緒に楽しむことのできる貴重な場になっていることがわかります。また、相対的にお酒やギャンブルの割合が低くなっていることも注目すべき点です。ギャンブルやお酒以外の楽しみの選択肢があることが明確に現れています。

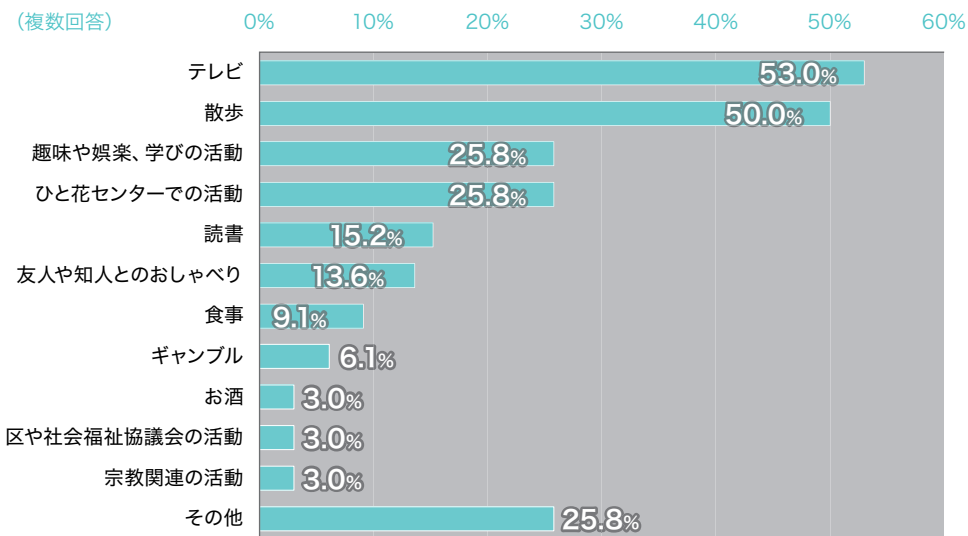
図7-2 日頃の楽しみ



② 暇な時間の過ごし方

日頃の楽しみと同様の選択肢で、暇な時の過ごし方についてたずねてみました（図7-3）。こちらも、テレビや散歩を挙げる人が半数以上確認できます。この次に、趣味、娯楽、学びの活動、ひと花センターでの活動が25%以上となっています。一方で、お酒やギャンブルなどに時間を潰す人は、ギャンブルが6.1%、お酒が3.0%となっており、割合としては少なくなっています。

図7-3 暇な時間の過ごし方



③ お酒

次に飲酒についてみていきます。

まず、飲酒の習慣については、大まかに見ると、飲む人と飲まない人がちょうど同数程度の割合で確認できます（図7-4）。お酒をどのような時に飲むかたずねてみたところ（図7-5）、単に好きだからと答えた人が27.3%、飲酒が習慣化しているからが24.2%、人付き合いのために24.2%となっています。嗜好やコ

コミュニケーションの手段としての飲酒が多いですが、これとは反対に、さみしい時（18.2%）、よく眠れるから（18.2%）、ストレスがたまっている時（15.2%）などの、消極的な理由で飲酒する人たちも一定数確認できます。

図7-4 お酒

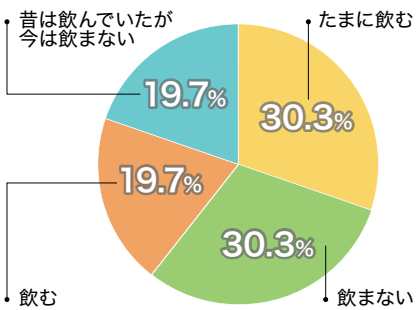
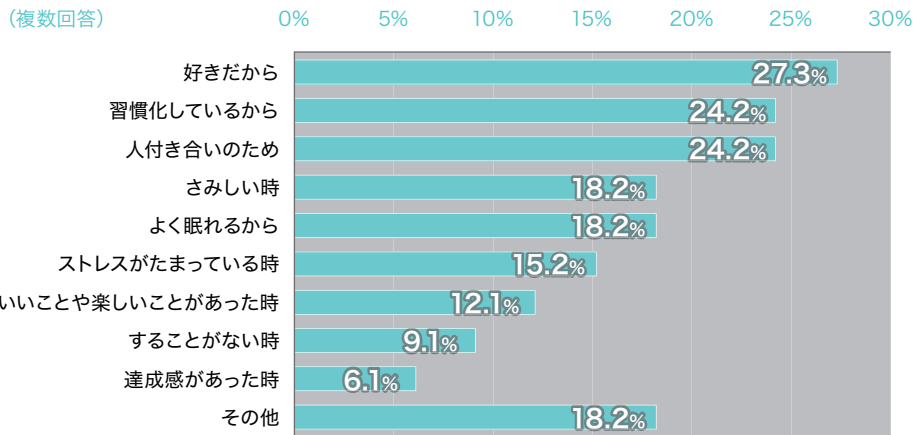


図7-5 お酒を飲むとき



④ ギャンブル

次にギャンブルについてみていきます。ギャンブルは大きく分けて、する人が4割弱、しない人が6割強となっています（図7-6）。どのような時にギャンブルをするかたずねたところ（図7-7）、好きだから（32.0%）、趣味だから（28.0%）のように、ギャンブルそのものの行為が娯楽や趣味となっている人たちが多く確認できます。しかし、単なる趣味・娯楽の範疇を超えて、お金を増やすための手段としてギャンブルをする人も24.0%確認できます。また、することが無い時（12.0%）、ストレスがある時（12.0%）のように、お酒と同様消極的な理由からギャンブルをする人も確認できます。

図7-6 ギャンブル

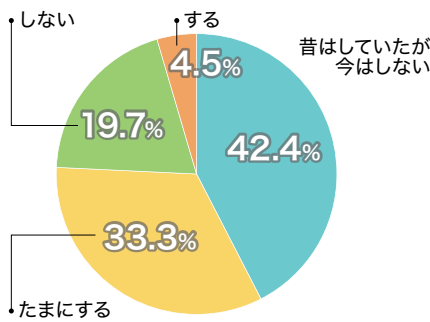
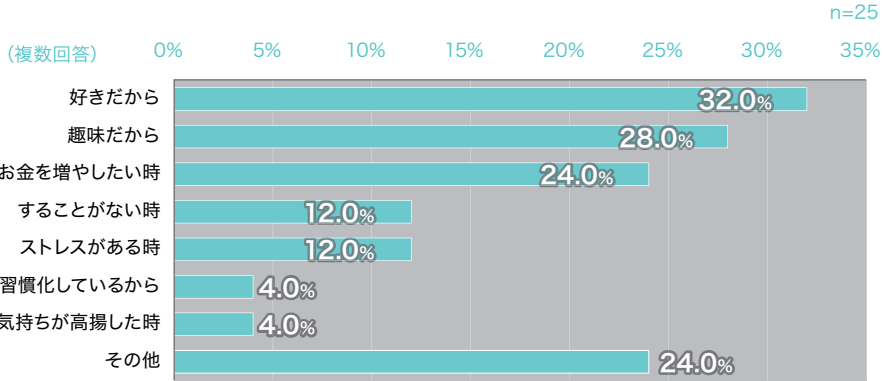


図7-7 ギャンブルをするとき



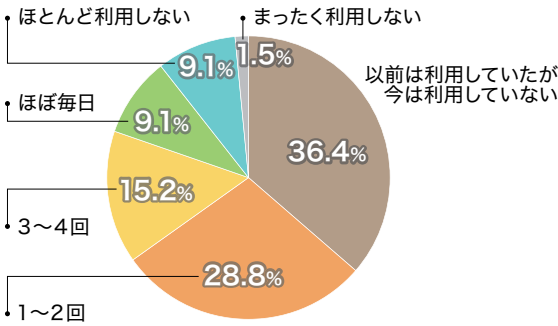
8. ひと花センターの利用実態

① ひと花センターの利用回数（週あたり）

今回の調査では、定期的に利用している人（常用）、以前は利用していたが最近では利用していない人たち（常用外）を対象に実施しています。

まず、ひと花センターの週あたりの利用回数は、1～2回が28.8%となっており、定期的に利用する中ではもっとも多くなっています。一方、以前は利用していたが、今は利用していない人（常用外）は36.4%確認できます（図8-1）

図8-1 週あたりの利用回数



来所方法はほとんどの人が徒歩です（図8-2）。来所までの所用時間は、10分以内が最も多く（図8-3）、78.6%となっており、8割近くがひと花センターの徒歩圏内に住んでいます。

図8-2 来所方法

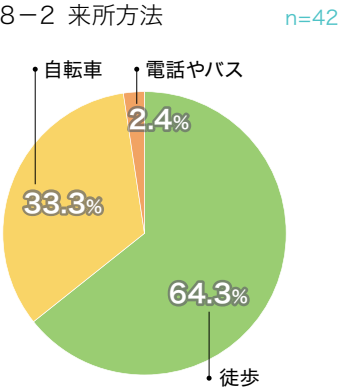
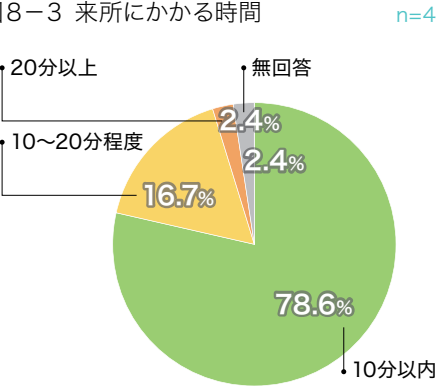


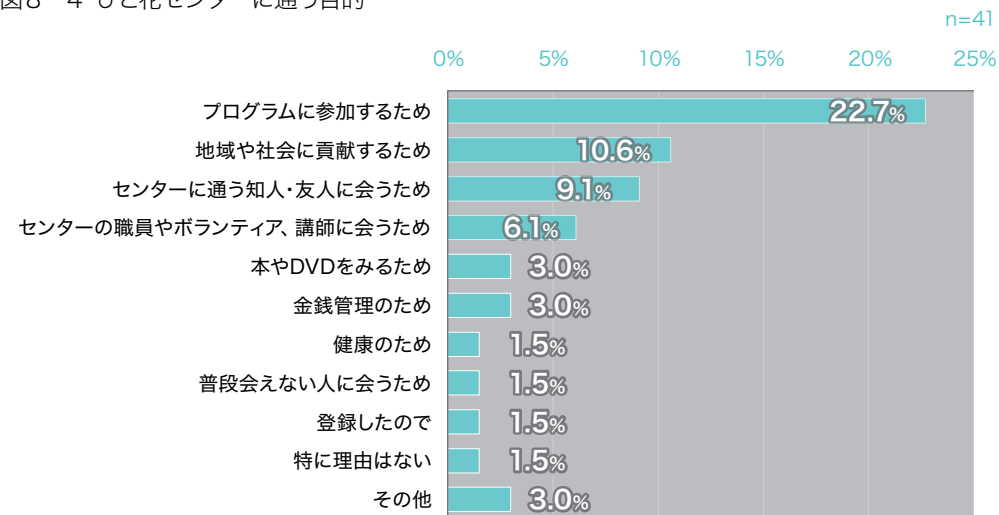
図8-3 来所にかかる時間



② ひと花センターに通ういちばんの目的

ひと花センターに通ういちばんの目的をたずねてみました（図8-4）。上位は、プログラムに参加するた
めが22.7%、地域や社会に貢献するため10.6%となっており、提供されているプログラムに参加するだけ
ではなく、ひと花での活動を通した地域貢献を目的にしている人が多いことがわかります。これに続くのが、
ひと花センター通う知人・友人に会うため（9.1%）、センターに関わる職員やボランティア・プログラム講
師に会うため（6.1%）となっており、人に会うことを目的にしている人はあわせて15%程度確認できます。

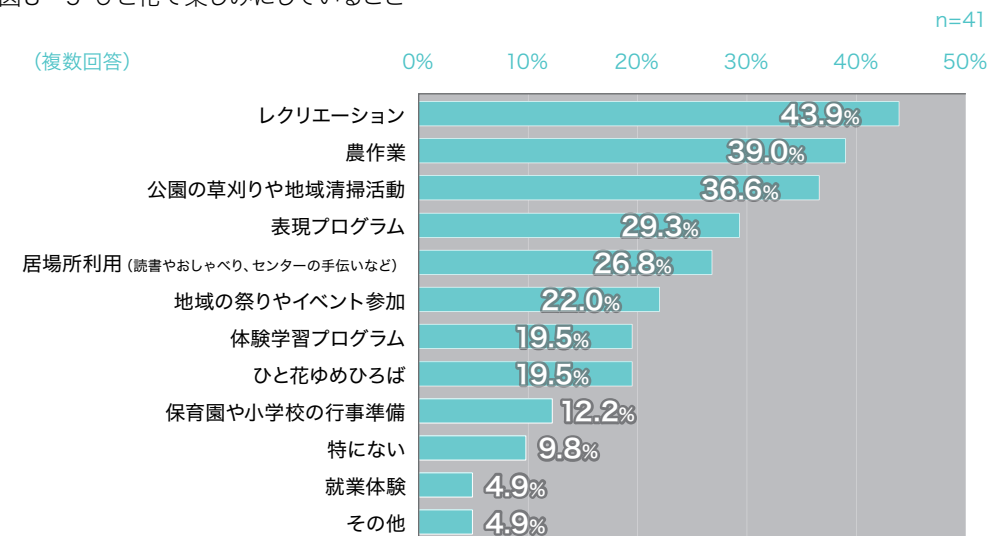
図8-4 ひと花センターに通う目的



③ ひと花センターで楽しみにしていること

ひと花センターで楽しみにしていることは、レクリエーションが43.9%なっています。レクリエーション
は、気軽に参加できるうえに、室内での活動が好きな人でもアウトドアでの活動が好きな人も参加しやすい
内容のものが多くあるので人気があるようです。これに続いて、農作業（39.0%）、公園の草刈りや地域清掃活
動（36.6%）などの体を動かす活動に人気があるようです（図8-5）。

図8-5 ひと花で楽しみにしていること

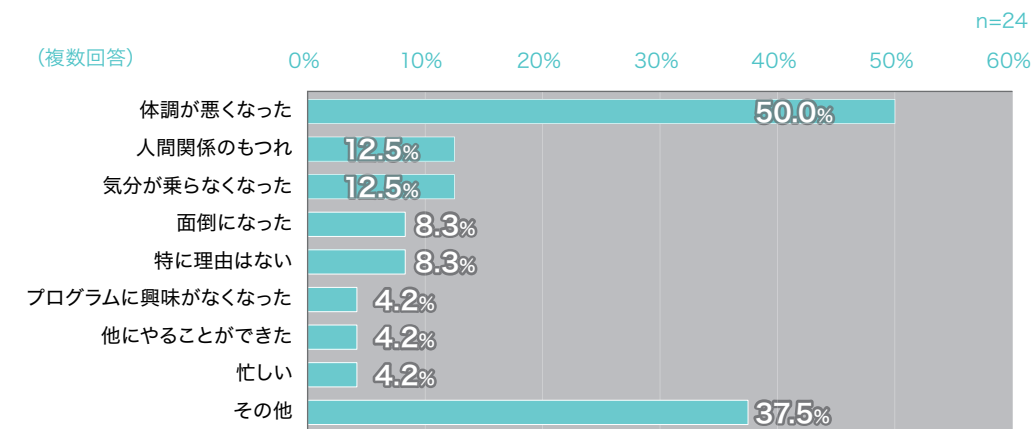


④ ひと花に行かなくなった理由

ひと花センターが開設から2年弱を経て、当初は利用していたものの、現在では顔を見せなくなった人た
ちもいます。今回の調査では、そうした人たちにも調査に協力してもらい、ひと花に来なくなった理由やひ
と花にのぞむことなどについてたずねてみました。

以前は利用していたけれども何らかの理由やきっかけにより、ひと花を利用しなくなった人たち（常用外）
にその理由についてたずねました（図8-6）。来なくなった半数の人が体調の悪化（50.0%）を理由として
います。その他、人間関係のもつれ、気分が乗らなくなった、面倒になった、などの理由が挙げられます。
その他の理由としては、人間関係を作ったり、人と関わったりすることを苦手と感じている人や、コミュニ
ケーションの些細な行き違いなどを理由に挙げている人もいます。

図8-6 ひと花に行かなくなった理由



⑤ ひと花にのぞむこと

次に、ひと花にのぞむことについて、全ての調査対象者にたずねたところ、あると答えた人が56.1%確認
できました（図8-7）。具体的にどのようなことをのぞんでいるかたずねたところ（図8-8）、長く続け
てほしい（67.6%）が突出して高くなっています。その他には、プログラムに関する要望、利用条件や相談・
サポートに関すること、設備運営や職員に関することなどへの希望がそれぞれ確認できます。しかし、こ
うしたひと花センターの具体的な内容よりも、ひと花センターそのものの長期的な存続をのぞむ傾向が強く出
ていることがわかります。

図8-7 ひと花にのぞむこと

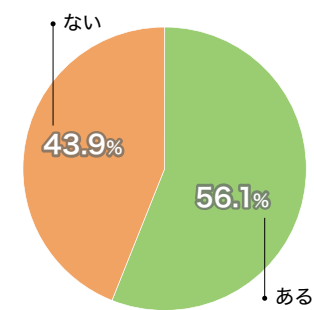
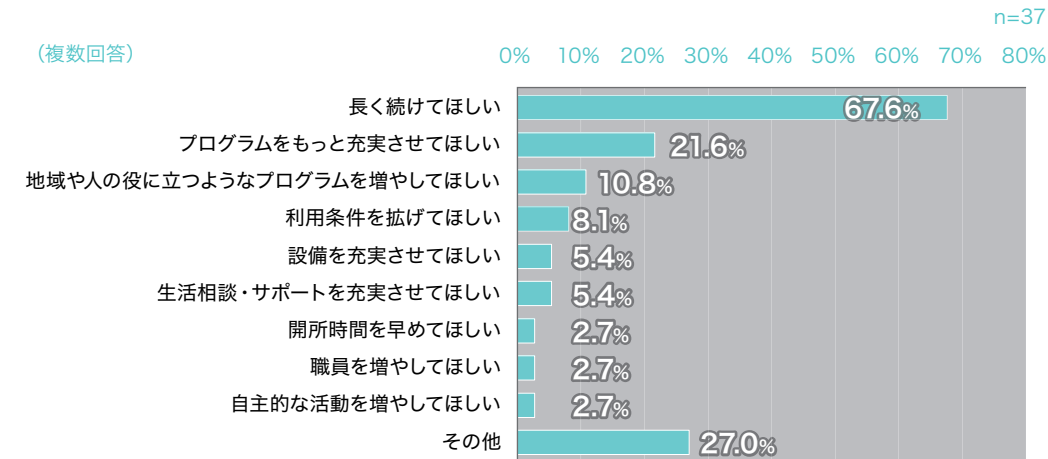


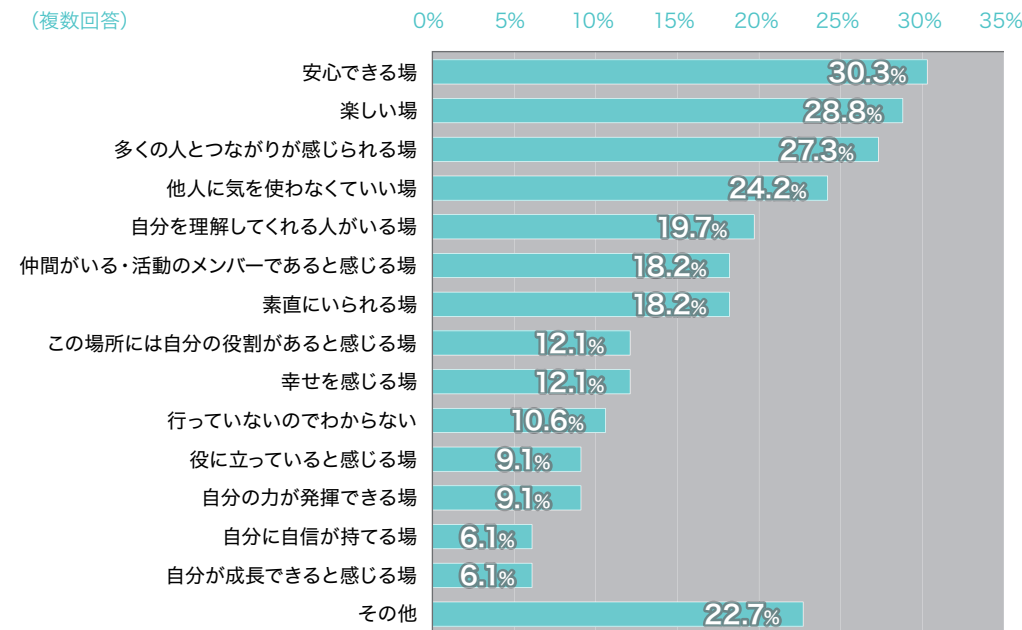
図8－8 ひと花にのぞむこと（具体例）



⑥ 居場所としてのひと花センター

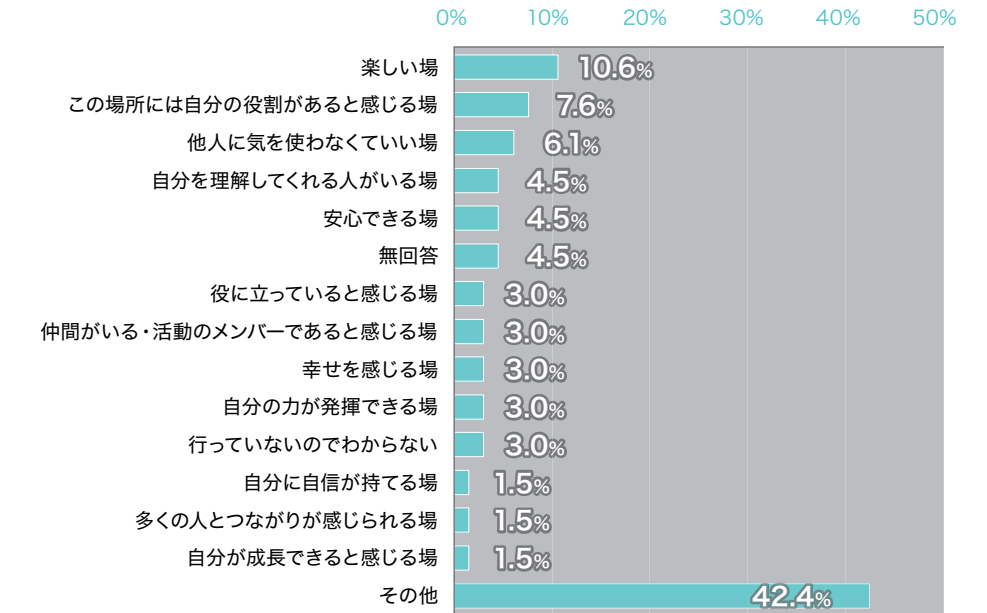
次に、ひと花センターがどのような居場所になっているかたずねてみました（図8－9）。安心できる場所、楽しい場所と感じている人が多く確認できます。また、多くの人とのつながりを感じられる、他人に気を使わなくていい、自分を理解してくれる人がある、仲間がいる・活動のメンバーであると感じる、などの他者との関わりやつながりを意識できるような居場所であるという割合が高くなっています。一方で、自分が役に立っている、力が発揮できる、成長できる、自信が持てるといった自己評価につながるような居場所となっていないことがわかります。

図8－9 ひと花はどのような居場所か



次に、ひと花センターが今後どのような居場所になればいいかたずねてみました。上位を見ると、楽しい場と回答した人が10.6％、この場所には自分の役割があると感じることが出来る場が7.6％、他人に気を使わなくていい場が6.1％となっています（図8－10）、いずれの項目も割合的に低く、選択肢として挙げた項目からは何らかの傾向は読み取ることができませんでした。一方で、その他と回答した人は42.4％にのぼります。いくつか例を挙げてみると、お互いに気づかい合えるような場所、みんなが平等に発言できる場所、もっと音楽のある場所、悪口や中傷のない場所、人とのトラブルが無い場所、深い話ができる場所、といったように、さまざまな思いが確認されました。これは、調査対象者の人たちがもつ居場所としてのひと花への期待や希望が多様であることを物語っています。

図8－10 どのような居場所になればいいか



⑦ ひと花センター以外に定期的に通う場所

ひと花センター以外に定期的に通う場所の有無についてたずねたところ、66.7％の人があると答えています（図8－11）。具体的にどのようなところに通っているかたずねてみると（図8－12）、図書館がもっとも多く27.3％となっており、次に行きつけのお店（25.0％）が続きます。その他には、ココルーム（20.5％）やむすび（15.9％）などの地域で活動するグループの拠点や、ふるさとの家（13.6％）、西成市民館（13.6％）、NPOの事務所（11.4％）などの相談・支援機能をもつ団体が開放しているスペースなどに通っていることがわかります。また、地域のふれあい喫茶（13.6％）や老人福祉センター（9.1％）などの町会関連の取組みや社会福祉協議会関連の施設に定期的に通っている人も確認できます。

図8－11 ひと花以外に通う場所

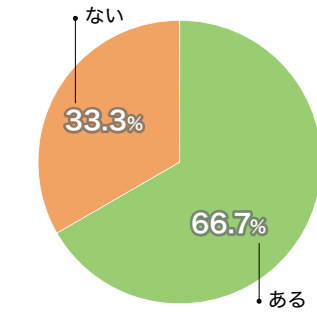
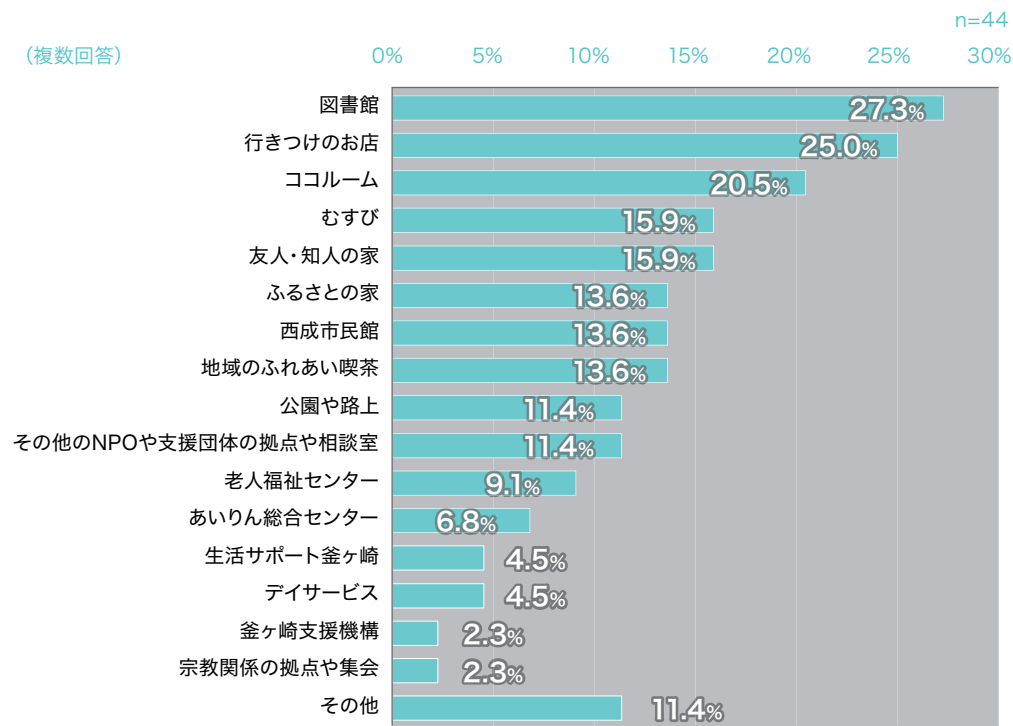


図8－12 ひと花以外にかよう場所（具体例）

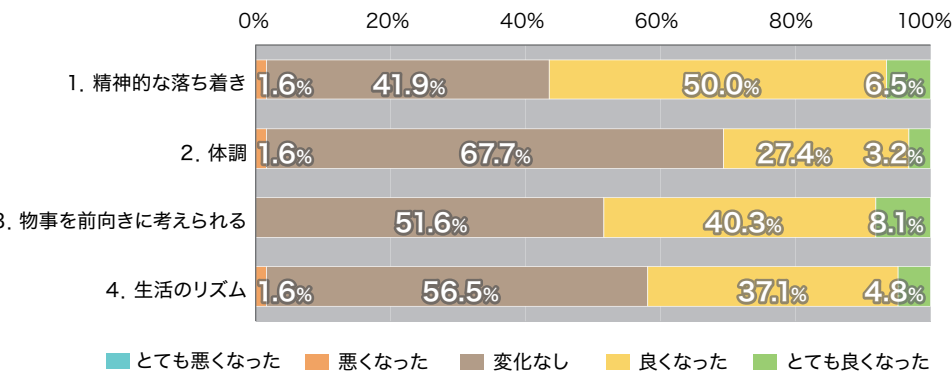


9. ひと花センター利用後の変化

ここでは、ひと花センターに通うようになって調査対象者の生活にどのような変化があったのか、調査対象者の主観的な意識にもとづく変化について明らかにしていきます。

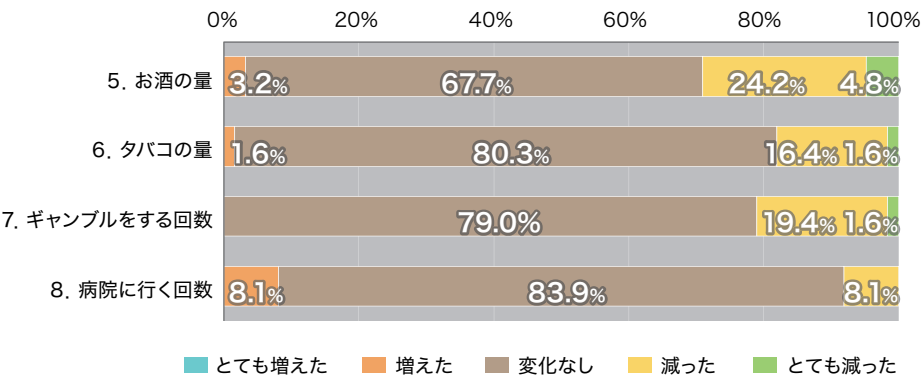
まず、心身の状態や生活のリズムに関しては、全体的に3割から4割の人が、よい方向に変化していると答えています。精神的な落ち着きについては、よくなったと答えた人が50.0%、とてもよくなったが6.5%となっており、半数以上の人ひと花に通いだして精神的な落ち着きを感じています（図9－1）。

図9－1 心身の状態や生活のリズム



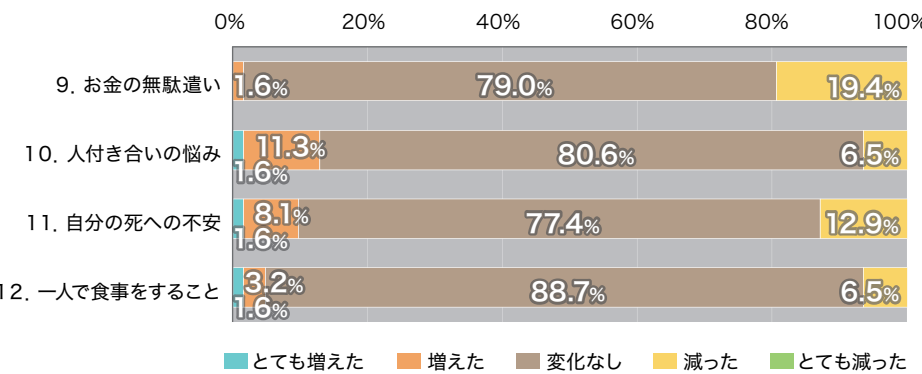
次に、お酒、タバコ、ギャンブルに関しては、大部分が変化なし、と答えていますが、2割から3割程度の人たちがよい変化を感じているようです（図9－2）。お酒の量が減ったという変化を実感している人が、他の項目よりも若干多くなっています。病院に行く回数は、増えた人が8.1%確認できますが、孤立していた状況から、ひと花センターに通うようになったことで、センターでできた仲間や職員、健康教室に関わる看護師などに体調について相談できる機会が増え、それら相談相手から医療機関への受診をすすめられたことが一つの要因と考えられます。また加齢に伴う持病の悪化や、体調不良なども影響していると考えられます。

図9－2 お酒、タバコ、ギャンブル、通院

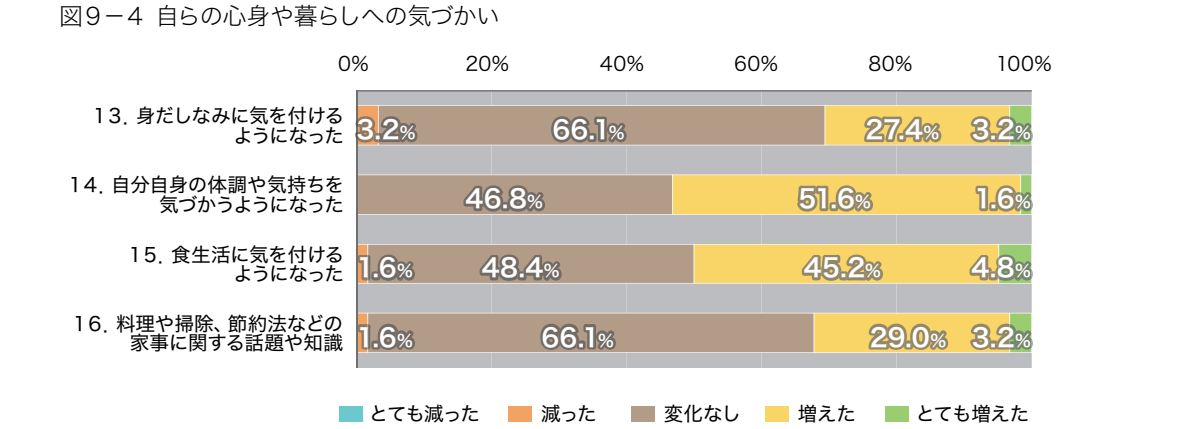


お金のことと、悩み、不安、孤食に関しては、全体的に8割程度の人が変化なしと答えていますが、ひと花に通い始めたことでお金の無駄遣いが減ったと答えている人が2割程度確認できます（図9－3）。一方で、人付き合いの悩みが増えた、とても増えたと感じている人が13%程度確認でき、自分の死への不安を感じている人も10%程度確認できます。病院にいく回数が増えたと答えた人も8.1%確認できます。ひと花センターを利用して新たな知人・友人ができたことで生じる悩みや、生活が落ち着き、先のことを考える余裕ができたことで生じる将来への不安など、生活の変化によって新たな不安や悩みが出てきているようです。

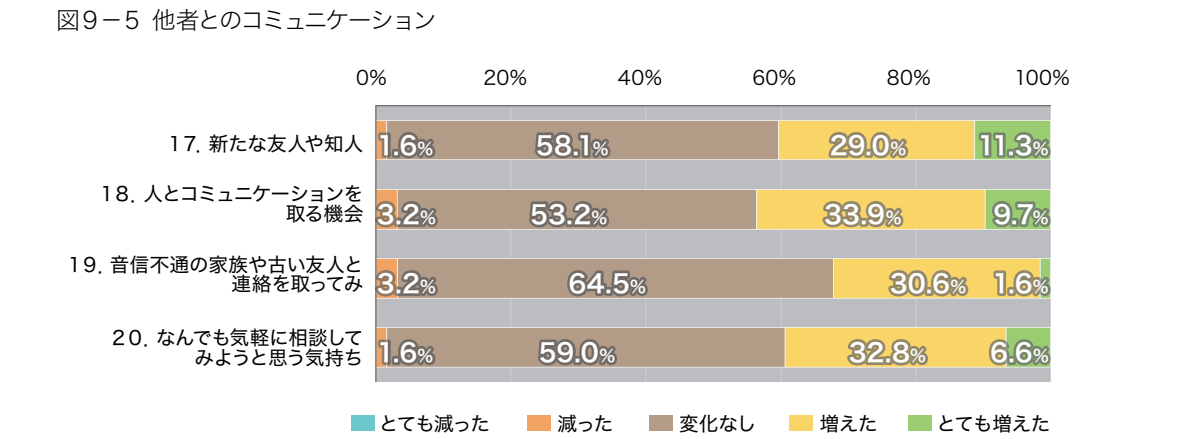
図9－3 お金、悩み、不安、孤食



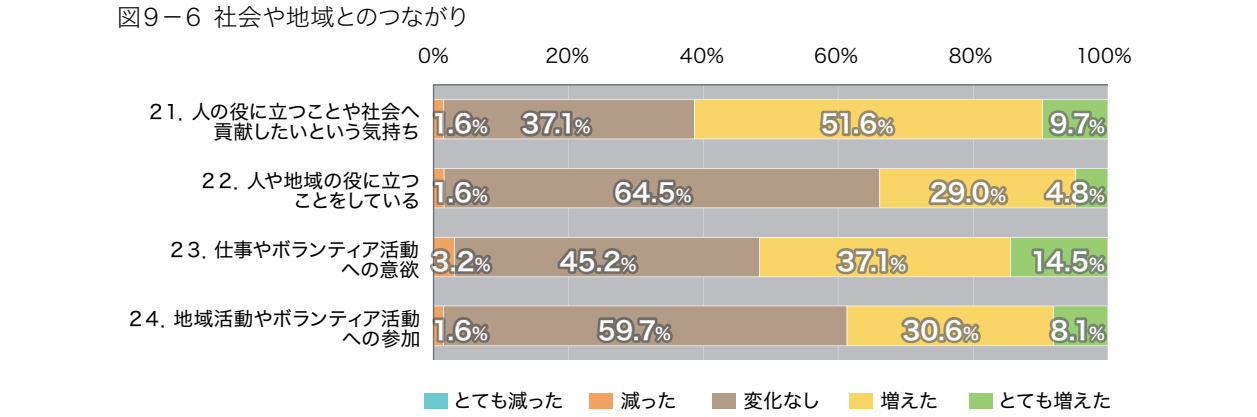
自らの心身や暮らしへの気づかいに関しては、自分自身の体調や気持ちへの気づかいや、食生活に気をつけるなど、半数近くが自分自身への気づかいが増えたと答えています（図9－4）。身だしなみや家事に関する話題や知識に関しても3割程度の人が増えた、とても増えたと答えており、自分自身の心身や衣食住をめぐる生活全般への関心が増加していることがうかがえます。



次に他者とのコミュニケーションを見ていきます。全体的に4割の人が他者とのコミュニケーションに関して増えている、とても増えていると感じています（図9－5）。新たな知人や人とのコミュニケーションに関しては、ひと花に通いだして以降、とても増えたと答えている人が10%程度確認できます。ひと花が新たな出会いやコミュニケーションを提供する場となっていることがわかります。



社会や地域とのつながりについて見てみると、ひと花を利用するようになって、人の役に立つことや社会へ貢献したい気持ちに関して、51.6%が増えた、9.7%がとても増えたと答えています（図9－6）。また、実際に人や地域の役に立つことをしているという実感を持っている人も、30%以上確認できます。仕事やボランティア活動への意欲は、とても増えたが14.5%、増えたが37.1%となっており、ひと花利用後の意欲の高まりがうかがえます。実際の地域活動やボランティアへの参加も、30.6%が増えた、8.1%がとても増えたと答えており、意欲が実際の参加にむすびつきつつあることがわかります。



10. 総括

ひと花センター登録者実態調査では、以上のように登録者の生活実態と利用状況、さらに利用後における登録者の生活や地域活動についての変化を明らかにしました。調査の結果から、登録者の属性および利用状況と利用後の変化について簡単にまとめます。

ひと花センターの登録者の健康状態は、普通が4割、良いが3割、あまり良くない、良くないが残りの3割というように、全体としては可もなく不可もなくといった状態ですが、8割が持病を抱えており、通院しています。今後は加齢にともない、健康状態は悪化していく可能性も考えられますが、心身の健康への予防的対策を行っている人も9割近く確認できます。予防的対策として7割の人が運動しており、4割の人がお酒やタバコを減らし、食事に気をつけるような心がけをしています。

登録者全員が生活保護を受給しており、年金を併用しているひと23%程度確認できました。生活保護費や年金をなんとかやりくりしている人がほとんどで、自炊をしたり、安売りのお店で買い物をしたり、あるいは、お酒やギャンブルをひかえるなどの、浪費を防ぐ節約方法を実践しながら生活しています。生活保護受給後の気持ちや意識の変化については、病院にかかれることや、食事やお金の心配をしなくていいことなど、生存そのものを生活保護によって支えられることに安堵感をもつ一方で、引け目を感じる、周囲の目を気にする、人付き合いを控えてしまうといった、生活保護を受給することへの否定的な考え方によって、その人自身の振る舞いや人との接し方を萎縮させているといった側面があることも確認できました。

登録者の西成での生活期間は、10年未満の人たちと20年から30年の人たちの割合が多くなっています。西成にきた目的は、西成での生活期間が20年以下の人たちは生活保護受給を目的として来た人が多く、20年以上では仕事を目的としてやって来た人が多く、20年を境目として西成にきた目的が大きく異なります。住まいは、一般の賃貸アパートやマンションのほか、4割が簡易宿泊所を転用したアパートに住んでいます。一般の賃貸住宅に住んでいる人たちは、広さや築年数などばらつきのある多様な住宅に居住しており、簡易宿泊所転用アパートに住んでいる人たちは、半数以上が6㎡以下の非常に狭小な居住空間の中で生活していることがわかりました。また、賃貸アパート・マンションでも簡易宿泊所転用アパートにおいても、最低居住面積の水準を満たす住宅に住んでいる人は確認できず、風呂無し、トイレ共用のアパート・マンションに住んでいる人も多く確認できました。

普段の生活は一人で過ごすことの多い単調な暮らしではあるものの、ひと花センターでの活動やNPOや任意グループでの活動、地域でのボランティアなど地域活動への参加の機会が多いたことがわかりました。また、こうした活動や人との交流を通して多様な関係性を構築し、自らの生活を作り上げていくことで、つながりや暮らしの回復が可能になっています。

次に、ひと花センターの利用状況と利用後の変化についてまとめます。調査対象のうち6割程度が週1回以上コンスタントに利用しています。利用者の多くがプログラムへの参加を目的としているほか、地域や社会に貢献するためにひと花での活動に参加している人も多く確認できました。ひと花センターではレクリエーションのほか、農作業や公園の草刈り、地域清掃活動などを楽しみにしている利用者が多いようです。ひと花での活動を通して人や地域と交流したり、地域の役に立つことをしたりして、ひと花センターが利用者と社会の接点を作るような役割を担っていることが明らかになりました。ひと花での活動を積み重ねていくことで、ひと花センターは安心できて楽しく、人や社会とのつながりをもって過ごすことのできる居場所となり、登録者の日常生活において欠かすことのできない活動の場となっています。そして、今回調査対象の約7割が、ひと花センターの長期継続を強くのぞんでいます。

以上のように、ひと花センター登録者実態調査の結果から、登録者像と利用実態について簡単にまとめました。次章では、これらの結果にもう少し踏み込んで、常用の登録者と常用外の登録者を分けて、属性やひと花センターの利用についてみていきます。

II. 分析

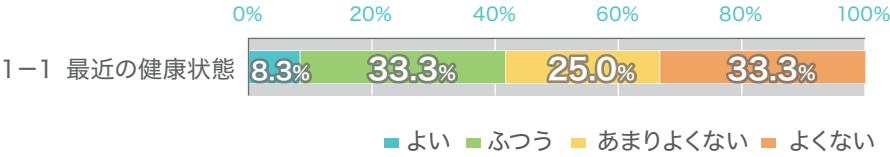
今回の調査では、ひと花センター登録者のうち、日常的に利用している人（常用）だけを対象とするのではなく、登録はしているが現在は利用していない人や以前は利用していたが最近では利用していない人（常用外）も対象に、調査を実施しました。ここでは、6つの調査項目について、常用／常用外別に集計した結果から、常用している登録者と常用外の登録者それぞれの傾向の違いを検討することで、今後のひと花センターにおける取組みや運営の課題について述べていきます。

1）常用外になった理由

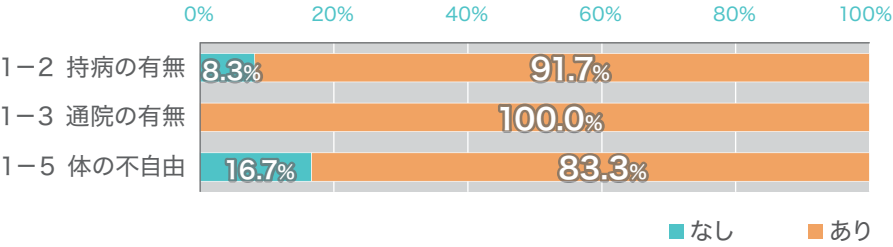
まず、常用外の人たちがなぜひと花センターを利用しなくなったかその理由についてみていきます。

常用外の人たちがひと花センターを利用しなくなった理由に、体調の悪化を挙げた人たちが50％となっています（P61 図8-6）、ここではこれらの体調の悪化した人たちの健康状態について詳しくみていきます。まず、最近の健康状態については、あまりよくない、よくないと回答した人が58.3％となっています（図II-1）。次に持病については、91.7％の人たちに持病があり、100％の人が通院しています。また、体の不調がある人は83.3％となっており、健康状態が不調であるのは一目瞭然です。さらに、持病の内容や体の不調について自由回答の内容を詳しくみていくと、持病としては高血圧、脳梗塞後遺症、糖尿、リウマチ、ぜんそくが多く挙げられ、体の不調に関しては、手足のしびれ、足腰の痛み、歩行困難、視力の低下などを挙げています。数字としてはあらわれてきませんが、個別にヒアリングしてみると、急病で入院した人や手術を受けた人たちも確認できました。持病による慢性的な症状の悪化なのか、それとも加齢による身体的機能の低下なのかはここでははっきりしませんが、体の不調の詳細な状態を見ると外出することに困難を抱えていることは明らかなです。体調悪化による身体的機能の低下により外出が困難になることで活動範囲が一気に狭まり、ひと花センターの利用ができなくなった人が一定数存在することが確認できました。

図II-1 最近の健康状態（常用外）



図II-2 持病・通院・体の不調（常用外）

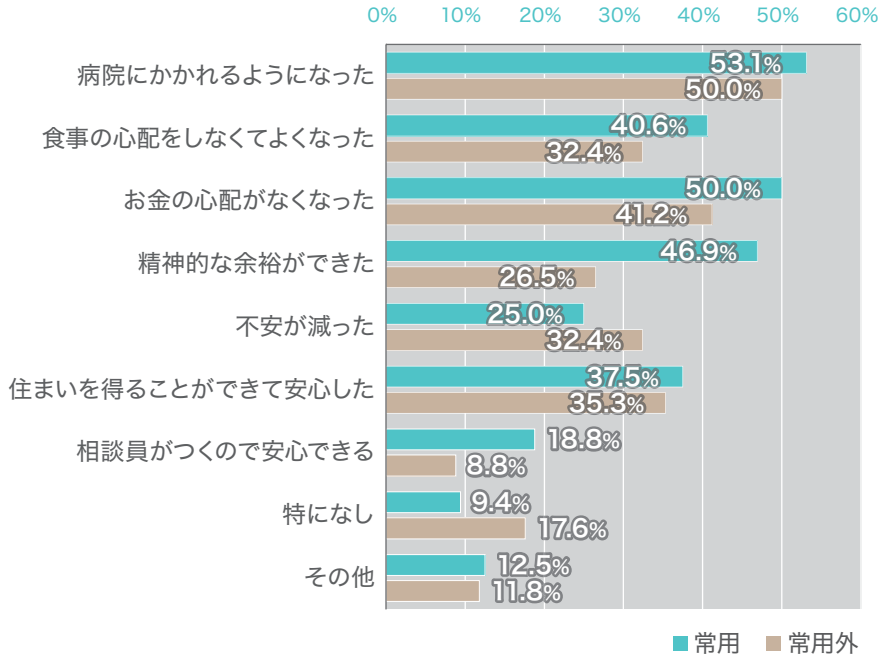


2）生活保護を受給してよかったこと／よくなかったこと

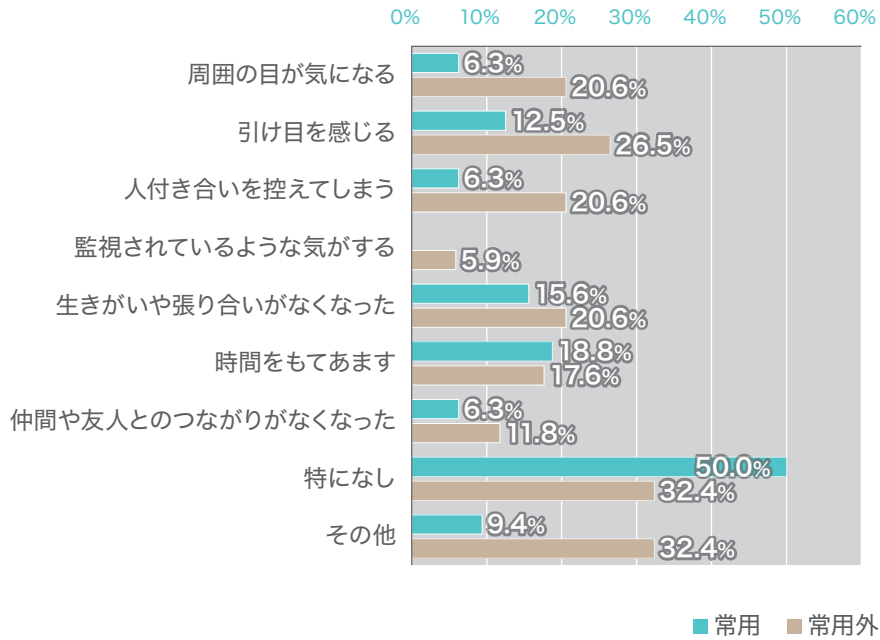
生活保護を受給して良かったことについての質問では、精神的な余裕ができたという回答が、常用は46.9％であるのに対し、常用外は26.5％と大幅に低い値になっていること以外大きな違いは見られません（図II-3）。しかし、生活保護を受給してよくなかったことについての質問では、いくつかの項目において常用／常用外で大きな違いが確認できます。まず、周囲の目が気になるは常用が6.3％に対し、常用外が

20.6%、引け目を感じるが常用が12.5%に対し、常用外が26.5%、人付き合い控えてしまうが常用が6.3%に対し、常用外が20.6%、監視されているような気がするが常用0%に対し、常用外が5.9%となっており、時間を持て余す以外は、常用外の人が生活保護を受給してよくなかったことを多く回答する傾向にあることがわかります（図Ⅱ-4）。これらの差異の大きな項目は、生活保護を受給することへの否定的な考えや、世間への申し訳なさのような感情が、人や地域との接し方まで抑制していることを示唆しており、それが結果としてひと花センターからも足を遠のかせている一つの要因である可能性も考えられます。

図Ⅱ-3 生活保護を受給してよかったこと



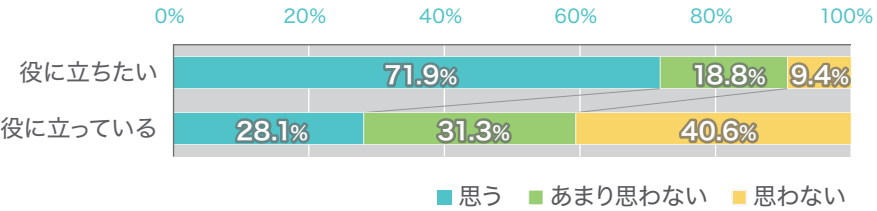
図Ⅱ-4 生活保護を受給してよくなかったこと



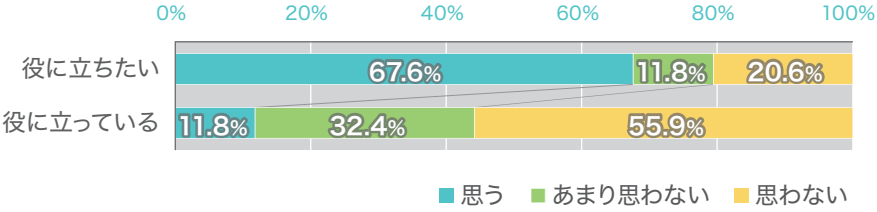
3) 地域の役に立ちたいか／役に立っているか

地域の役に立ちたいか、実際に役に立っているかという自己有用感について常用／常用外での違いを示しました。地域の役に立ちたいという意識については、常用／常用外ともに思うと回答した人は7割程度で、常用外が思わないと回答した割合が常用に比べて高くなっています。実際に地域や社会の役に立っているかについては、常用の28.1%が思うと回答している（図Ⅱ-5）のに対し、常用外は11.8%、半数以上の55.9%が思わないと回答しています。また、役に立ちたいという希望と、実際に役に立っているという意識の間には、常用／常用外ともに大きなギャップがあり、常用より常用外のほうがこのギャップが大きく現れていることが確認できます（図Ⅱ-6）。常用の人たちのほうが、ひと花センターでのプログラム参加をととした地域貢献の機会が多く、それが自己有用感を高める要因となっていると考えられます。今後はこのギャップをいかに小さくしていくかが重要な課題になってくるでしょう。ギャップの大きい人たちに対しては意欲をくみ上げる仕組みづくりが必要であると考えられます。

図Ⅱ-5 自己有用感の希望と実際（常用）



図Ⅱ-6 自己有用感の希望と実際（常用外）



4) つながりの欠如と孤立

ここでは、登録者のつながりの欠如の実態について見ていきます。登録者調査の人や地域とのつながりに関する以下表Ⅱ-1の4項目のそれぞれの重なりをみることで、登録者のつながりの欠如と孤立の状況について明らかにしていきます。表Ⅱ-1は、人や地域とのつながりを示す項目において“ない”あるいは“いない”と答えた人たちの割合（全体、常用、常用外）を示しています。これをつながりの欠如の割合とし、4項目中3項目の重なりを集合図で示し、孤立の実態を4つのパターンから見ていきます。

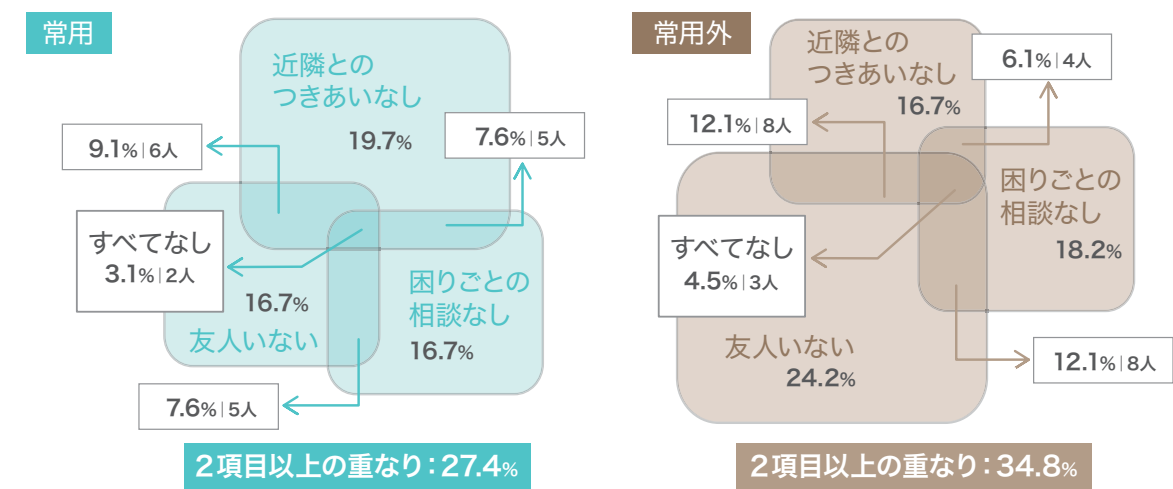
表Ⅱ-1 つながりに関する項目での“なし”の割合

項目	全体	常用	常用外
4-① 近所や隣人とのつきあいがない	36.4%	19.7%	16.7%
4-② 共通の話題や趣味をもつ友人がいない	40.9%	16.7%	24.2%
4-④ 困ったときに相談できる人がいない	34.8%	16.7%	18.1%
6-④ 地域の行事や活動への参加していない	43.9%	13.6%	30.3%

類型① 近隣つきあいなし－友人なし－困りごと相談なし（図Ⅱ－７）

それぞれの項目の重なりを常用／常用外別に見ていくと、近所付き合いがなく困りごとの相談相手がいな
い人は、常用7.6%、常用外6.1%となっています。次に、近所付き合いがなく友人がいない人は、常用9.1%、
常用外12.1%となっています。困りごとの相談相手がなく、友人もいない人が、常用7.6%、常用外12.1%
となっています。さらに、この3つの項目がすべて“なし”である人は、常用で3.1%、常用外で4.5%確認で
きます。これらの項目が2つ以上重なり合っている部分の合計（重複部分も含む）は、常用は27.4%、常用
外は34.8%となっています。

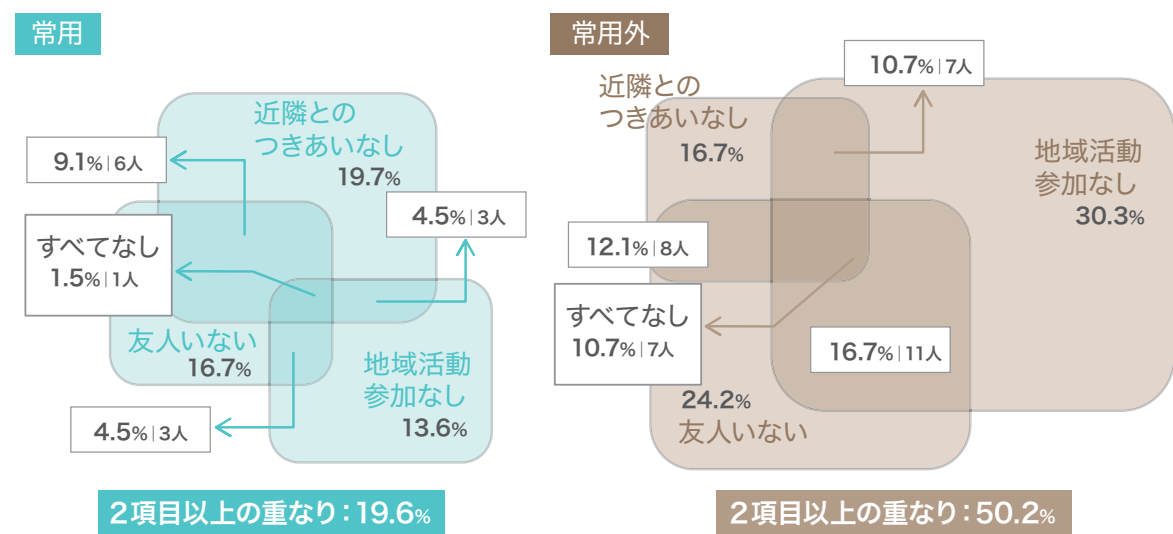
図Ⅱ－７ 近隣－友人－困りごと相談



類型② 近隣関係－友人－地域活動（図Ⅱ－８）

次に、近所付き合いがなく地域活動に参加していない人は、常用4.5%、常用外10.7%となっています。
地域活動に参加せず、友人もいない人は、常用4.5%、常用外16.7%となっています。いずれもなしは、常
用では1.5%、常用外では10.7%確認できます。（以下、重複分の説明は省略します）これらの項目が2つ以
上重なり合っている部分の合計は、常用は19.6%、常用外は50.2%となっています。

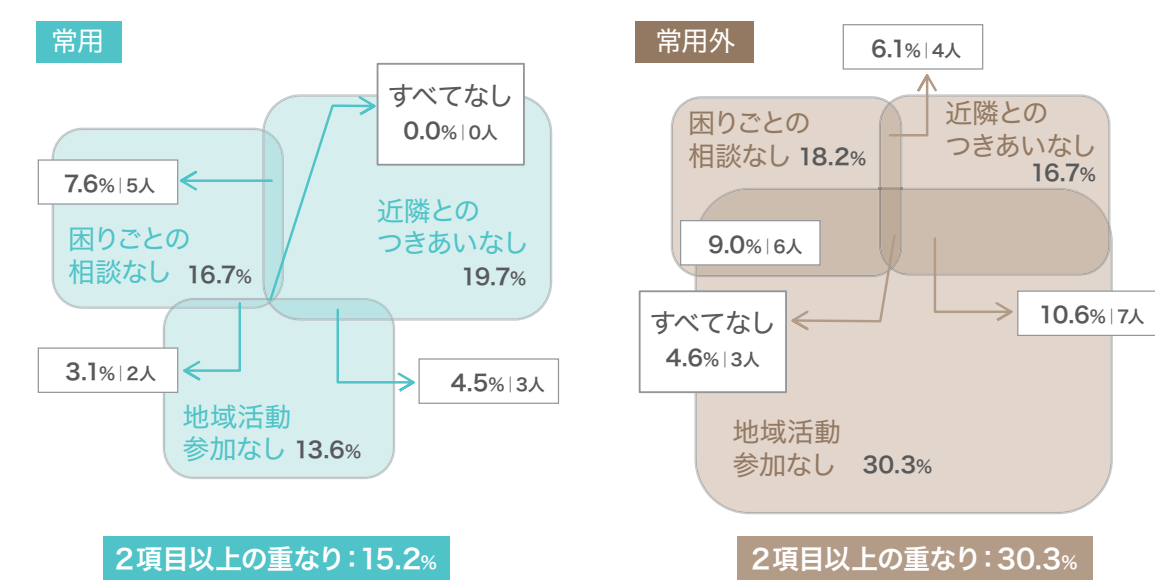
図Ⅱ－８ 近隣－友人－地域活動



類型③ 近隣関係－困りごと相談－地域活動（図Ⅱ－９）

次に、地域活動に参加せず、困りごとの相談相手もいない人は、常用3.1%、常用外9.0%となっており、
すべてなしは、常用0.0%であるのに対し、常用外は4.6%となっています。これらの項目が2つ以上重なり
合っている部分の合計は、常用は15.2%、常用外は30.3%となっています。

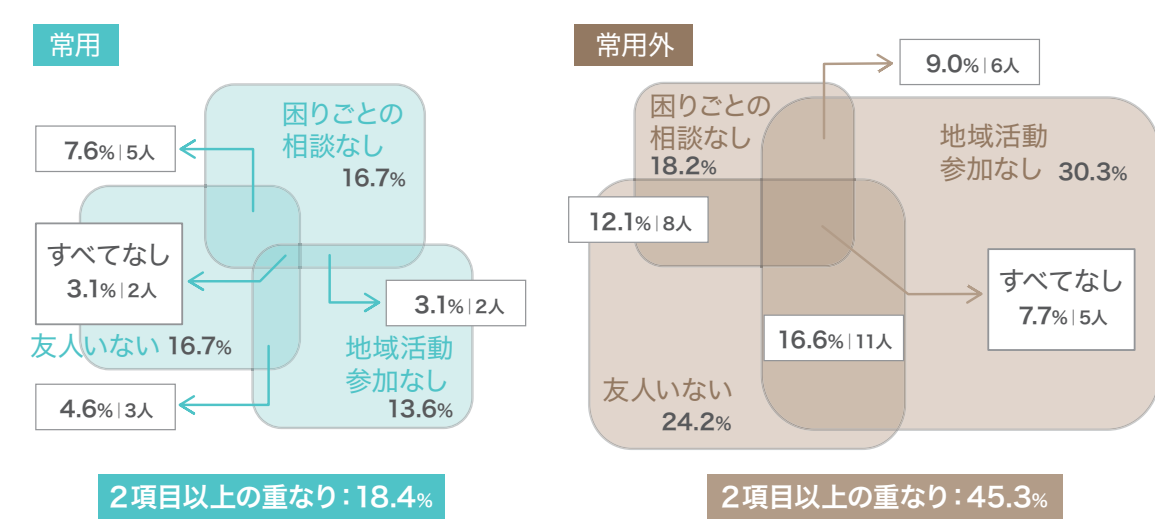
図Ⅱ－９ 近隣－困りごと相談－地域活動



類型④ 友人－困りごと相談－地域活動（図Ⅱ－１０）

最後に、地域活動への参加がなく、友人もいない人は、常用4.6%、常用外16.6%となっており、すべて
なしは、常用で3.1%、常用外で7.7%となっています。これらの項目が2つ以上重なり合っている部分の合
計は、常用は18.2%、常用外は45.3%となっています。

図Ⅱ－１０ 友人－困りごと相談－地域活動



以上、4つの類型それぞれで確認した結果、2項目以上のつながりの欠如は、常用の場合平均で2割程度、常用外の場合は平均で4割程度確認できました。常用／常用外の大きな違いは、常用の場合、類型の項目に地域活動が入るとつながりの欠如の度合いが低くなるのに対し、常用外の場合は、地域活動が項目に入るとつながりの欠如の度合いが高まることがわかります。これはつまり、常用の人たちのつながりは、近隣や友人関係よりも地域活動によって保たれており、常用外の人たちは、地域活動よりも近隣や困りごとを相談できる人との関係によってつながりが保たれているということを意味しています。

また、この中でつながりを一切持たない人は、常用は2％程度、常用外は7％程度確認できました。常用の人たちの場合は、あらゆるつながりが欠如していても、ひと花センターに通うことで人や地域との接触の機会を持つことができるので、社会的な孤立を予防できると考えることができます。しかし、常用外の人たちの場合は、仮につながりが欠如しがちな状況にあっても、例えば、行きつけのお店のようにお金を払っていることのできる場所や、図書館、公園などのように一人でそこまで移動し一人で過ごすような場所があれば、孤独や孤立といったことを意識することはあまりないかもしれません。しかし、そこに通うことのできるお金や、そこまで移動できて過ごすことのできる健康状態が損なわれると、孤立の度合いが一気に高まる可能性が考えられます。

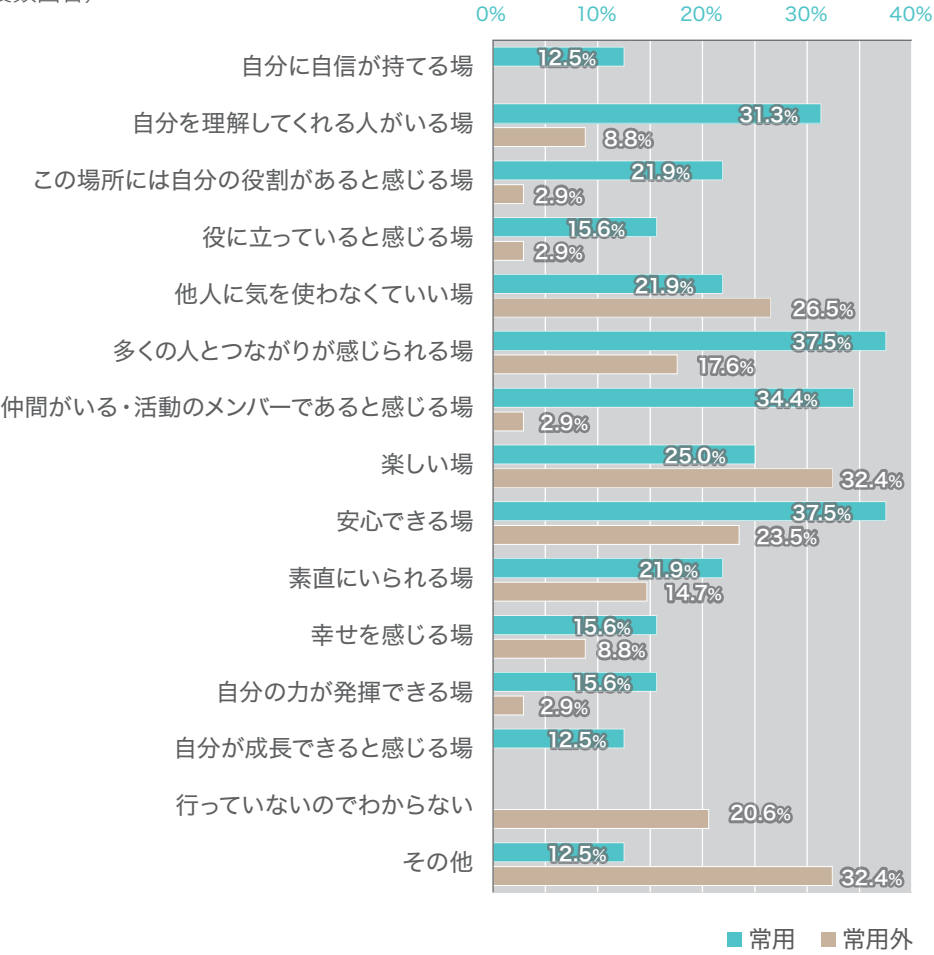
このように、現状では孤立することが可能になっているけれども、つながりの束の少ない常用外の人たちにいつ訪れるかもわからない孤立リスクに対し、具体的な働きかけも必要になってくるかもしれません。また、健康が損なわれることによる孤立リスクは、常用の人たちにも同様に起こりうるものです。ひと花センターは居場所としては十分に機能しつつありますが、孤立を防ぐ／なくすためには、単に居場所の提供だけではなく、介護事業所や福祉事務所などと連携した安否確認の機能も今後必要になってくるかもしれません。

5) 居場所としてのひと花センター

P62 8-⑥で、ひと花センターがどのような居場所になっているかたずねました。これを常用／常用外別にまとめてみました（図Ⅱ-11）。図からもわかるように、居場所としてのひと花センターの意味は、常用と常用外では随分違いがあるようです。常用の場合は、上位が安心できる場所（37.5%）、多くの人とつながりが感じられる場所（37.5%）、これに、自分を理解してくれる人がいる場所（31.3%）が続きます。常用外の場合は、楽しい場所（32.4%）、他人に気を使わなくていい場所（26.5%）、安心できる場所（23.5%）となっています。常用外の場合は、過去に一時期来ていた期間、他人に気を使わないで楽しく過ごせる場所というように、一時的な利用の中での一期一会の交流を楽しむという短期的な利用であることが読み取れます。一方で、常用の人たちにとってのひと花は、多くの人とのつながりの中で、相互に理解し合い、それが安心する場所となっていていっていると理解できます。常用の人たちが、ひと花に関わる人たちの中でじっくりと関係を築きながら、自らが安心できる場所を作り上げ、帰属意識や仲間意識を高めてきたことを物語っているようです。

図Ⅱ-11 ひと花はどのような居場所か

（複数回答）



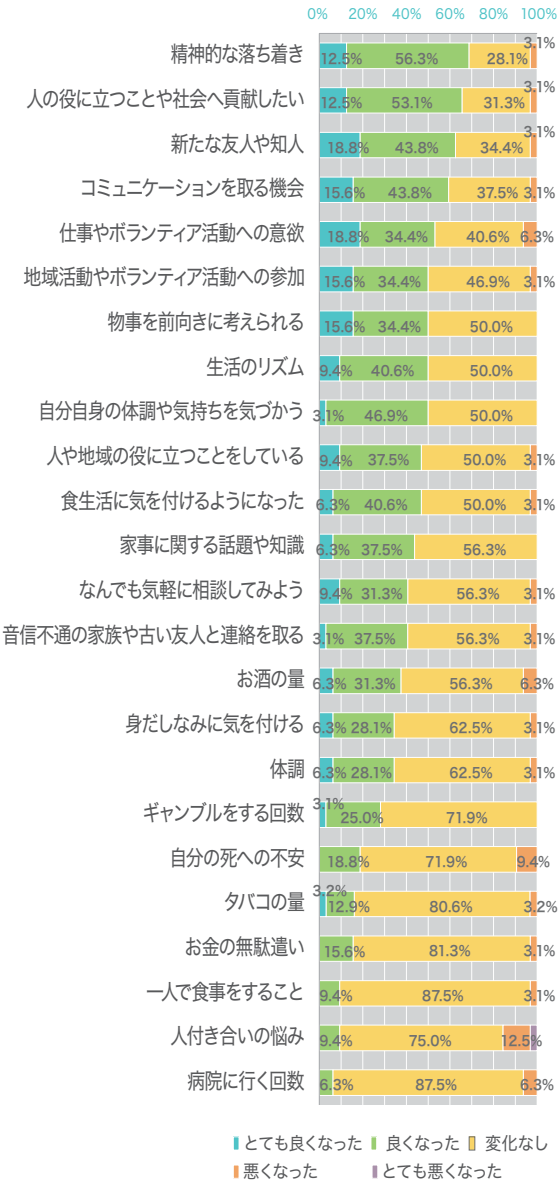
6) ひと花センター利用後の変化

・常用／常用外の比較

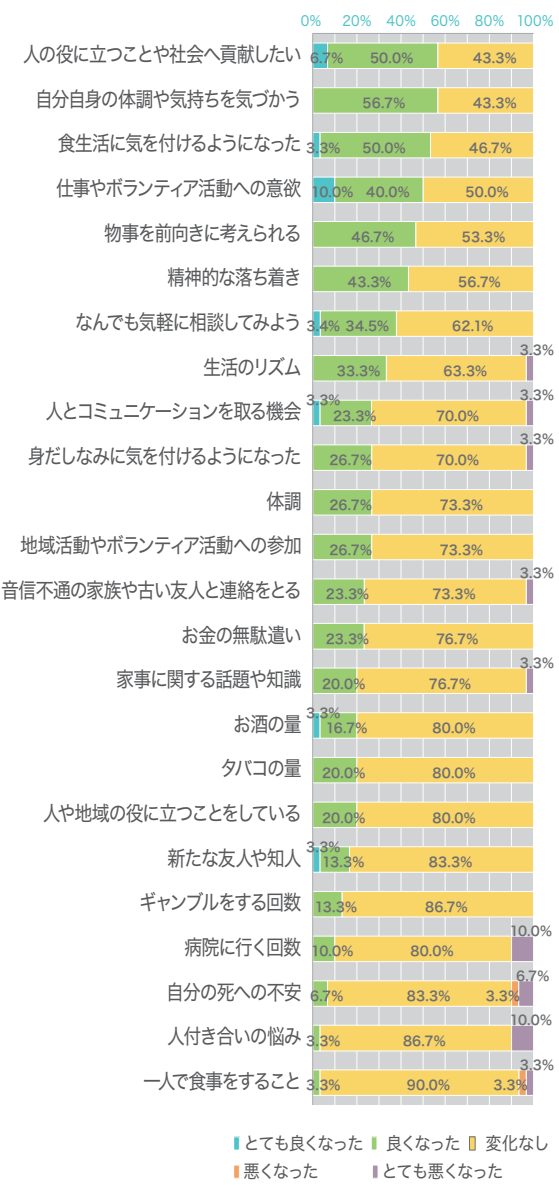
9章のひと花センター利用後の変化についての質問への回答を、常用／常用外別に図にまとめてみました。尺度の表現は若干異なりますが、よい変化／悪い変化の尺度でまとめています（図Ⅱ-12、図Ⅱ-13）。この図は、よくなった、とてもよくなった、の合計を降順に並べています。また、常用外の人たちは、現在ではひと花に通っていない人たちですが、以前通っていた時点での変化についてたずねています。

「良くなった」以上の変化の割合が高い項目を見ていくと、常用は、精神的な落ち着き、人の役に立つことや社会へ貢献したい、新たな友人知人、コミュニケーションを取る機会、仕事・ボランティアへの意欲、地域活動ボランティアへの意欲、が上位に確認できます。常用の人たちは、精神的に落ち着いて、人との関わりや地域との関わりにより変化が現れてきたと解釈できます。一方、常用外は、人の役に立つことや社会貢献したい、自分自身の体調や気持ちを気づかう、食生活に気をつける、仕事やボランティア活動への意欲、物事を前向きに考えられる、精神的な落ち着きが上位に確認できます。常用外の人たちの場合、上位に、自分自身の体調や気持ちを気づかう、食生活に気をつける、物事を前向きに考えられるといった項目が確認できることから、自分自身の内面により変化があったと感じている傾向が強いことがわかります。常用の人たちが、人や地域とのつながりのような外へ向いた変化を感じているのと比較すると、常用外の人たちは、自分自身と向き合うような内向きの変化を感じているようです。

図Ⅱ-12 2014年度（常用）

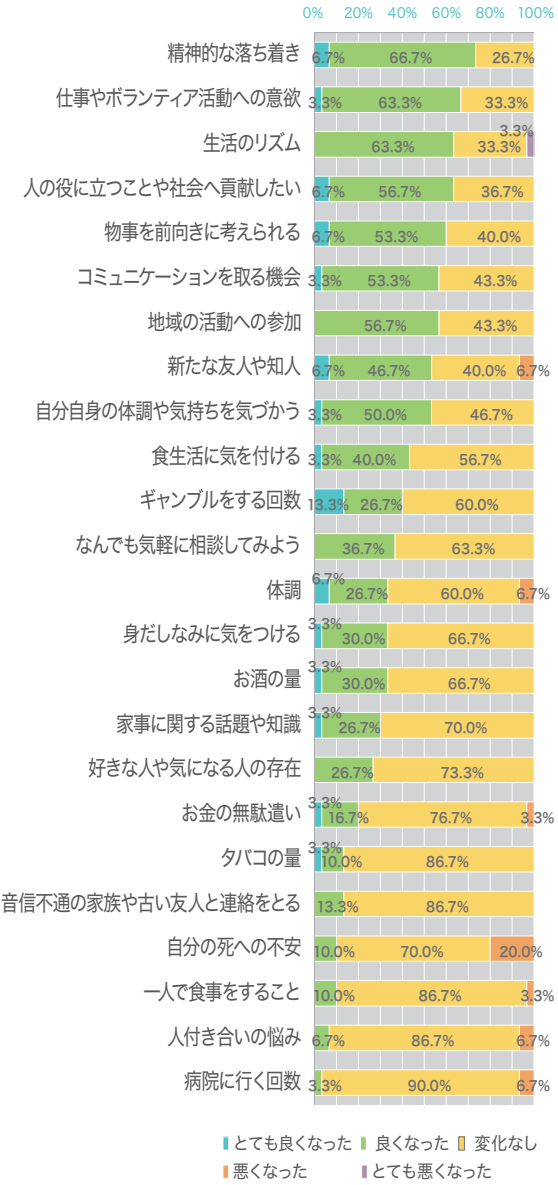


図Ⅱ-13 2014年度（常用外）

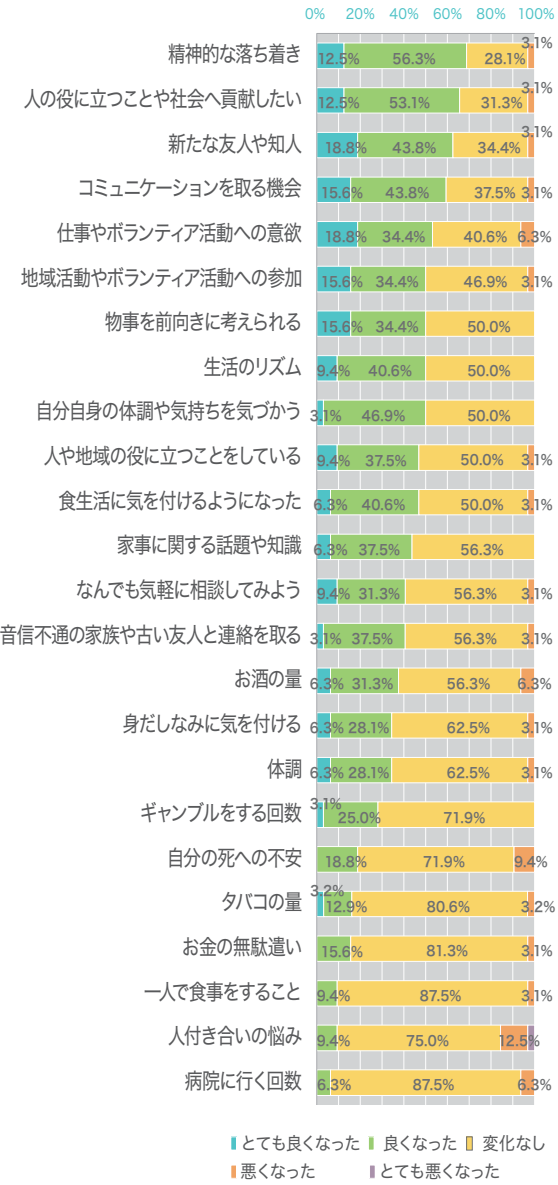


ルがあがったり生活の知恵が増えたりするなどして、ひと花センターを利用する以前ではなし得なかったつながりの回復や生活を整えていく力が身に付き、生活を再構築していることがうかがえます。

図Ⅱ-14 2013年度



図Ⅱ-12 2014年度（常用）



・2013年度調査との比較

ひと花センター利用後の変化について、2013年度ひと花センター利用者実態調査での同じ項目の回答結果と今年度の結果を比較してみました（図Ⅱ-14、図Ⅱ-12）。2013年度調査は、常用者のみを対象としているので、比較するデータは、2014年度の常用者のデータを使用します。また昨年度と質問項目が一部異なっている部分もあります。こちら、よくなった、とてもよくなった、の合計を降順で図化しています。順位に若干の変動はあるものの、全体的な傾向としては、“とても良くなった”と回答している割合が2013年度と比べて2014年度は増加しています（2013年度のとても良くなったは平均3.2%、2014年度は平均7.7%）。とくに、上位の精神的な落ち着きや、地域や人とのつながりについての項目ではとても良くなったが2013年度と比べて大幅に増加していることがわかります。

一方で、生活のリズム、物事を前向きに考えられる、が上位から中位に、ギャンブル、体調が中位から下位にそれぞれ移動しています。また、下位にあった音信不通の家族や古い友人と連絡をとる、家事に関する話題や知識が中位に上昇しています。ひと花センターを利用するようになり、新しい友人知人が増える中で、親族友人と連絡を取ってみようという気持ちの変化が生まれ、料理などのプログラムを通して、家事のスキ

以上、登録者の利用状況別（常用／常用外）に、健康状態、生活保護受給への意識、自己有用感、つながりと孤立の実態から、生活実態について掘り下げ、居場所としてのひと花センターの意味や、ひと花センター利用後の変化について詳しく検討してみました。次章では、ひと花センターに関わりのある地域の人たちに対して実施したアンケート調査の結果を整理し、これまでの登録者調査の分析結果とあわせて検討し、最後にひと花センターの今後の課題について述べていきます。

Ⅲ. 地域調査について

■調査の概要「ひと花センターに関するアンケート調査」

1) 調査の目的

日頃ひと花センターの活動に関わりを持つ地域の人たちのひと花センターとの具体的な関わりを把握し、ひと花の活動に対する意識、活動そのものへの評価を明らかにすることを目的としています。

2) 調査対象者

調査対象者は、ひと花センターと関わりのある近隣地域の人たちです。ひと花のイベントや催し（ゆめひろばなど）に参加したことのある個人、ひと花センターと関わりのある団体、町会関係者などです。それぞれ、個人としての立場でアンケートに回答してもらいました。回答者の年代は10代から80代までの67人（男性38人、女性27人、無回答2人）となっています。

3) 調査方法

ひと花センターに来所した際に質問紙を配布し、その場で各自回答記入してもらいました。また、普段関わりのある各団体を通して所属する職員に質問紙を配布、各自回答記入、後日回収しました。

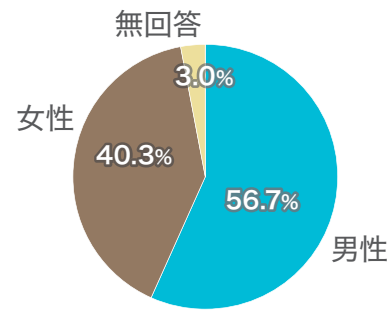
4) 調査期間

2015年3月

1. 性別と年齢

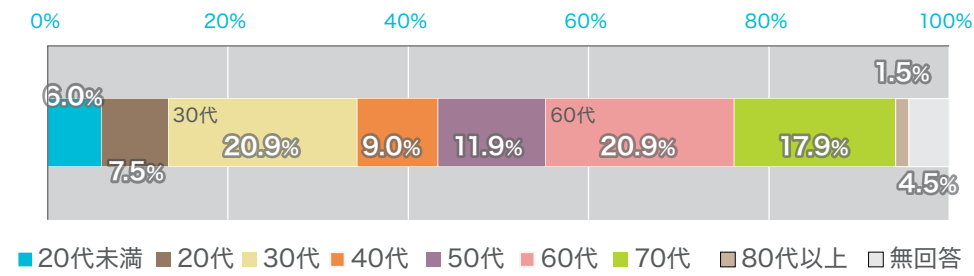
a) 回答者の性別は、男性が56.7%、女性が40.3%となっています（図Ⅲ-1）。

図Ⅲ-1 性別



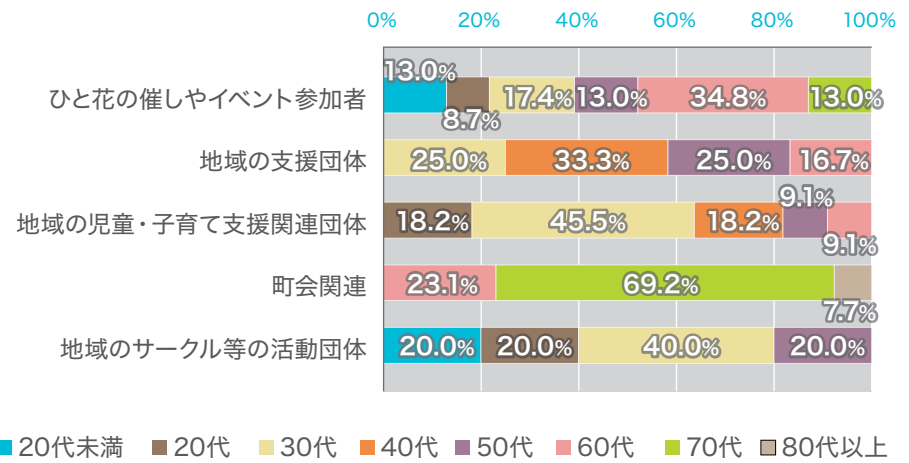
b) 回答者の年齢層は、10代から70代までと幅広いです。30代と60代がもっとも多く、それぞれ20.9%です。70代が17.9%、50代が11.9%と、中高年が多くなっています（図Ⅲ-2）。

図Ⅲ-2 年齢



c) 図Ⅲ-3は回答者の属性を年齢別に表しています。図には示していませんが、回答者の全体の属性は、ひと花の催しやイベントの参加者（35.9%）、地域の支援団体に所属する人（18.8%）、地域の児童・子育て支援関連団体に所属する人（17.2%）、町会関係者（20.3%）、支援を主体としない地域のサークルなどの活動団体に所属する人（7.8%）となっています。各属性の年齢別の傾向をみると、ひと花の催しやイベント参加には、40歳代と80歳代以外の年齢がまんべんなく参加していることが確認できます。地域の支援団体や児童子育て支援関連団体は、20代から60代まで確認できますが、児童・子育て関連の団体では20代の割合が高く、全体的に年齢層が若くなっています。支援活動を主体としない地域のサークル等の活動団体は、30代以下が80%を占めます。一方で、町会関係者は60代以上のみとなっており、70代が7割近くを占めています。

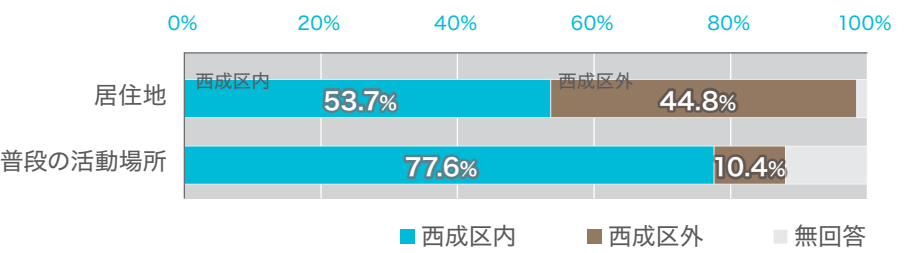
図Ⅲ-3 年齢と属性



2. 居住地と活動場所

居住地は、西成区内が53.7%、西成区外が44.8%となっています。西成区内に居住している人が若干多くなっています。普段の活動場所は、西成区内が77.6%、西成区外が10.4%となっています。（図Ⅲ-4）。

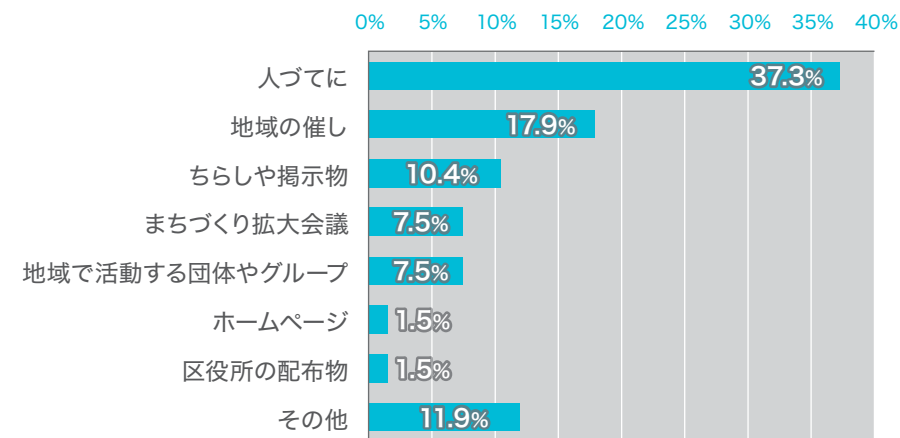
図Ⅲ-4 居住地と普段の活動場所



3. ひと花プロジェクトを何で知りましたか

ひと花プロジェクトを知ったきっかけは、人づてに知った（37.3%）がもっとも多く、次に、地域の催し（17.9%）、ちらしや掲示物（10.4%）が続きます（図Ⅲ－5）。また、釜ヶ崎周辺のまちづくり拡大会議などの地域のまちづくり活動、地域で活動する団体やグループ（ココルーム、こどもの里など）を通して知った人が、それぞれ7.5%確認できます。

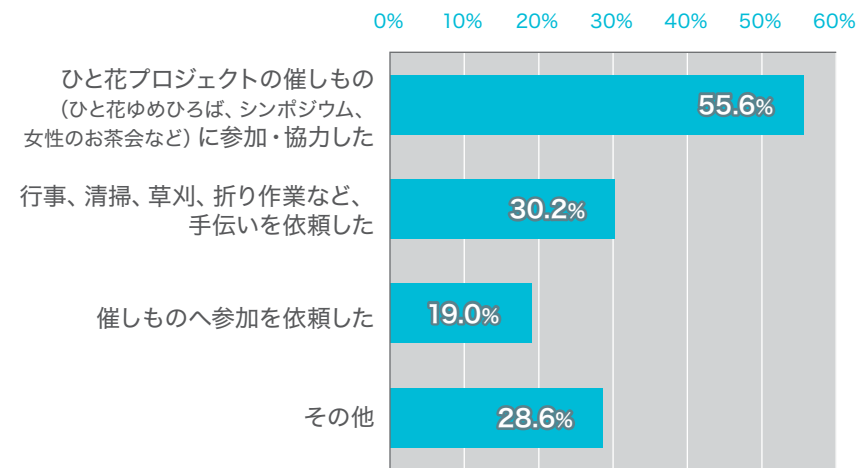
図Ⅲ－5 ひと花プロジェクトを知った理由



4. ひと花プロジェクトとの関わり

回答者とひと花センターとの関わりは、ひと花プロジェクトの催し物に参加したことでの関わりが55.6%となっており、半数以上を占めます。次に、行事、清掃、草刈りなどの作業の手伝いを依頼したが30.2%、催し物への参加を依頼が19.0%となっています（図Ⅲ－6）。

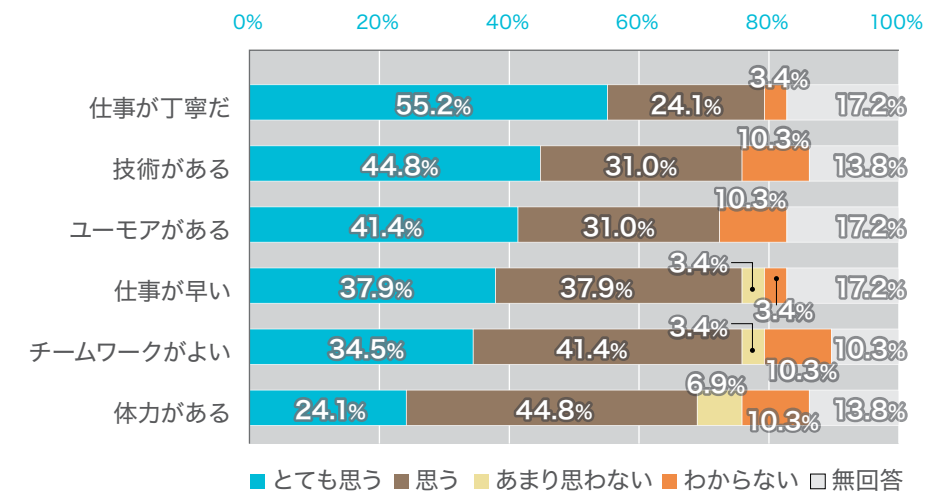
図Ⅲ－6 ひと花とのかかわり



a－1）依頼内容の評価

ひと花センターに作業の依頼をしたことのある個人・団体に、依頼内容の評価を行ってもらいました（図Ⅲ－7）。作業の丁寧さを評価している人がもっとも多く、とても思うが55.2%、思うが24.1%と合計8割が良い評価をしています。これに、技術がある（とても思う44.8%）、ユーモアがある（41.4%）が続きます。作業が早い、チームワークがよい、については、とてもそう思う、思う、の合計は多いのですが、あまり思わないがそれぞれ3.4%確認できます。体力があるについては、登録者が全員高齢ということもあり、他と比較して評価が低く、とても思う、思う、の合計が68.9%、あまり思わないが6.9%確認できます。

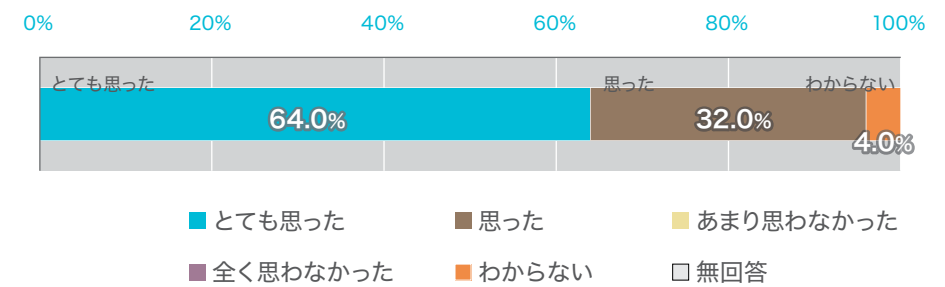
図Ⅲ－7 依頼内容の評価



a－2）また依頼したいと思ったか

ひと花センターにまた作業の依頼をしたいかたずねたところ、9割以上がまた依頼したいと回答しています。このうち、とても思ったが64.0%、思ったが32.0%となっています（図Ⅲ－8）。

図Ⅲ－8 また依頼したいと思ったか



b－1）ひと花センターにかかわっての印象はどのようなものでしたか（自由回答）

ひと花センターと関わりのある人たちにひと花の印象をたずねたところ、多くの自由回答が得られました。率直な印象を簡単な言葉で表すようなコメントや、利用者や職員への具体的な印象、子どもとの交流を通じたエピソード、居場所としての印象のほか、今後の課題に関することへの助言もありました。

<率直な印象として>

- ・あたたかみを感じた、アットホームな感じ、いいところと思った、たのしかった、きれい、過ごしやすい
- ・とてもあたたかい雰囲気で見えてほっとする
- ・なごやか、ほんわか、あったか、ゆったりした感じがとても気持ちよく大変楽しかった
- ・雰囲気がいい、楽しい場所、好印象、明るい、自由な感じがする
- ・スタッフの感じが良い、居場所となっていると強く感じた

＜利用者や職員への印象＞

- ・散歩の際、何気に立ち寄らせていただいたときもみなさんで迎えてくださいました。
- ・とても楽しそう（スタッフがさまざまな配慮をしているのでしょう）。
- ・とても明るくきれいな空間でした。利用者さん・地域の方との区別がつかずみなさん楽しんでいらっしゃいました。
- ・みなさんがとてもあたたかかったです。入りやすかったです。
- ・みなさんが自分のできること、また、地域の人たちとの交流を一所懸命がんばっているのがわかります。
- ・みなさんよく動かれて積極的に活動されています。
- ・参加者間のつながりが強く、参加者とスタッフの関係も外から見ていて、心快いように感じます。ただし、時々、「利用者」さんとして参加者のみなさんを扱う場面に対して、多少の違和感を感じます
- ・頼りになる存在である。みなさんがいきいきとしている
- ・野菜の説明を熱心してくださり、いきいきされているなと感じました。もっとこのような場があれば良いなとも思いました

＜具体的なエピソード：子どもたちとの交流から＞

- ・いつもとても親切で私たちの依頼にも親身になって一緒にとりくんでくださる。こどもたちとの関係、信頼関係もできていて、一緒に、遊び場を作っているという気持ちになります。
- ・お菓子がたくさん出たので子どもたちは大喜びでしたが、量がちょっと多い気がします。みなで紙芝居をして楽しく過ごせました。
- ・こどもたちと参加したが（二回）お菓子がたくさんでてきてびっくり。２回目は時間外であったにも関わらず、歓待していただき、申し訳なかったです

＜居場所としての印象＞

- ・何か自分にできることにうれしくボランティアも楽しく、自分の居場所みたいな、自分がここにたしかにいる。ずっと部屋にこもってしまう自分が少しでも参加できることに感謝いたします。
- ・今までの私は、行く場所がなく部屋にいることが多く、しかしひと花センターに顔を出すことで少し自分から行く場所ができ、ありがたいです。
- ・世代間の人間関係が分断している今、子どもとおっちゃんのふれあい、また、さまざまな技術の継承などありがたかった

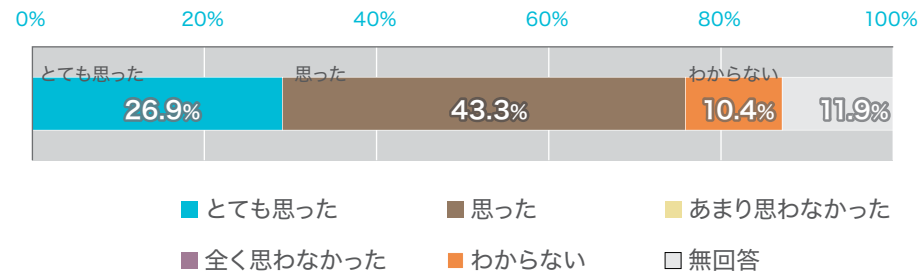
＜課題につながること＞

- ・新聞が毎月カラーですので、広報に予算を割いていらっしゃる印象です。ひと花まつり？でコーヒーをいただきました。取組みの意義や利用者に比して施設が小さいのでは、と感じました。
- ・今後をみていきたい
- ・人間関係が難しそうだと感じました。
- ・ゆめひろばのように誰でも参加できるイベントをもっとふやしてほしい！

b-2) ひと花のプログラムや行事に再度参加したいか

ひと花プロジェクトのプログラムや行事に再び参加する意思についてたずねたところ、とても思ったが26.9%、思ったが43.3%となっており、7割以上の人が再びひと花の活動に参加したいと回答しています（図Ⅲ-9）。

図Ⅲ-9 ひと花のプログラムや行事に再度参加したいと思いましたが



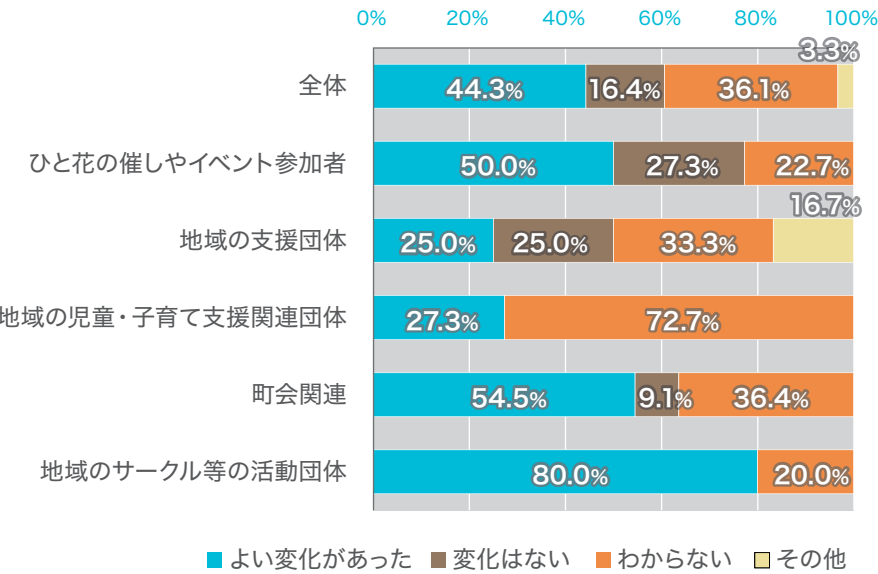
5. ひと花プロジェクト始動後の変化

ここでは、ひと花センター開設後のさまざまな取組みが、地域にどのような変化をもたらしたのか、回答者の意識と評価から明らかにしていきます。以下、9つの項目に関する変化を回答者全体と属性別にわけてみていきます。回答者の属性は図Ⅲ-3での属性分類を使用します。

①生活保護受給者へのイメージ

ひと花プロジェクトができて地域の人たちがもつ生活保護受給者に対するイメージに変化があったと思うか、については、全体では44.3%の人がよい変化があったと答えています（図Ⅲ-10）。悪い変化があったと感じている人は確認できませんが、1.5割が変化はない（16.4%）、3割程度の人がわからない（36.1%）と回答しています。属性別にみると、イメージにより変化があったと回答したのは、地域のサークル等の活動団体が80.0%と非常に高くなっており、これに町会関連（54.5%）、ひと花の催しやイベント参加者（50.0%）が続きます。

図Ⅲ-10 生活保護受給者のイメージ



a) どのような変化を感じたのか自由に回答してもらったところ、以下のような声が聞かれました。

＜ひと花での取組みを通して＞

- ・元気な方々が参加できるいろいろな活動プログラムがあり、生きるはりあいができたと思う
- ・人間らしく輝いている姿を見ることができた。例えば、得意なことをいきいきとする、不慣れな紙芝居にまじめに取り組むなど
- ・仕事があれば「一生懸命に」働かれていることを示せていると思います。花、とても綺麗です。
- ・生保への偏った見方が強くあるけれど、実際に人と人が関わる機会をもった人や、間接的に読み物等で知った人には変化があったと思う。
- ・仲間と力を合わせて前向きにいきているその姿を、その人々のキャラを具体的に見せることができるようになった。それまでは理屈だけの世界だった
- ・人と関わろうとする姿勢、リハビリテーションになっている
- ・人と人との関係が必要ということが示された

＜地域とのかかわり＞

- ・地域内で出会った時に、「今日も帳合がんばったよー」等と声をかけてくれるようになりました。「いきいき」している印象をもちました。
- ・地域の一員としての意識がお互いに深まった気がする
- ・地域の方々、いろいろな面で協力をしてくれます
- ・地域活動の清掃活動に参加してもらっていますが、回を重ねるごとに会話がはずんでいます
- ・仲間ができて気持ちが明るくなり、ゆとりができたように感じられる
- ・町中で参加者間であいさつをしたり、あつまっている姿をみたのが印象がよかった
- ・周辺がきれいになった
- ・雰囲気が明るく変わったと思う。

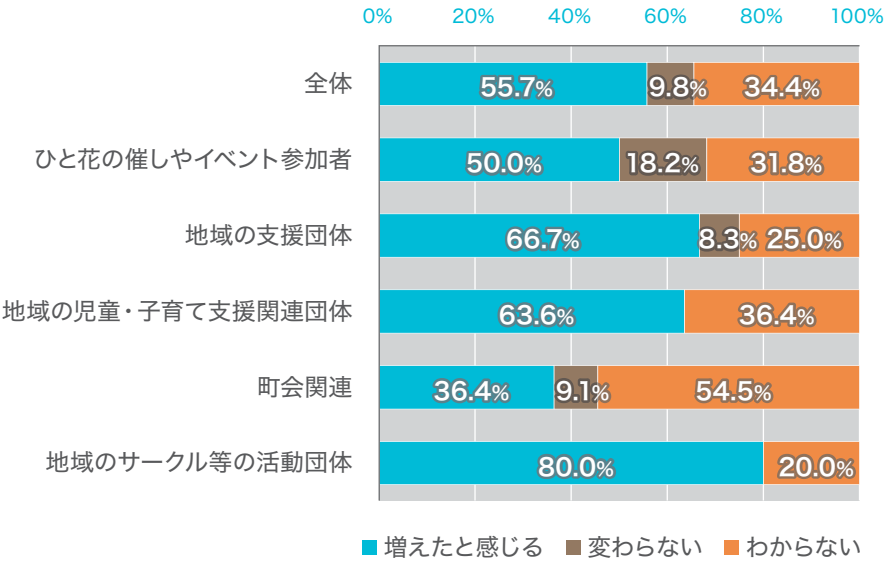
＜登録者以外でたまに立ち寄る人から＞

- ・ひきこもりがなくなった
- ・何もしないより、何か人様のためにできること 自分がそうじのお手伝いができることに感謝している
- ・活力を自分にもらった
- ・生きていく意義があると思えるような活動だと思う

②単身高齢生活保護受給者と地域とのつながり

単身高齢生活保護受給者と地域とのつながりについては、全体をみると、つながりが増えたと感じた人が55.7％確認できます。変わらないが9.8％、わからないが34.4％確認できます。属性別にみると、地域のサークル等の活動団体が80.0％と最も高く、地域の支援団体（66.7％）、地域の児童・子育て支援関連団体（63.6％）が続きます。（図Ⅲ－１１）。

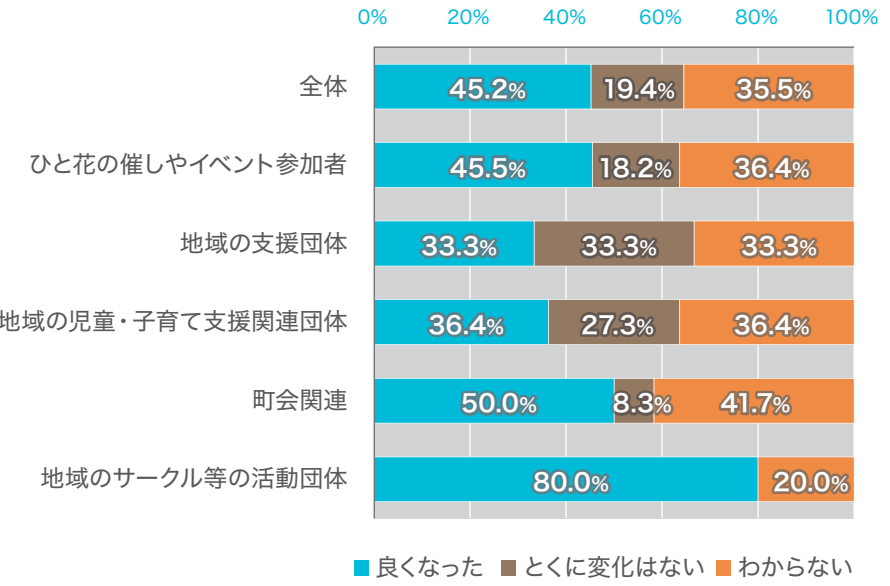
図Ⅲ－１１ 単身高齢生活保護受給者と地域とのつながり



③地域のイメージ

ひと花プロジェクト始動後の地域のイメージに関しては、全体をみると、45.2％が良くなったと答えており、変化はないが19.4％、わからないが35.5％となっています。属性別にみると、地域のサークル等の活動団体が80.0％と最も高く、町会関連（50.0％）、ひと花の催しやイベント参加者（45.5％）と続きます（図Ⅲ－１２）。

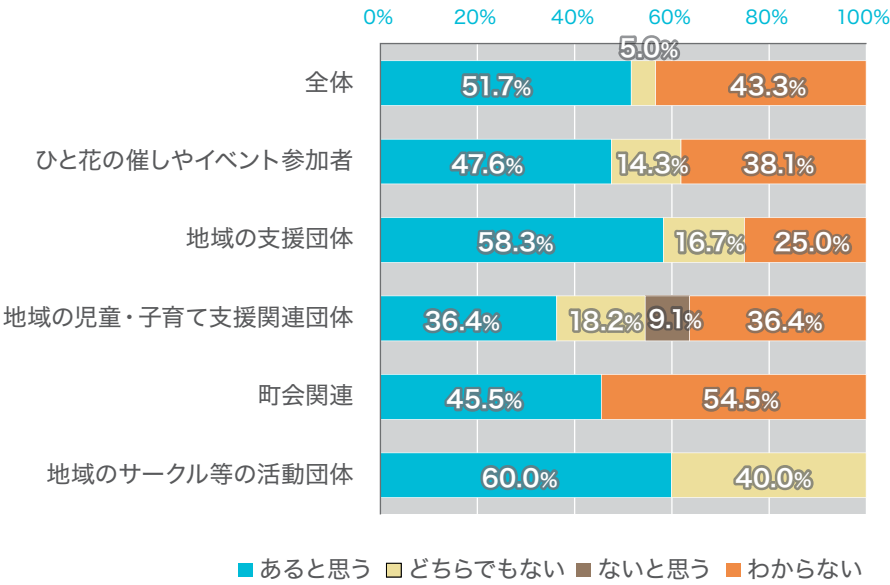
図Ⅲ－１２ 地域のイメージの変化



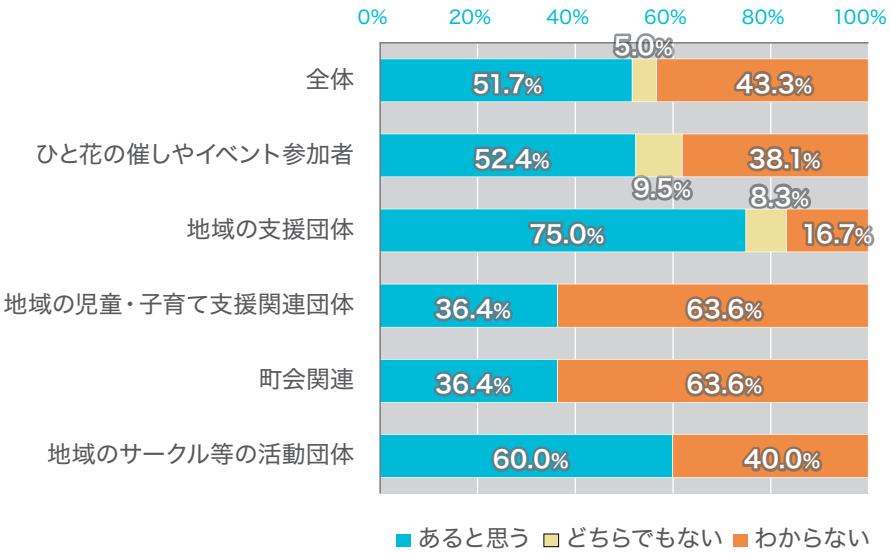
④ひと花センターの運営主管と運営体制

ひと花センターを行政が主管し、5つのNPOが協同で運営していますが、そのことのメリットの有無についてたずねました。全体をみると、両方の質問ともに、51.7%が、メリットがあると回答していますが、わからないという回答も43.3%と比較的高い割合確認できます（図Ⅲ-13、図Ⅲ-14）。行政が主管することのメリットについて属性別にみると、地域のサークル等の活動団体が60.0%、これに、地域の支援団体（58.3%）、ひと花の催しやイベント参加者（47.6%）が続きます。（図Ⅲ-13）。5つのNPOが協同で運営するメリットに関しては、地域の支援団体が75.0%と最も高く、地域のサークル等の活動団体（60.0%）、ひと花の催しやイベント参加者（52.4%）が続きます（図Ⅲ-14）。

図Ⅲ-13 ひと花を行政が主管していることのメリット



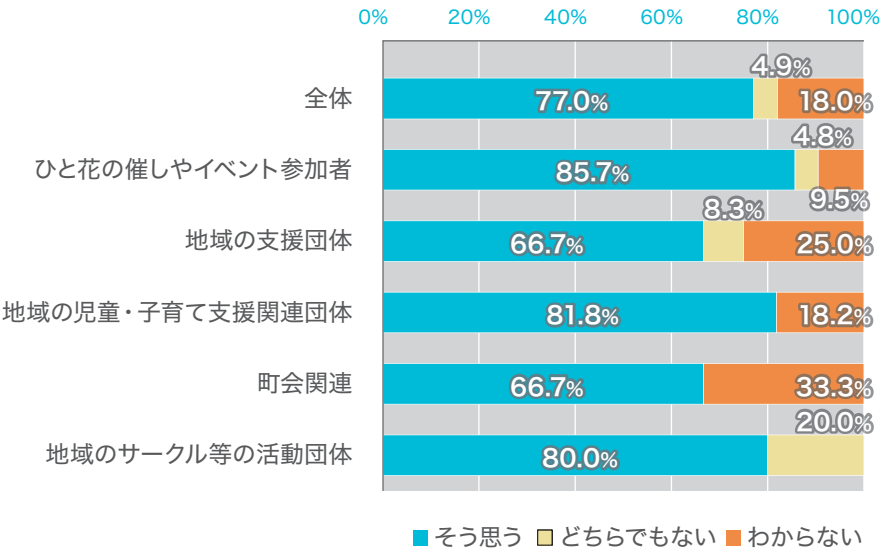
図Ⅲ-14 5つのNPOが協同で運営していることのメリット



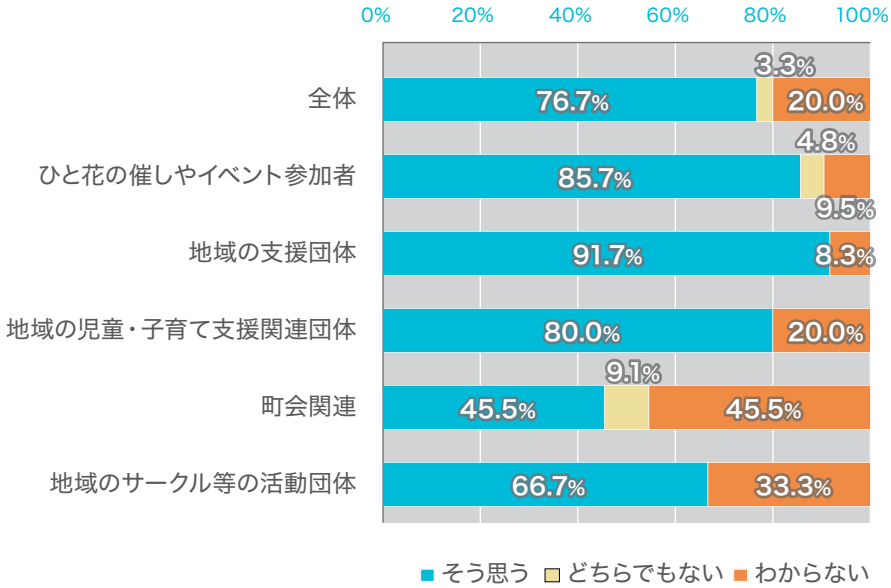
⑤ひと花センターができて助かったか／地域の力になっているか

次に、ひと花センターができたことによる地域への効果をたずねてみました。全体をみると、ひと花センターができて助かったかという問いについては、77.0%がそう思うと答えています（図Ⅲ-15）。属性別にみると、ひと花の催しやイベント参加者が85.7%、これに、地域の児童・子育て支援団体が81.8%、地域のサークル等の活動団体が80.0%と上位の項目はいずれも8割以上の高い値を示しています。次に、ひと花センターが地域の力になっているかという問いに関しては、全体をみると76.7%がそう思うと回答しています（図Ⅲ-16）。属性別にみると、地域の支援団体が91.7%と非常に高い割合を示しています。これに、ひと花の催しやイベント参加者（85.7%）、地域の児童・子育て支援関連団体（80.0%）が続きます。

図Ⅲ-15 ひと花ができて助かった



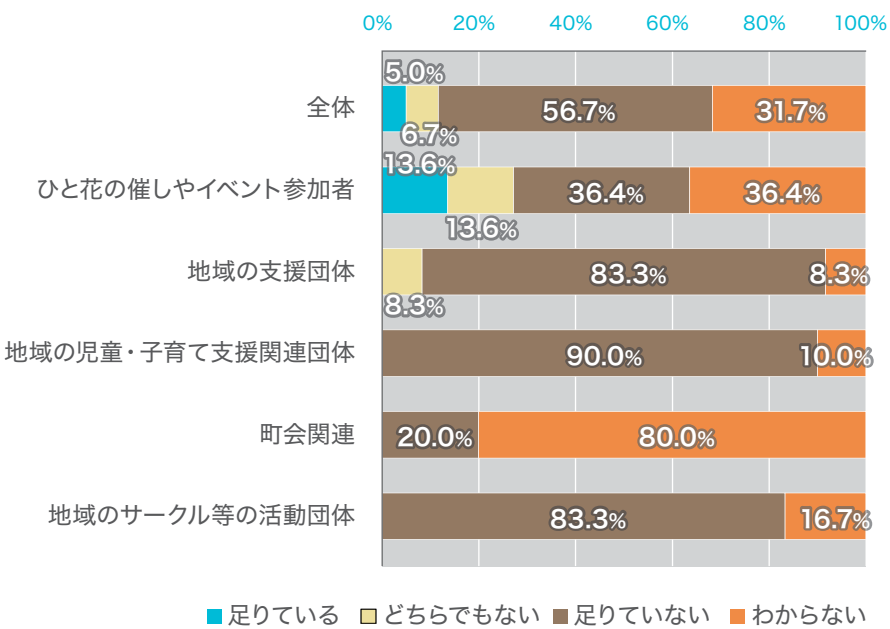
図Ⅲ-16 ひと花が地域の力になっている



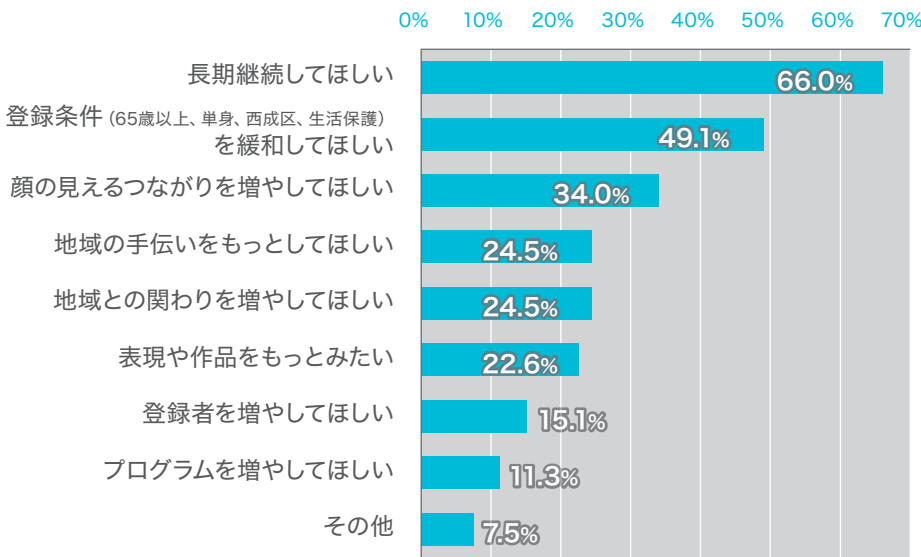
⑥単身高齢生活保護受給者の居場所充足度

最後に、単身高齢生活保護受給者の居場所が地域内で充足しているかについてたずねました。全体をみると、足りていると回答した人は５％とごく少数となっている一方で、56.7％が足りていないと回答しています（図Ⅲ－１７）。属性別にみると、地域の児童・子育て支援関連団体に所属する人たちがもっとも足りていないと感じており（90.0％）、これに地域の支援団体（83.3％）、地域のサークル等の活動団体（83.3％）が続きます。一方、ひと花の催しやイベントに参加している人たちに、居場所が足りているという回答(13.6％）が唯一確認できます。これは、ひと花の催しイベント等をはじめ、地域の居場所資源を積極的に活用する居場所利用の当事者としての意識を反映していることがうかがえます。また、町会関連の人たちは、居場所が足りているかわからないと回答した人が80.0％にものぼり、町会以外の属性の人たちとの意識の差が明確に現れました。地域での支援活動を目的として活動する人たちと比較すると、町会関連の人たちは支援に関する当事者と関わる機会が限られ、また地域資源への関心や認知する機会も少ないので、判断が難しいのかもしれません。

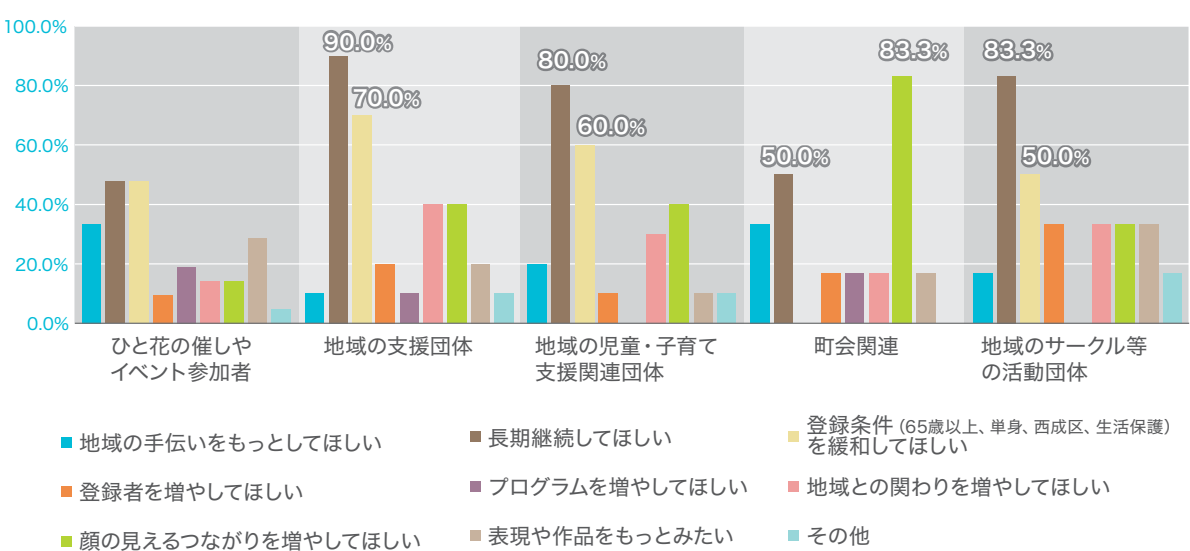
図Ⅲ－１７ 単身高齢生活保護受給者の居場所



図Ⅲ－１８ 今後ひと花にのぞむこと



図Ⅲ－１９ 今後ひと花にのぞむこと（属性別）



6. 今後ひと花センターにのぞむこと

今後ひと花センターにのぞむことについてたずねました。もっとも多いのが、長期継続してほしい（66.0％）でした（図Ⅲ－１８）。これは、登録者がひと花にのぞむことと同様の結果になっています（P62 図8－8）。次に、登録条件の緩和が49.1％となっています。現在は、高齢の生活保護受給者のみを登録対象としていますが、登録条件を緩和してより多くの高齢者が利用できるような場所にしてほしいという要望を持つ人は半数程度確認できます。その他には、顔の見えるつながりを増やしてほしい（34.0％）、地域の手伝いをもっとしてほしい（24.5％）、地域との関わりをもっと増やしてほしい（24.5％）などの、地域とのつながりを強め、地域の役に立つことが期待されていることがうかがえます。さらにこれを回答者の属性別にみると、いずれの属性でも長期継続への希望が高く、地域の支援系の団体、活動団体での高さが目立ちます（図Ⅲ－１９）。一方で、町会関連の人たちはここでもほかとは異なる傾向を示しており、顔の見えるつながりを増やしてほしいという希望が83.3％確認できました。普段、ひと花センターをはじめとする支援の現場や地域活動の場での接点が薄いことから、まずは顔の見えるつながりの構築から関わりをスタートさせることを希望していることがわかります。

最後に、回答者のみなさんから寄せられたひと花プロジェクトへのアドバイスやエールを掲載します。日頃の地域との関わりの中からの応援、居場所としての期待、希望・要望や今後への課題など、多くの声を寄せていただきました。

ひと花プロジェクトへのアドバイスやエール

<地域との関わりから>

- ・地域の手伝いをしてくれてありがとうございます。
- ・日頃の行事に協力、参加、とても助かっています
- ・「釜ヶ崎に頑張っている団体がある」という情報を聞いてお邪魔させていただきました。街の住民の方は孤立して生活されている方が多いような印象を受けましたが、こちらの方々はみなさんと一緒に歌っていたり、とても楽しそうで見えて嬉しかったです。農業も参加したいです！また遊びにきたいです。突然でしたが、コーヒーごちそうさまでした。楽しかったです。
- ・いつも顔を見れば、あいさつ等もしていただき、こどもたちも仲良くしていただき、とても助かります。いろんな人たちとのつながりはとても大事だと思います。皆様が持つ素敵な力をいろいろ、若い人たちにもつなげていってほしいと思うし、力を貸していただきたいと思います。これからも頑張ってくださいね！そして、地域を明るく元気に！
- ・ひと花センターさんと子どもたち（保育園児）と一緒に交流し、楽しむことができる行事にまた呼んでいただけたら嬉しいです。いつもありがとうございます。
- ・いつも本当にありがとうございます。子供たちだけでなく、大人にとってもおじさんたちの力はいつも便りになり、参加して下さること、楽しみにしていたり、みんなで過ごす場面を見ては、あたたかい気持ちになります。これからも「つながる」ことで町が明るくなったり、笑顔が増えたらいいなと思います
- ・引きつづき、子どもたちとの交流の場をつくっていききたいです
- ・拠点は必要と思います。ただ、山王こどもセンターからは少し距離があるので行き来するのは難しいです。ひと花スタッフからボランティア派遣の件を提案いただき、個人的なつながりにむすびつけられると良いと思っています。お互いにとって良い関係がうまれるようマッチングにも注意がいると思います→継続的な関係のために…
- ・だいにだいに育てましょう。ただしあまり肩に力を入れすぎないように（はりきりすぎないように）

<居場所としての期待>

- ・私はみなさんがいきいきとされている、その姿を見て、何もしない人よりずっとかちがあり、ますますひと花センターが、われわれの居場所として発展してほしいです。感謝をこめて、心より思います。
- ・社会の資源のひとつとしてのひと花さん、居場所と出番づくり（多世代の）よろしくお願いします。
- ・単身高齢者にとって、毎朝目がさめても、一日何もすることがないのはつらく不健康である。その点、ひと花センターへ行って仲間とともに自分のできる範囲で人の役に立てたら、心身共に健康になり、生きがいも生まれると思います。ひと花センターの関係者のみなさま、大変ご苦労ですが、今後もがんばってください
- ・地域高齢者の居場所として、気安く出入りができるように一度参加すると要領が得るのですか。
- ・中だけでなく、紙だけでなく、声でもかけたら少しでも増えると思う。登録者が増えたら人も足りなくなるから、またアルバイト的な感じで声をかけたらいいと思います
- ・地域にとけこんで楽しく一日一日を送れるように、自分の得意とするものをアピールすると良いと思う

<希望や要望>

- ・生保以外で年金受給者の利用も可能であればもっと広がりがあるのでしょうか？孤独に生活されている方の憩いの場、人とのつながりの場があるのは、とても意義があると思いますので、これからもさらに発展を期待しております。他施設との合同の催しなどもあれば、より広く周知できるのかもしれませんが
- ・宣伝が足りない。ひと花食堂を作ってみるといい。場所を借り、安価で食事を提供できるようにする。
- ・ぜひ継続してほしい。地域とのつながり強化しましょう。期待しています。
- ・継続していくことが大事だと思います。たくさんの方に知っていただくとよいのでしょうか。また来させていただきたいです。よろしくお願いします。
- ・健常者も障がい者も一緒に楽しくできることを願ってます
- ・おじさんたちががんばりすぎずにいられるように、何もできなくてもいられる場所であってほしいです。いつもみなさん楽しそうにいい雰囲気なので長く続いてほしいです
- ・なるべくたくさんの方が継続して参加できるような取組をお願いします。何か役に立ちたいと思っておられる方は多いので。
- ・お金がないので無料の誰でも参加できるイベントの回数を、たとえば月2回とか3回とか、ふやしてほしい
- ・楽器教室、手作り教室、はいひんなどで楽器を作る教室も希望。
- ・なにわ区にもひと花さんつくってほしいです。
- ・ひと花センターの取組みは、費用対効果・短絡的な波及効果の評価ではすくいきれない変化を生み出しているように思います。ひとりひとりの全面的・マルチプルなケアを実践されていることに対して、容易に理解できるイメージ図等を用い、取組みの重要性を語れると、より理解をえやすいと思いました。

7. 総括

ひと花センターに関する意識調査から、地域の人たちのもつひと花センターへの意識や評価が明らかになりました。回答者は、ひと花センターの催しイベントの参加者、支援系団体、非支援系団体、町会関連に分類できます。回答者の年齢は10代の若い人たちから80代まで多様な年齢層の人たちです。

ひと花センターは西成区が主管して実施されている事業ですが、市や区の広報紙などを通して活動を知る人はごくわずかで、多くの人が、人づてや地域の催しやまちづくり関連の活動を通してひと花の活動や催しに参加し作業の依頼をしています。回答者のうち約3割が、ひと花センターに作業の依頼をしたことがあり、作業の丁寧さや技術への評価もおおむね高く、約9割が再度作業の依頼をしたいと回答しています。また、催しやイベントの参加についても、再度参加したいと回答した人が7割以上確認できました。一度でも関わったことのある人たちのひと花の取組みへの評価が高いだけでなく、再度参加や依頼をしたいという希望も強いことから、ひと花センターへの地域からの期待の大きさがうかがえます。

ひと花センターが開設したことが地域にどのような影響と変化をもたらしたかということについて、回答者の属性別（ひと花センターの催しイベントの参加者、支援系団体、非支援系団体、町会関連）の評価からは、以下の傾向が明らかになりました。

まず、ひと花センターの催しイベント参加者に関しては、ひと花ができて助かった、ひと花が地域のちからになっていると評価する人たちの割合の高さが目立っていました。このカテゴリーには、今後ひと花センターの登録者になる可能性のある人や登録者と年齢の近い60歳代以上の人たちが5割弱を占めることから、居場所利用の当事者意識の強さがうかがえます。

こうした当事者性とは反対に、支援の対象ではなく、また支援を主体としない活動を行っている地域の団体は、生活保護受給者のイメージの好転、単身高齢生活保護受給者と地域のつながり、地域イメージの変化、ひと花ができて助かった、と評価する割合が高く、ひと花を通して初めて生活保護受給者と関わることで、それまで持っていた生活保護受給者のイメージが大きく転換したことがうかがえます。これとは反対に、支援活動を主体としている団体では、かねてから生活保護受給者や地域と関わりを持ちながら活動しているので、ひと花をきっかけとして生

活保護受給者や地域のイメージが大きく変化するような傾向は確認できません。しかし、ひと花ができて助かった、ひと花が地域のちからになっている、と評価する割合が高いので、支援活動の連携・協力のパートナーとしてひと花センターを高く評価していることがわかります。

町会関連の人たちは、ひと花ができて助かった、地域のイメージの変化を高く評価していますが、ひと花ができたことによる変化について、“わからない”と回答する割合が他の属性と比べて軒並み高いので、支援をめぐる当事者との関わりが限られ、また地域資源に接する機会が少なく、活動そのものへの認知が低いことを表しているのかもしれない。

ひと花センターの位置する地域は、あいりん地域（釜ヶ崎）であり、日雇労働者やホームレス、生活保護受給者への支援活動が活発に実施されてきた地域です。こうした特異な地域的条件がもたらした地域資源の豊かさを一つの強みにしながら、地域の支援団体との協力と連携を維持しつつ、新たな取組みや今後のひと花センターの事業の展開に活かしていくことが重要な課題になってくると考えられます。しかし、西成区までスケールをひろげて考えると、市民にとって支援の当事者となったり、支援の現場に日常的に接したりする機会は多くありません。そうした人たちに対して、ひと花センターの活動の意義や役割を認識してもらうような機会を増やしていくこともまた重要な課題の一つになってくるでしょう。

IV. 2つの調査から導きだされる課題

「ひと花センター登録者実態調査」と「ひと花センターに関するアンケート調査」の2つの調査の結果から導きだされたひと花センターへの評価や今度の課題について簡単に述べて、まとめにかえます。

1) 登録者の加齢と健康リスクへの対応

ひと花センターの登録者は全員高齢であり、今後、加齢に伴いさらに健康状態が悪化していくことは十分に考えられます。常用外の人たちがひと花から足が遠のいたいちばんの理由は体調の悪化でした。常用外の人たちのように孤立リスクが高い人の健康状態が悪化した場合、また孤立していなくても健康悪化リスクのある人たち、そうした人たちに対しては、健康を損なわないための日常的な対策と病院への適正な受診を組み合わせることで、持病や慢性疾患の症状の重篤化を予防する対策がのぞまれます。仮に、健康状態が損なわれた状態においても、つながりのある人たちの目が届くような緩やかな見守りがあれば、孤立や症状の重篤化が予防できる可能性もあります。ひと花センターの運営には訪問看護の事業所も関与しているので、こうした支援を専門とする関係機関と連携しながら、訪問事業等による緩やかな見守り体制の構築なども今後の取組みの一つの課題になっていくと考えられます。

2) 帰属意識とつながりをもたらし場の意義

常用の人たちは、自己有用感の希望と実際のギャップが常用外の人と比較して小さく、そして、居場所としてのひと花への意識も、ひと花に関わる人たちの中でじっくりと関係を築きながら、自らが安心できる場所を作り上げ、帰属意識や仲間意識を高めていることがわかりました。さらに、継続して利用している人たちの中には、ひと花センターを利用したことで生活全般においてポジティブな変化を感じている人が多くいます。小さな目標を持ち、生活保護の範囲内で自らの生活を整え、組み立てていく力を身につけている人もいます。居場所を得たことや自己有用感を高めること、さらに自分の体調や生活を整えることができる場所としてひと花センターは十分に機能していることがわかります。

また、調査対象者の約7割がひと花センターの長期継続をのぞんでいます。居場所としてのひと花センターでも、たまに立ち寄り場所としてのひと花センターでも、ひと花センターがそこにあり、単身高齢の生活保護受給者に広く間口をひろげ、いつでも迎え入れてくれるような場であることが、常用、常用外に関わらず多くの登録者に安心

を与えていると考えられます。地域の役に立つ、人と交流する、仲間をつくるといった外との関わりのこと、そして、生活や体調を整えていくという自分自身の身の回りのこと、この2つの往還がポジティブなスパイラルを生み出し、生活保護受給者が孤立せずいきいきとした生活ができるようになるまでには十分な時間が必要です。そのためにも、ひと花センターが長期的に継続することがのぞまれます。

3) 生活保護受給に対する意識をときほぐす

登録者の中でも特に常用外の人たちに、生活保護受給へのネガティブなイメージが、その人自身のふるまいや人や地域との接し方を萎縮させ、それがその人の孤立を高めてしまう可能性が顕著に現れていることがわかりました。こうした人たちと接点を持つことはいろいろな工夫が必要かもしれませんが、例えば、体の調子が悪い時には病院を受診すること、ひと花センターにいつでも通えること、地域の役に立ってもいいことなど、すべての生活保護受給者に生活が保障され、受け入れられ、活躍できる場所があることを理解してもらうことが重要です。登録者自身が持つ生活保護受給に対するネガティブな感情を解きほぐし、自己を尊重し肯定する手助けをすることも、孤立を防ぐためには大切なことかもしれません。

また、生活保護受給者自身の否定的な感情だけではなく、世間からの生活保護受給者への批判的な見方も近年強まっている中で、ひと花センターのような取組みを維持していくのは大変なことです。ひと花センターの空間の維持、支援する職員、その他運営に関することには、多くのコストがかかってきます。しかし、こうした空間や機能にコストをかけない場合、時間と暇をもてあました生活保護受給者はこもりがちになり、ギャンブルやお酒などの依存症の重篤化が経済的な破綻と健康状態の悪化をもたらし、生活保護費が適正に使用されないだけでなく医療費も増大することが予測されます。その結果、生活保護受給者の孤立度が高まり地域も荒廃する、という負のスパイラルが別の社会的コストを生み出します。どちらのコストを選ぶのかは、最終的には行政や市民の選択に委ねられることなのかもしれません。しかし、ひと花センターの取組みは今回の調査からも明らかなように、現に地域への波及効果を少なからずもたらしめています。ひと花と地域の新たな交流の中で生まれるなごやかであたたかみのある雰囲気は、コスト換算では表現できないつながりの豊かさやそれによって生まれる地域の力の可能性を感じさせ、そこには地域の荒廃という言葉が入り込む余地はありません。ひと花センターが地域にとってもかけがえのない場所になりつつあることは明らかです。生活保護受給者のエンパワーの場としてだけでなく、地域を巻きこみ、地域のちからを引き出していくような可能性も、今後のひと花センターの役割として期待できるのかもしれない。

ひと花プロジェクト 調査結果から今後の事業の継続性を展望する

水内俊雄（大阪市立大学 都市研究プラザ／文学研究科地理学専修）

▼事業の意義の再確認

改めて確認することになるが、西成区には高齢単身で家族をはじめとする公私のセーフティネットを有さない高齢者が、全国最大の規模と密度で集住している。少子高齢化という言い古された地域課題ではあるが、どちらも激しく進行している西成区では、深刻な高齢化の加速がもたらす課題に先進的に地域として取組み試行事例を提供する使命を有する。その使命を西成特区構想を通じて具体化した事業が、「西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業」、愛称「ひと花プロジェクト」である。本事業のめざすところは、支える地域コミュニティ自体が弱体化する中での、新たなコミュニティ再興の担い手づくりでもある。スタートアップとして厚労省の補助金を利用し、今後を展望するにあたり、本事業の効果の政策的吟味と、市が担ってゆく今後の事業継続の可能性の追究を簡単に行っておきたい。

▼今回対象者の位置づけ

2005年に『大阪市西成区の生活保護受給者の現状』という調査を、当時の大阪市健康福祉局・西成区保健福祉センターが高齢受給者を対象に行っている。ここで右図のような「就労自立」や「生活自立」の指標からみた高齢受給者に対する支援法方向性を、推計をもとに提言している。

本事業の対象者は、西成の福祉部門での推薦を経て、特に「福祉的就労」、「ボランティア」、「社会的自立」類型を中心とし、少数であるが金銭管理プログラムにみられる「日常生活自立」層の方も利用していると予想される。その％値は、前者3類型のみをあわせても70％を占めることになる。すなわちこの事業の拡がりとは、西成区の高齢生活保護受給者の多数派にある点である。

安定した生活保護による居宅生活をどのように維持してゆくかという観点から、大きな母集団の一部で、最初の一步を踏み出したところに意義があることをまず確認しておきたい。

▼事業参加への満足度、有用感

報告書の丁寧な分析以上に付け加えることはないが、このようにクリアにポジティブな評価値が出てくことは稀である。参加していることの意義や事業への評価は総じて高く、参加している人々の事業への期待は高い。しかし自分自身の評価として社会のために役立っているかという自尊心感情に関わるところでは、まだ十分達成されているとはいえない。地域にどのような活力を与えるか、また住民による相互扶助や互助に関わる課題であり後述する。

▼地域からのバックアップ

この事業に直接ボランティアの依頼や支援メニューの提供を行っている、あるいは何らかの形でバックアップしているサポーターが感じる、事業の意義、依頼したボランティアの質に対する評価も高くなっている。あいりん地域は長らく、既存の地域組織ではなかなかサポートしにくい、流動性の高い人々の居住エリアであり続けてきたが、生活保護受給をきっかけに、こうした人々が数多く地域の住民として根付き始めた。地域に定着し始めた人々の自

らの力付けに、地域も動く構図である。あいりん地域にはさまざまな支援の民間組織、NPOがあり、事業サポートにそうしたなりわい型の地域資源がうまく動員された。さらに、町会や一般住民のボランタリーな参画もあり、地域全体で事業を支える多様な体制が、ひと花事業をきっかけに始まったことも重要である。地付きの地域組織もこの事業で新たなコミュニティ組織化、ネットワーキングの手法を獲得したともいえよう。まさに地域力の増進である。

▼事業参加が継続していない層

もちろんすべての人がうまく継続してこの事業に乗っているわけではなく、継続参加しなくなった層もかなりいる。最大の要因は健康、体調の悪化であり、このことは前頁表の最下段にある「日常生活自立」に支援を要する層として、別の支援の必要性が生まれてくる。これは本事業の守備範囲外であるが、制度下にある医療・介護などとのその後の連携は当然である。在宅での互助や地域でのこうした層へのサポートという新たな体制も必要とされる。その意味で本事業はアフターケアのきっかけにもなるという点で、個人との関係づくりに重要な役割を果たしていることになる。

▼事業効果の説明責任

生活保護受給を前提に居宅保護の人々の安定した生活をサポートする意義は何であろうか？生活保護を活用しながら就労している者のうち、前頁表の「ボランティア」類型に近い形でゆるやかな就労に関わるような形態を「社会参加型就労」と呼ぶ場合^{*注1}、まさしくこのような就労形態にアクセスできた、実現できたことが、本事業の最大の成果と言えよう。そして、浪費を避け依存症にもつながる支出を適度に抑え、ネガティブな消費から社会的理解を得られやすいポジティブな消費が加味される方向へと転換されたこと。また、適切にそして適度に医療にもかかり、医療との上手なお付き合いの積み重ねにより、たとえ入院に至った時にも丁寧な対応が生じ、当然普段の健康も維持されている姿がみえてくる。また依存症になるほど飲酒の多い人では、大きな病気にかかることが多く、医療費は増えるので、その意味でもそうした負のスパイラルを防ぐ役割も果たしている。

介護や医療を本格的に必要とされる場合には、より多くの公的な費用がかかってくる。そうした状況になる時期をなるべく先延ばしし、介護や医療に比して低廉な生活保護でなるべく健康を維持し安定した生活を続けてゆくことに、本事業が役割を果たしている側面も見取れる。

一方、健康を害することにより、この事業への参加から遠のき、別の支援メニューが必要となってきた時に、要支援者との面談やサポートから得られる前もっての情報は、迅速で適切なケアにつながる可能性をもたらしにくれる。ケースワーカーの業務のアウトソーシングにもつながり、制度下の支援につなげてゆく役割も果たしていることにもなる。制度の狭間でぎりぎりの生活を送っておられる層を適切に掘り起こし、自立的生活の安定した継続に本事業の果たしている役割は大きい。

地域で支えるという観点を徹底すれば、あいりん地域で生活支援をなりわいとする組織と地域組織が一体となった、より自立的な組織の確立が今後必要となつてこよう。事業の透明性の確保といった実施主体のマネジメント力の向上と、支える人材のボランタリーな参画と育成が、今後の事業継続のカギとなろう。

注1：『生活困窮者支援の持続可能性とその効果を測定するパネル調査』（インクルーシブシティネット、2013年3月）によると、全国のホームレス支援団体により脱ホームレス支援を受けた後、単身で地域生活に移行した、あるいは何らかの形で支援後の生活を送っている者のうち、56.1％が「生保のみの非就労」、8.1％が「社会参加型就労」、16.7％が「半就労・半福祉」、19.2％が「生保なし就労」、という調査結果を得ている。ここで取り上げている社会参加型就労は、生活保護を利用しながら就労している者のうち、就労から得る収入が時間当たり最低賃金水準未満しか支払われていない働き方として定義している。ただ実際のところほとんどが無償、あるいは交通費程度の有償ボランティアである。ひと花事業は、非就労からこうした社会参加型就労に導く重要なサポートを提供しており、8.1％という数をどのように増やしていくかが、日本全体の課題であることが判明するとともに、この事業の先進性を一般化する必要があろう。

事業概要

事業名称：西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業

愛称：ひと花プロジェクト

事業主管：西成区 保健福祉課（事業調整）

受託事業者：ひと花プロジェクト連合体
代表事業者
特定非営利活動法人釜ヶ崎支援機構
代表 山田 實

構成団体一覧：
NPO法人釜ヶ崎支援機構（代表）
NPO法人こえとことばとこころの部屋
NPO法人生活サポート釜ヶ崎
NPO法人 HEALTH SUPPORT HINATA
NPO法人まちづくり今宮

期間：2014年4月1日～ 2015年3月31日

予算：3398万1120円

登録者数：129名 男122名 女7名

スタッフ：常勤 4名 非常勤 1名
（すべて平成27年3月末時点）

ひと花センター

住所：〒557-0016 大阪市西成区花園北1-2-19

電話：06-6649-7890

FAX：06-6649-7891

Email：info-hitohana@npokama.org

HP：http://www.hitohanap.org/

開所日時：月曜～日曜 午前9時～午後7時（12月29日～1月3日を除く）



ひと花新聞

vol.10～vol.21

7/1 仏壇祭六園 3周年

いよいよ夏休み。仏壇祭六園は、今年で3周年を迎えました。この日、六園の各園で、仏壇祭が行われ、多くの方々が参加されました。お祭りには、お花や、お菓子、お茶などがあり、とても楽しい雰囲気でした。また、お花の展示もあり、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

7/22 廣田神社祭り

今年も暑いなか、廣田神社祭りが行われました。ひと花チームは、お花の展示を行いました。お花の展示には、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

ひと花プロジェクト

ひと花プロジェクトは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

7月のひと花カフェ

7月のひと花カフェは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

ひと花新聞 第13号

ひと花新聞は、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

ひと花プロジェクト

ひと花プロジェクトは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

7月のひと花カフェ

7月のひと花カフェは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

ひと花プロジェクト

ひと花プロジェクトは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

ひと花プロジェクト

ひと花プロジェクトは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

7月のひと花カフェ

7月のひと花カフェは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

ひと花プロジェクト

ひと花プロジェクトは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

ひと花プロジェクト

ひと花プロジェクトは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

7月のひと花カフェ

7月のひと花カフェは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

ひと花プロジェクト

ひと花プロジェクトは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

ひと花プロジェクト

ひと花プロジェクトは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

7月のひと花カフェ

7月のひと花カフェは、お花の知識を深め、お花の楽しみを広げることを目的としています。お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。お祭りには、お花の知識が深まりました。

横浜に咲いたなにわの人情劇

ひと花笑劇団「人生双六」秋の公演

ひと花新聞



発行：ひと花センター
〒577-0068
大阪府西成区花園北
1丁目2番19号
0664777000

トンボさん チョイと休めよ わが前に(青鬼)

秋晴に 空は遠く 日焼く(モンパルナス)



ひと花笑劇団が昨年十一月に産声をあげてから約一年。皆さまに楽しんでいただけたという願いから練習を積み重ね、先月、松竹新喜劇協力のものと名作「人生双六」公演を行いました。前回の公演から内容や出演者を新たに臨んだ今回の舞台はひと花センターでの発表会、「げんきやで！今宮」を皮切りに、「ヨコハマトリエンナ」では釜ヶ崎芸術大学の一票として横浜で遠征公演を行ってしました。おかげさまで各公演大盛況。皆さまからの温かい声援がさらに私たちの励みとなります。これからもどうぞよろしくお願ひします。

地域活動あれこれ

楽しかった夏の「ひまわり迷路」。花も終わり、次は引き抜き作業を行います。結れたひまわりは細かくされて肥料になります。そして今月に控えた「西成大好きふれあい運動会」にむけてグラウンドの整備も手伝いました。また恒例の三角公園クリーンロード作戦にも参加。みんな笑顔になることを目指して今日も活動しております！



お知らせ！ひと花笑劇団公演「人生双六」の千秋楽が来る10月24日(金)11:30より森之宮文化祭(西成市民館)で行われます！また同じく25日(土)(仏壇寺公園)は出店と「ひと花音頭」をお披露目します！ぜひお越しください！

連載「稲妻のおぼろのうた」



今月の収穫！



豊作を収穫し、サマイモを使用してイモメンを漬けたら、いかびでしようか！多分甘味のかいた美味い味、御飯が思えると思います。

タニシ

表現プログラムの結晶

「ひと花音頭」

今回、表現プログラムの講師三人の協力のもと、オリジナル曲に振りをつける計画を開始しました。それは誰もが親しめる「音頭を作る」という参加メンバーと共に講師上田真奈代氏が作詞、ひと花笑劇団が作曲を指導。そしてエメスズキ氏により振りをつけてもらい私たちは「ひと花音頭」の完成を目指します。

まずは楽しんで歌い踊ること。そしていずれは西成の盆踊りでは欠かせないものを作ろうと夢見ております。えうご期待！



お玉作り かズ池田
お玉作りは玉に描くです。まずお玉を水に浸します。水の中に入るとお玉が重くなり、お玉は水に沈みます。お玉は水に沈むと、お玉の重さが増します。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。

阿婆のすてきな手紙
お玉作りは玉に描くです。まずお玉を水に浸します。水の中に入るとお玉が重くなり、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。

お玉作りは玉に描くです。まずお玉を水に浸します。水の中に入るとお玉が重くなり、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。

お玉作りは玉に描くです。まずお玉を水に浸します。水の中に入るとお玉が重くなり、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。

お玉作りは玉に描くです。まずお玉を水に浸します。水の中に入るとお玉が重くなり、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。

お玉作りは玉に描くです。まずお玉を水に浸します。水の中に入るとお玉が重くなり、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。



お玉作りは玉に描くです。まずお玉を水に浸します。水の中に入るとお玉が重くなり、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。

お玉作りは玉に描くです。まずお玉を水に浸します。水の中に入るとお玉が重くなり、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。

お玉作りは玉に描くです。まずお玉を水に浸します。水の中に入るとお玉が重くなり、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。お玉の重さが増すと、お玉は水に沈みます。

第20号

ひと花新聞

平成27年3月1日

ひと花新聞

愛情航路

ひと花新聞の「愛情航路」は、毎月15日（日）に開催されています。今回は、シンポジウム「ひと花と心」をテーマに、お笑い芸人、漫才師、歌手、ダンサーなど、様々な分野のアーティストが参加しました。会場は、大田区立大田区民センターで、大田区民センターのホールで開催されました。当日は、お天気に恵まれ、多くの方々が参加されました。会場は、大田区民センターのホールで開催されました。当日は、お天気に恵まれ、多くの方々が参加されました。

ひと花新聞

第20号

平成27年3月1日

発行 NPO法人ひと花センター

〒112-0016 大田区西成区民センター

1・2・19

電話 03-6649-7800

ひと花新聞

第20号

平成27年3月1日

発行 NPO法人ひと花センター

〒112-0016 大田区西成区民センター

1・2・19

電話 03-6649-7800

ひと花新聞

第20号

平成27年3月1日

発行 NPO法人ひと花センター

〒112-0016 大田区西成区民センター

1・2・19

電話 03-6649-7800

ひと花センターは西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業として、平成25年7月1日からスタートしています。

第20号

ひと花新聞

平成27年3月1日

ひと花新聞

地域活動

ひと花新聞の「地域活動」は、毎月15日（日）に開催されています。今回は、シンポジウム「ひと花と心」をテーマに、お笑い芸人、漫才師、歌手、ダンサーなど、様々な分野のアーティストが参加しました。会場は、大田区立大田区民センターで、大田区民センターのホールで開催されました。当日は、お天気に恵まれ、多くの方々が参加されました。会場は、大田区民センターのホールで開催されました。当日は、お天気に恵まれ、多くの方々が参加されました。

ひと花新聞

第20号

平成27年3月1日

発行 NPO法人ひと花センター

〒112-0016 大田区西成区民センター

1・2・19

電話 03-6649-7800

ひと花新聞

第20号

平成27年3月1日

発行 NPO法人ひと花センター

〒112-0016 大田区西成区民センター

1・2・19

電話 03-6649-7800

ひと花新聞

第20号

平成27年3月1日

発行 NPO法人ひと花センター

〒112-0016 大田区西成区民センター

1・2・19

電話 03-6649-7800

ひと花センター ホームページ開設しました。ブログ更新中！ぜひのぞいてみてください！ <http://hitohanap.org/about/>

118 ひと花新聞 第20号

ひと花新聞 第20号 119

ひと花センターの1年

2014

3月 プロポーサル結果により 平成26年度 事業受託決定

4月 柏原市、雁多尾畑にて農作業がスタート 3000㎡の広い土地での作業。

5月 北津守未利用地にてひまわり迷路づくりスタート

6月 プレーパーク第1回目 ウォータースライダー制作

西成区保健福祉センター分館 看板制作 木の板にみんなで文字を彫りました。

7月 ひと花センター 開所一周年

登録者Fさんが亡くなり葬儀を出す 今宮ふれあい会館にて。たくさんの人で見送りました。

廣田神社 みこし担ぎ

8月 北津守未利用地ひまわり迷路完成 真夏の暑い中で作業。こどもたちの喜ぶ姿に感動。

西成区民まつりで野菜提供

西成情報アーカイブにて就業体験がスタート

ねぶた作家対馬昭さんと釜ヶ崎ねぶた作成

9月 ひと花笑劇団「人生双六」今宮三世代祭にて上演 今までで一番大きな会場での公演。

ひと花笑劇団 横浜トリエンナーレにて劇上演 メンバー Oさんは、靴下と歯ブラシだけの手荷物で2泊3日の旅へ出発。

10月 萩之茶屋文化祭「ひと花音頭」お披露目

萩之茶屋小学校運動会準備、玉ころがしに参加

11月 西成区緑化リーダー講習 参加メンバーは花咲か爺さんを自負。

近江八幡NOMA美術館 高齢者による美術展「老人快走録」鑑賞 70代、80代の方の作品に刺激を受ける。

12月 キラッと光るイマナリエ イルミネーション作成

地域開放日「ひと花ゆめひろば」に易者サンタが登場

お正月の門松制作 西成消防署へ贈呈 3対6個の門松をつくりました。

天下茶屋東未利用地整備

2015

1月 tecoLLC代表 立木祥一郎さんと仕事づくりワークショップ

美術の時間「ひと花センター壁画」完成 約1年をかけて作った壁画。ひと花センターのシンボリック存在に。

2月 ひと花プロジェクトシンポジウム開催 ゲストトークの記録は P32～

ひと花笑劇団 新作劇「愛情航路」上演

3月 平成26年度 ひと花センター調査実施 結果報告は P36～

平成27年度 プロポーザル

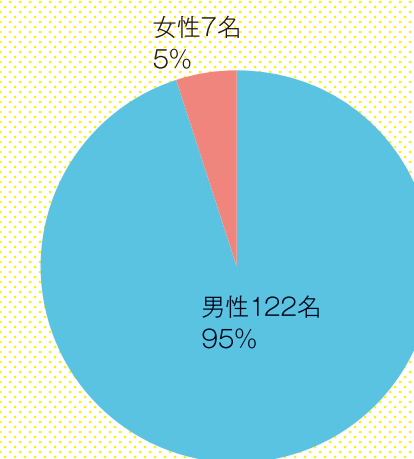
ひと花プロジェクト データベース2014

総参加者数 12,098名

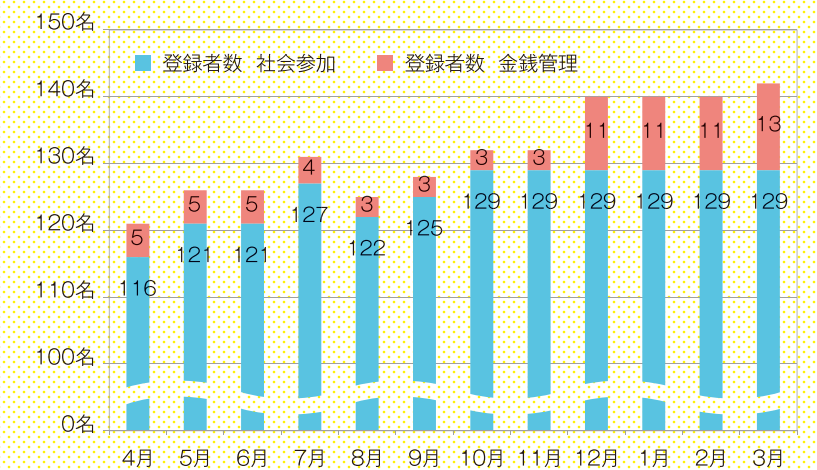
総プログラム数 1,542回

登録者数 129名 男122名 女7名（2014年3月末時点）

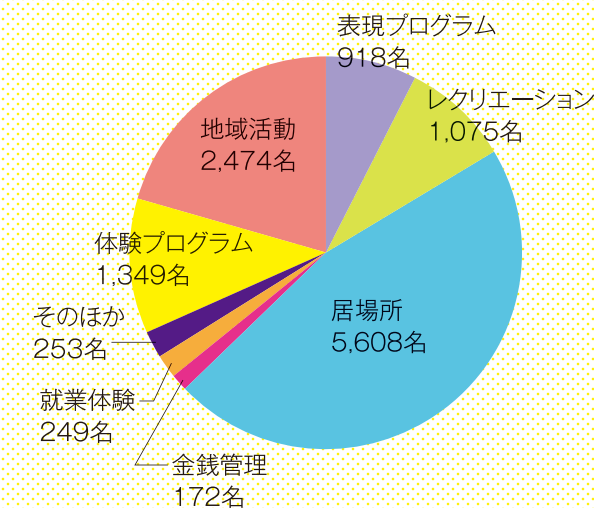
登録者数 男女比



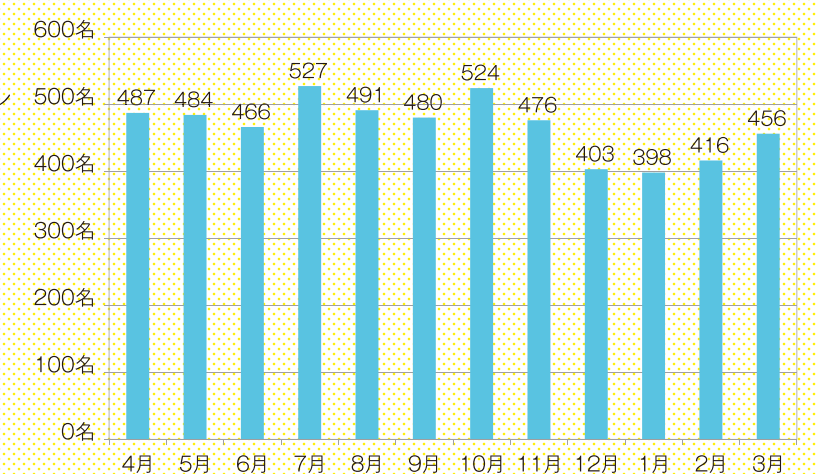
登録者数 月別推移



プログラム別 参加人数



来所者数 月別推移



ひと花音頭

♩ = 95



ここはひと花 ゆめひろば
こりゃこりゃ

ここはひと花 いろいろあるよ
いろいろ

ういたういたの手拍子で
うまいうれえしやさつまいも

あたりはずれの火曜日に
かぜもふくふく路地裏の

けしきはよしや
つきよにはゆるひと花畑
こりゃこりゃ

ラジオのうたに
なつかしき 思い出うかぶ
いろいろ

あなたもわたしも手に手をとって

あなたもわたしも足なみそろえて

つながりもって歩こうよ
さあさ うたおう ひと花音頭

あしたに向かって歩こうよ
さあさ うたおう ひと花音頭

さあさ おどろう ひと花音頭
こりゃこりゃ

さあさ おどろう ひと花音頭
いろいろ

ひと花音頭

作詞：「詩の時間」参加メンバー、上田假奈代
作曲：「じゆうな音楽」参加メンバー、ひきたま
編曲：ひきたま
踊り：「からだところをほぐす」参加メンバー、エメスズキ



2014年度 西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業
ひと花プロジェクト 事業報告書

発行日：2015年3月31日

デザイン：高草建
イラスト：吉岡浩幸
調査ページ制作：稲田七海、水内俊雄、(有)地域・研究アシスト

編集・発行：ひと花プロジェクト連合体

〒557-0016 大阪市西成区花園北1-2-19

電話：06-6649-7890 FAX：06-6649-7891

HP：http://www.hitohanap.org/

ひと花センターは
2015年7月に移転しました
〒557-0002 大阪市西成区太子1-13-15
(旧東田保育所)
電話、ファックス番号は変更ありません

